

コロンビア国
国内避難民等社会的弱者に対する
栄養改善プロジェクト
終了時評価報告書

平成 21 年 10 月
(2009 年)

独立行政法人 国際協力機構
農村開発部

農 村
J R
09-071

コロンビア国
国内避難民等社会的弱者に対する
栄養改善プロジェクト
終了時評価報告書

平成21年10月
(2009年)

独立行政法人 国際協力機構
農村開発部

序 文

独立行政法人国際協力機構は、コロンビア共和国（以下、「コロンビア国」）政府からの技術協力要請を受け、同国において「国内避難民等社会的弱者に対する栄養改善プロジェクト」を2006年5月31日から3カ年の計画で実施してきました。

プロジェクトの協力期間の終了を2009年5月に控え、当機構は2009年4月12日から同年5月1日までの間、国際協力専門員 清家政信を団長とする終了時評価調査団を現地に派遣し、コロンビア国側評価チームと合同で、これまでの活動実績等について総合的評価を行いました。これらの評価結果は、日本国・コロンビア国双方の評価委員による討議を経て、合同評価報告書としてまとめられ、署名交換の上、両国の関係機関に提出されました。

本報告書は、同調査団による協議結果、評価結果を取りまとめたものであり、今後プロジェクトの実施にあたり広く活用されることを願うものです。

終わりに、本調査にご協力とご支援を頂いた内外の関係各位に対し、心から感謝の意を表します。

平成21年10月

独立行政法人国際協力機構
農村開発部
部長 小原 基文

目 次

序文

目次

プロジェクト位置図

略語一覧

評価調査結果要約表

第1章 終了時評価調査の概要	1
1-1 調査団派遣の経緯と目的	1
1-2 合同評価委員の構成	1
1-2-1 日本国側	1
1-2-2 コロンビア国側	1
1-3 評価調査日程	2
1-4 主要面談者	2
第2章 終了時評価調査の方法	3
2-1 評価実施方法	3
2-2 用語の定義	4
2-3 評価のデザイン	4
2-4 情報の収集	6
2-5 分析及び協議	6
第3章 終了時評価結果	7
3-1 投入実績	7
3-1-1 日本国側の投入実績	7
3-1-2 コロンビア国側の投入実績	7
3-2 活動実績	8
3-2-1 成果1に関する活動	8
3-2-2 成果2に関する活動	10
3-2-3 成果3に関する活動	10
3-3 実施プロセス	11
3-3-1 プロジェクトの実施体制	11
3-3-2 技術移転の方法	14
3-3-3 その他	14
3-4 成果達成状況	16
3-5 プロジェクト目標達成状況	17
3-6 上位目標達成状況	17

3-7	評価5項目による評価	18
3-7-1	妥当性	18
3-7-2	有効性	21
3-7-3	効率性	22
3-7-4	インパクト	22
3-7-5	自立発展性	23
3-8	結論	24
第4章	教訓	26
第5章	提言	27
5-1	ボゴタ市植物園に対する提言	27
5-2	ボゴタ市役所に対する提言	27
5-3	都市農業者全般に対する提言	27
5-4	JICA に対する提言	28
第6章	団長所感	30
付属資料		33
1.	調査団日程	35
2.	ミニッツ	37
3.	合同評価報告書ーミニッツ添付資料ー (和文)	117
	添付資料	147
1.	PDM バージョン2	149
2.	PO バージョン2	151
3.	評価グリッド	155
4.	投入実績	171
5.	実施機関組織図	177
6.	面会者リスト	179

プロジェクト位置図

コロンビア国



ボゴダ市



略 語 表

略語	英文／西文	和 文
CODHES	--- / Consultoría para los Derechos Humanos y el Desplazamiento	人権保護団体
COP	Columbia Peso / Pesos Colombianos	コロンビアペソ
FAO	Food and Agriculture Organization of the United Nations / Organización de las Naciones Unidas para la Agricultura y la Alimentación	国際連合食糧農業機関
INS	--- / Instituto Nacional de Salud	国家保健期間
IPES	--- / Promoción del Desarrollo Sostenible	ペルーの NGO
JBB	--- / Jardín Botánico Jose Celestino Mutis	ボゴタ市植物園
JICA	Japan International Cooperation Agency / Agencia de Cooperación Internacional del Japón	独立行政法人国際協力機構
PDM	Project Design Matrix / Matriz de Diseño del Proyecto	プロジェクト・デザイン・ マトリックス
PLSD	Participatory Local Social Development / Desarrollo Local Social Participativo	参加型地域社会開発
PO	Plan of Operation / Plan de Operación	活動計画
R/D	Record of Discussion / Registro de Discusiones	討議議事録
RESA	--- / Red de Seguridad Alimentaria	食糧安全保障ネットワーク

終了時評価調査結果要約表

作成日：2009年5月20日
 担当部：農村開発部

1. 案件の概要	
国名：コロンビア国	案件名：国内避難民等社会的弱者に対する栄養改善プロジェクト
分野：平和構築 — 社会的弱者支援	援助形態：技術協力プロジェクト
所轄部署：農村開発部畑作地帯グループ 畑作地帯第一課	協力金額：約 1.06 億円（終了時評価時点）
協力期間	(R/D)：2006年5月31日～ 2009年5月30日（3年間）
	相手国実施機関：ボゴタ市植物園 日本国側協力機関：無し
1-1 協力の背景と概要	
<p>コロンビア国では、左翼系ゲリラ組織、極右民兵組織、国軍との間で過去 40 年間にわたり内戦状態が続いている。現ウリベ政権は治安回復を政策の重要テーマとして位置付け、その対策に取り組んでいる。その結果、主に地方部で左翼系ゲリラ、極右民兵組織の対立及び各組織と国軍との衝突が激化し、地方部の農民等の社会的弱者が故郷や土地、財産を捨て、安住の地を求め国内避難民化している。国内避難民の数は年々増加しており、人権保護団体である <i>Consuloria para los Derechos Humanos y el Desplazamiento (COHDES)</i> の発表では、1985 年から 2005 年 9 月末までに発生した国内避難民数は約 360 万人であり、一方、大統領府が 2005 年 11 月末までに国内避難民登録した人数は約 170 万人である。政府発表では、登録者の内、約 10 万人がボゴタ市に避難しており、ボゴタ市在住の国内避難民の多くは社会的弱者が集まる南部に住んでいる。ボゴタ市の国内避難民を含む社会的弱者の栄養状況は一般的に悪く、案件要請当初は <i>Bogota sin Hambre</i>（ボゴタからの飢餓の追放：現在は政権の交代に伴い <i>Bogota bien Alimentada</i>（食の行き届いたボゴタ）に変更）という施策に基づいて、コミュニティ・キッチン¹等を通じた彼らの栄養改善プロジェクトと、社会経済、文化、環境及び食糧安全保障の改善に資することを目的とした都市農業プロジェクト（以下、「プロジェクト 319」）を実施している。かかる状況下、コロンビア国政府は日本国政府に対し、都市農業の技術普及支援を通じた、コミュニティ・エンパワメントを目的としたプロジェクトに対する協力を要請した。この要請を受けて、JICA は 2006 年 6 月より 3 年間の予定で、ボゴタ市植物園をカウンターパート機関とし、プロジェクト 319 と連携して、プロジェクト 319 に不足している普及技術の向上等の観点から、技術協力プロジェクトが実施された。</p>	
1-2 協力内容	
(1) 上位目標：都市農業の強化を通じて、ボゴタ市の国内避難民を含む社会的弱者の栄養摂取状況が改善される。	
(2) プロジェクト目標：都市農業の強化を通じて、サン・クリストバル区の国内避難民を含む社会的弱者の栄養摂取状況が改善される。	
(3) プロジェクト成果	
成果 1：ボゴタ市植物園の都市農業に関わる能力が強化される。	
成果 2：対象住民の都市農業に関わる能力が強化される。	
成果 3：区の都市農業活動の持続性を確保するために、コミュニティにおける組織枠組みが強化される。	
(4) 投入（評価時点）	
日本国側	
長期専門家派遣：プロジェクト運営管理/コミュニティ・エンパワメント専門家 1 名（2006～2009 年度）	
機材供与：オフィス機材 約 588 万円 ²	
研修センター建設 約 992 万円 ³	
本邦研修：2006 年度：2 名（集団研修「参加型地域社会開発の理論と実践」）	
2007 年度：1 名（地域別研修「小規模農民支援有機農業普及手法（中米カリブ地域）」）	
2008 年度：2 名（上記 2 種の研修について各 1 名）	

¹ ボゴタ市が、市内の約 350 カ所で約 50 万人の国内避難民を対象に昼食の提供を行っている。

² 合計 116,256,518 コロンビアペソを、各投入が実施された年月の JICA 予算統制レートを用いて日本円に換算した。

³ 合計 177,137,733 コロンビアペソを、各投入が実施された年月の JICA 予算統制レートを用いて日本円に換算した。

相手国側：

カウンターパート配置：プロジェクト・ダイレクターに園長、プロジェクト・マネージャーに技術活動部長、実際の活動に従事するカウンターパートとしてボゴタ市植物園の都市農業普及プロジェクト（プロジェクト 319）のために雇用されている契約職員（プロジェクトリーダー1名、サン・クリストバル区の地区アドミニストレーター1名、農業試験専門職1名、教育専門職1～2名、普及員3～4名等、2008年5月からは栄養専門職2名）

プロジェクト運営費：約470万円⁴

その他、専門家執務室及び活動に必要な主な資機材等

2. 評価調査団の概要

調査者	(担当分野：氏名 職位)	
	団 長：清家政信 JICA 国際協力専門員 計画管理：橋本洋平 JICA 農村開発部畑作地帯第一課職員 評価分析：大橋由紀 株式会社インターワークス *コロンビア国側からも7名の評価調査団員が配置され、合同で評価を実施。	
調査期間	2009年4月12日～2009年5月1日	評価の種類：終了時評価

3. 評価結果の概要**3-1 実績の確認****(1) 成果の達成状況****成果1：ボゴタ市植物園の都市農業に関わる能力が強化される。**

栽培技術マニュアル⁵は、国際農民交流会において JICA からボゴタ市植物園に引き渡された。都市農業社会開発マニュアル⁶は、5月中旬の納品を目的に印刷・製本中である。

栽培技術マニュアルについては、ボゴタ市植物園がボゴタ市において都市農業に携わるようになってから、現在までの4年間で作り上げてきた適正技術を分かりやすく取りまとめたものであり、関係者からは使いやすい必要事項を網羅していると評価されている。都市農業社会開発マニュアルについても、マニュアルで紹介している手法や技術は、サン・クリストバル区で、実際に都市農業普及活動を通して実証した内容であり、本手法の研修やコミュニティでの適用に従事したカウンターパートからは、より良いコミュニティとの関係作りや、住民の参加・積極性の促進、組織の形成等に非常に有効であると好評を得ている。

成果2：対象住民の都市農業に関わる能力が強化される。

インパクト調査によれば、ベースライン調査結果と比較して対象住民の栽培面積が32.1%増加しており、指標は達成された。技術の普及に従事してきたカウンターパート達からは、一様に住民は都市農業の栽培技術を習得してきているとの意見が聞かれた。狭いスペースを活用する新しい栽培方法が住民の間で活用されている様子は、本調査の現場視察でも確認された。料理、食品加工及び栄養に関わる能力についても、研修を受けた住民は、程度はそれぞれ異なるものの、家庭生活で実践しつつあることが、カウンターパートの報告や住民へのインタビューから確認できた。

成果3：区の都市農業活動の持続性を確保するために、コミュニティにおける組織枠組みが強化される。

サン・クリストバル区の都市農業円卓会議は、2008年には11回開催され、常に10以上の組織が参加したことから、指標は達成された。プロジェクトが実施した円卓会議でのワークショップや、住民グループの事業能力強化研修を通じて、住民同士のつながりが強化され、2009年1月の時点では8グループが事業を実施していることが明らかになっている。また、区内の住民グループ間及びこれらグループと地域行政間の連携は、円卓会議が機能するようになったことで強化された。その結果、円卓会議により様々な活動や行事が企画・実施されており、都市農業円卓会議を通じた関係者間の連帯関係が確立したと判断できる。

⁴ 総額 892,229,396 コロンビアペソを、各年度の JICA 予算統制レート 12 カ月分の平均値を用いて日本円に換算した。2006 年度 COP1=0.04992¥、2007 年度 COP1=0.05733¥、2008 年度 COP1=0.05075¥

⁵ PDM には「農業栽培マニュアル」と記載されているが、スペイン語表記 (Manual de tecnología de siembra) に合わせて訂正した。

⁶ PDM には「社会学的手法マニュアル」と記載されているが、作成されたマニュアルの名称に合わせて訂正した。

(2) プロジェクト目標達成状況

プロジェクト目標：都市農業の強化を通じて、サン・クリストバル区の国内避難民を含む社会的拍車の栄養摂取状況が改善される。

ボゴタ市植物園では、伝統的な野菜で近年栽培がされていなかった野菜6種を導入し、その内4種（キヌア、クビオス、イビアス、ペピノ・ドゥルセ）が定着したことから、ベースライン調査で消費が確認された野菜29種がインパクト調査では33種に（13.7%増加）なった。また、インパクト調査では、野菜の消費量について消費頻度を代替指標として計測している。高頻度消費類型（消費回数5-7回/週）の野菜、中・低頻度消費類型（消費回数2-4回/週は中頻度、0-1回/週は低頻度）の野菜について、それぞれ12～14%、8～12%の増加が確認されているので、プロジェクト目標は概ね達成された。

(3) 上位目標達成状況

上位目標：都市農業の強化を通じて、ボゴタ市の国内避難民を含む社会的弱者の栄養摂取状況が改善される。

今までに、ボゴタ市植物園のプロジェクト319や他の機関によって、ボゴタ市のサン・クリストバル区以外の地域（居住区の階層1～2）でも都市農業が普及されているが、その結果、今までに住民の栄養状態がどの程度改善されたかについては評価されておらず、数値データは存在していない。しかし、プロジェクト目標が概ね達成されていること、プロジェクト319が、少なくとも現ボゴタ市政府が継続する2012年までは実施されることが担保されていること等から、上位目標が達成される見込みは高い。一方、住民の栄養状態の改善を確認するための数値データについては、INSが2010年に実施予定の野菜の摂取状況調査等を、代替指標として利用することを検討する必要がある。

3-2 評価結果の要約

(1) 妥当性

本プロジェクトは、ターゲットグループのニーズや、コロンビア国やボゴタ市の政策、日本のODA政策との整合性、手段としての適切性、他機関との連携状況、導入した技術の適合性等の面から妥当であった。一方、本プロジェクトは、①外部条件の設定、②各目標の指標の設定、③都市農業と栄養改善の関係性、④栄養改善関連活動への投入、といった面で、プロジェクトの計画における妥当性が十分ではなかった。

(2) 有効性

本プロジェクトは、栽培技術、普及技術、栄養教育の点から、実施機関の能力強化と、対象地域の受益者支援を行い、併せて、都市農業円卓会議の機能強化によって対象地域の自立発展を促進した。これらの活動の結果、プロジェクト目標は達成されており、有効性は高い。

(3) 効率性

本プロジェクトは、実施機関がボゴタ市やサン・クリストバル区から予算を得て実施しているプロジェクト319を、技術的に支援するプロジェクトであったことから、効率性は概して高かった。一方、ボゴタ市植物園のマネジメントレベル、実施運営レベルの双方において実施体制が不安定であり、人材の交代が多く発生したこと、「栄養改善」に関する投入が計画時に具体化されていなかったこと等により、必要な人材を適切なタイミングで活用することが困難であった。

(4) インパクト

本プロジェクトの成果を、今後プロジェクト319が他地域での活動に活用することで、上位目標の達成が見込まれている。波及効果としては、対象地域のコミュニティの社会統合に貢献していることが確認されており、他地域でも同様の活動を取り入れることで、インパクトの拡大が期待できる。

(5) 自立発展性

プロジェクト319の継続は2012年までは決定しており、ボゴタ市植物園は本プロジェクトの成果を積極的に活用する意向であることから、政策・財政面では当面の持続性は担保されている。一方、ボゴタ市植物園運営陣の交代や、技術移転を受けたカウンターパートの退職（あるいは契約の打ち切り）が頻発したが、プロジェクト319の人材が、現在のそれぞれの所属組織で導入した技術を活用していくことで、自立発展性は更に高まることが期待できる。

3-3 効果発現に貢献した要因

- ・決められたプロジェクトの枠組み・デザインの中で、専門家が関連機関との協力関係作りに成功し、普及技術・栄養改善の面の技術強化に貢献したこと。
- ・プロジェクトが導入した技術を、カウンターパートが積極的に吸収し取り組んでいること。
- ・ボゴタ市植物園に不足していた栄養に関する専門的な知見につき、INSの協力を得ることができ、ベースライン及びインパクト調査、栄養改善研修モジュールの作成が可能になったこと。

3-4 問題点及び問題を惹起した要因

- ・実施体制が不安定である上に、外部条件にある人員の交代が頻発したことで混乱が生じ、活動全般に影響を及ぼした。
- ・「妥当性」で述べたように、計画の妥当性が十分ではない点があったため、プロジェクト形成時点に「栄養改善」に関わる投入が具体化されていなかったため、プロジェクト前半では具体的な活動が実施できなかった。

3-5 結論

本プロジェクトは、専門家の柔軟かつ適切な対応、カウンターパートの積極的な取り組み、INSをはじめとする協力機関の支援により、人的投入面や計画の具体性が不十分であった等の困難にもかかわらず、対象地域において成果を発現している。栄養改善を目的とした都市農業の実施といった目標設定の面では、指標の設定が難しく、限定的な定義における成果を図るに留まったが、都市農業の普及活動に栄養教育を導入することで、さらにプロジェクト目標の達成に貢献できたと言える。また、普及技術の移転や、住民組織及びその他関連機関の連携を強化する活動によって、社会統合、地域コミュニティの育成という面で大きく貢献したことは特筆すべき点である。

ボゴタ市植物園をはじめとする関係者は、今後も都市農業の普及に取り組むことに意欲を示しており、活動の継続・発展が期待できる。一方で、人材交代の影響により、プロジェクトが導入した技術や手法、栄養改善のモジュール等が、今後どのように活用されていくかが具体化されておらず、ボゴタ市植物園をはじめ関連機関での活用を進めるための、具体的な方策の検討が必要となっている。

3-6 提言（当該プロジェクトに関する具体的な措置、提案、助言）

ボゴタ市植物園に対する提言

(1) 本プロジェクトの成果の活用（プロジェクト中に対応）

ボゴタ市植物園の普及員が新規で採用された際に、本プロジェクトで導入したマニュアルやモジュールを活用して研修を行うことが、彼らの業務を標準化するために有益なツールであると言える。これらのツールを活用した研修体制を内部制度化することにより、普及員が交代した場合も、業務の質を一定水準に保つことが可能となることから、本プロジェクトで作成された成果品や、技術移転がなされた人材の活用方針を早期に検討し、実践に移す必要がある。

また、インターネット上で公開されている都市農業ホームページにこれらの成果物を掲載し、新たな関連情報等を定期的にアップデートすることにより、コロンビア国全土の都市農業関係者への情報発信機能が充実すると期待される。

(2) 栄養改善のための専門知識の重要性（継続）

今後も都市農業の栄養改善に関する効果を高めるためには、INSと連携して行ったベースライン調査と、インパクト調査や栄養教育のモジュール作成の経験を、普及活動に反映させることが重要である。また、INSをはじめとする、栄養学の専門知識を持つ組織との協力関係を持つことが望ましい。

(3) サン・クリストバル区に対するモニタリング（早期に対応）

サン・クリストバル区では住民グループや連携体制が強化されてきたが、これらの成果の自立発展性を高めるために、SESPA (Sistema de Evaluacion, Seguimiento y Monitoreo) の効果的な活用を念頭においた定量的、定性的なモニタリングとフォローアップ体制を具体化する必要がある。

(4) 上位目標の代替指標

「2014年までに、ボゴタ市の貧困者居住区 (estrato1、2及び3) 住民の消費する野菜の量が3%増加する。」という指標に対しては、野菜の消費量を定期的に調査している機関は存在していないため、以下の指標を代

替案として提案する。

- ①プロジェクト 319 で実施する栄養改善研修を 7,000 人が受講する。研修では本プロジェクトで作成された栄養改善研修モジュールを活用することとする。
- ②2010 年に INS が実施する微量栄養素に特化した調査に含まれる指標。

ボゴタ市役所に対する提言

(1) 都市農業政策と土地利用計画

ボゴタ市役所が、環境局、計画局、ボゴタ市植物園を通じて、都市農業政策形成のプロセスを推進し、土地利用計画の見直しと調整において都市農業に必要な配慮を行うことが必要である。

都市農業関係者全般に対する提言

(1) プロジェクトで実証した普及アプローチの活用（早期に対応）

本プロジェクトで導入した普及手法は、都市農業の持つ社会統合機能を高めるうえで優れた効果を持っているため、都市農業関係者に対して、①これら人材を含めた都市農業普及員ネットワークを形成し、情報交換や経験の共有を進めること、②プロジェクトが作成した普及マニュアルを広く活用すること、を提言し、ボゴタ市の各区で円卓会議の機能化が進むことを期待する。

(2) 都市農業についての共通理解の形成（早期に対応）

ボゴタ市の土地利用計画をレビューするにあたり、各人各様の都市農業に対するイメージを持っている現状を改善し、建設的な展開に結びつけるために、都市農業の意義を明確にし、関係者間で共有した上で議論を進めることが望ましい。

(3) 都市農業の普及における栄養教育の重要性（継続）

栄養教育の有効性は本調査においても確認されており、この目標を達成するためには、都市農業技術、栄養教育の知見、普及技術の 3 つの要素からのアプローチが必要であり、各機関の強みを他の機関が活かせるように、関係の強化がなされることが望ましい。

(4) コミュニティと区・市の関係強化（早期に対応、中長期に継続）

コミュニティの取り組みが上位レベルの政策に反映されるために、区レベルの都市農業円卓会議と食の安全保障に関する区委員会及び市委員会の間に、直接的なコミュニケーションルートを確立する必要がある。

JICA に対する提言

(1) 研修員ネットワークへの支援（早期に対応、中長期に継続）

本プロジェクトで研修に参加したのは単年度契約のカウンターパート達であり、現在はそのほとんどが、ボゴタ市植物園との雇用関係はない。本件が残した人材育成の成果を持続発展させ、さらに都市農業に関わる機関同士の横の連携を促進する意味においても、必要に応じて帰国研修員を中心とするネットワークへの支援を提供することが、国内避難民や帰還兵士の社会統合という、コロンビア国の国家的課題への JICA の継続的貢献に繋がると期待できる。

(2) 調査報告書等の成果物の和文・英文要約の作成（早期に対応）

本プロジェクトで作成したマニュアル類、調査報告書等の成果物について、少なくとも和文、あるいは英文の要約を作成し、本部担当部をはじめとする JICA 関係者の利用に供することが望まれる。

(3) 事後評価の実施時期

本来このプロジェクトは、プロジェクト 319 を支援するプロジェクトである。プロジェクト 319 は、ボゴタ市の現政権内（2012 年まで）は継続が保証されているが、その後の展開は不明である。プロジェクト 319 の指標を活用して評価を行うためには、事後評価の実施は 2014 年ではなく、2012 年までの達成状況で測定することが望ましい。

3-7 教訓（当該プロジェクトから導き出された他の類似プロジェクトの発掘・形成、実施、運営管理に参考となる事柄）

(1) 円卓会議

地域住民同士が、そしてこれら住民と地域行政が、地域社会を構成する主体として意見を交換し、妥協点を探り、そして参加者が持つリソースを統合 (integrate) するための場を持つことは重要であり、サン・クリストバル地区の円卓会議がその機能を果たした。

(2) 都市農業の意義：栄養改善と社会統合→新たな都市社会の構築

多数の避難民の流入という社会環境においては、その社会的安定を図る上で、特殊な社会的装置が求められている。都市農業はその装置の一つとして、有効に機能し得ることが実証された。

(3) 栄養教育の重要性

都市農業の普及活動にあたって、栽培技術のみならず、栄養教育を組み合わせることで栄養改善にさらに効果的に貢献できることが、プロジェクトの取り組みから明らかになった。

(4) 実施機関の人員の交代

案件形成段階で人員の交代によるプロジェクトへの影響を最小限に留めるための工夫が必要であった。また、研修員の選定においても、帰国後の組織での活躍が担保されるための工夫が望まれた。

(5) 都市農業の性格を反映した成果指標の設定

本プロジェクトでは都市農業による栄養改善を目標としたが、都市農業で生産される野菜は必要な栄養の一部を補完する位置付けに過ぎないこと等を考慮すると、目標や指標の合理性を十分に説明できない。目標達成に向けたアプローチの性格を十分に分析した上で、成果指標が設定される必要があった。

以 上

第1章 終了時評価調査の概要

1-1 調査団派遣の経緯と目的

今般、プロジェクト終了の時期が近づいたことから、終了時評価調査団が派遣され、コロンビア共和国（以下、「コロンビア国」）側と合同評価を行うこととなった。

調査の目的は、「JICA 事業評価ガイドライン」に基づき、討議議事録（R/D）、プロジェクト・デザイン・マトリックス（PDM）、活動計画（PO）等のプロジェクト関連資料を参照しつつ、中間評価調査後のプロジェクトの進捗状況、目標の達成状況を、評価グリッド、質問票、関係者へのインタビュー等を通じて把握・評価し、上記で得られた評価結果を踏まえ、プロジェクト目標と上位目標を達成するために求められる事項を提言として取りまとめると共に、今後の類似プロジェクトの実施にあたって有用と考えられる教訓を導出し、これらを日本、コロンビア両国政府及び関係機関に報告することである。

1-2 合同評価委員の構成

1-2-1 日本国側

No.	氏名	担当分野	所属
1	きよか 清家 政信	総括	JICA 国際協力専門員
2	大橋 由紀	評価分析	株式会社インターワークス
3	橋本 洋平	計画管理	JICA 農村開発部畑作地帯第一課職員

1-2-2 コロンビア国側

No	氏名	所属	役職
1	Edna Rángel	ボゴタ市植物園 JBB (Jardín Botánico de Bogotá)	総務部長 Secretaría General
2	Yibby Forero Torres	国家保健機関 INS (Instituto Nacional de Saludo)	研究部長 Subdirectora de Investigación
3	Claudia Sánchez	IPES (Promocion de Desarrollo Sostenible)	環境部門コーディネーター Coordinadora de Gestión Ambiental
4	Rosángela Correa	社会統合と国際協力のための大統領機構 国際協力局 DCI (Dirección de Cooperación Internacional), Acción Social	顧問 Asesora
5	Jorge Ardila	社会統合と国際協力のための大統領機構 食糧安全保障ネットワーク RESA ((Red de Seguridad Alimentaria), Acción Social	顧問 Asesor
6	Juan Carlos Gutierrez	ボゴタ市環境局 SDA (Secretaría Distrital de Ambiente)	野生動植物専門職員 Profesional Especializado, Silvicultura Flora y Fauna Silvestre
7	Rodrigo Isaza	ボゴタ市国際協力局 Dirección Distrital de Relaciones Internacionales, Secretaría General	国際協力部長 Subdirector Cooperación Internacional

1-3 評価調査日程

調査期間：2009年4月12日～5月1日

総括、計画管理：2009年4月19日～5月1日

評価分析：2009年4月12日～5月1日

詳細日程は、付属資料1.調査日程を参照。

1-4 主要面談者

付属資料3の添付資料6を参照。

第2章 終了時評価調査の方法

2-1 評価実施方法

本評価調査は、JICAのプロジェクト・サイクル・マネジメント（Project Cycle Management：PCM）の評価手法を用いて実施した。PCMによる評価は、①プロジェクトの諸要素を論理的に配置したプロジェクト・デザイン・マトリックス（Project Design Matrix：PDM）に基づいた評価のデザイン、②プロジェクトの実績を中心とした必要情報の収集、③「妥当性」、「有効性」、「効率性」、「インパクト」、「自立発展性」の5つの評価の観点（評価5項目）からの収集データの分析、④分析結果からの提言・教訓の導出、という流れからなる。評価5項目については、表1に示す通りである。

表1 評価5項目

評価5項目	JICA 事業評価ガイドラインによる定義
妥当性	プロジェクトの目指している効果（プロジェクト目標や上位目標）が、受益者のニーズに合致しているか、問題や課題の解決策として適切か、相手国と日本側の政策との整合性はあるか、プロジェクトの戦略・アプローチは妥当か、公的資金であるODAで実施する必要があるか等といった「援助プロジェクトの正当性・必要性」を問う視点。
有効性	プロジェクトの実施により、本当に受益者もしくは社会への便益がもたらされているのか（あるいは、もたらされるのか）を問う視点。
効率性	主にプロジェクトのコストと効果の関係に着目し、資源が有効に活用されているか（あるいはされるか）を問う視点。
インパクト	プロジェクト実施によりもたらされる、より長期的、間接的効果や波及効果を問う視点。予期していなかった正・負の効果・影響を含む。
自立発展性	援助が終了しても、プロジェクトで発現した効果が持続しているか（あるいは持続の見込みはあるか）を問う視点。

出所：プロジェクト評価の手引き—改訂版JICA事業評価ガイドライン（2004年2月）

本評価調査で活用したプロジェクトのPDMは2008年5月に合同調整委員会で承認されたPDMバージョン2（V-2）である。



合同評価委員会



合同調整委員会

2-2 用語の定義

(1) 都市農業

本案件が取り扱う「都市農業」の形態は国や地域によって異なり、一般的な定義は存在していない。ボゴタ市では、政府や関係者間では都市部で行われている野菜・ハーブ・果物類の栽培活動を広く“*Agricultura Urbana*”と呼んでおり、本案件ではそれを日本語に直訳した「都市農業」という用語が使われてきた。現時点でのその栽培規模は、大部分は個人が家の庭先や居住スペースの一部などを活用した自家消費のための小規模の栽培である¹。本終了時評価において使用する用語「都市農業」は、このようなボゴタ市で一般的に見られる栽培活動を指す。



民家のテラスで行われている都市農業



共有地でグループにより行われている都市農業

(2) 国内避難民

ボゴタ市の「国内避難民」は、避難後間もない者から避難後10年以上経つ者まで状況は様々である。一方、都市農業プロジェクトに参加し、都市農業を行うためには定住している必要があることから、中間評価においては、「本プロジェクトで対象となる国内避難民は、転々とした生活を脱し定住生活を営み始めたグループとする」と定義されている。

(3) 栄養摂取改善

本プロジェクトが目標としている「栄養摂取改善」については、同じく中間評価において「研修、生産、食料栄養教育を含む、総合的な都市農業戦略を実施することにより、対象住民の消費する野菜の量と種類が増加すること」と定義されている。

2-3 評価のデザイン

評価のデザインにあたっては、討議議事録 (R/D)、PDM、活動計画表 (Plan of Operations : PO)、調査団報告書、プログレスレポート、その他プロジェクト関連文書等に基づき、評価グリッドを作成し、調査団内で合意した。主な評価項目は下表2に示す通りである。

¹ 本プロジェクトのインパクト調査 (2009年2月) を担当したINSの発表によると、プロジェクトに参加している都市農業従事者の78.7%が家族または個人で栽培をしており、38%がコミュニティのメンバーと一緒に栽培をしていると回答している。また、98%が自家消費、8%が販売を目的としていると回答している (複数回答)。

表2 主な評価項目

評価項目	評価設問	
	大項目	小項目
実績の検証	投入の実績は計画通りか	コロンビア側及び日本側の投入実績
	各成果は達成されたか	成果1～3の達成状況
	プロジェクト目標は達成される見込みか	プロジェクト目標の達成状況
	上位目標は達成される見込みか	上位目標の達成見込み
実施プロセスの検証	活動は計画通りに実施されたか	POや計画内容に照らし合わせた各活動の実績
	プロジェクトの実施体制に問題はなかったか	実施体制、関係者間のコミュニケーション、実施機関やカウンターパートのオーナーシップ、モニタリングの実施体制等
	技術移転の方法に問題はなかったか	技術移転の成果が確認できるか
	適切なカウンターパートが配置されたか	プロジェクトの実施において適切な人材が配置されたか
	ターゲットグループ・関係組織の参加度や認識は高いか	各関連組織や対象住民がプロジェクトの活動に十分に参加しているか
妥当性	必要性	プロジェクトはコロンビアの社会やターゲットグループのニーズに合致していたか
	優先度	コロンビアの開発政策や、日本のODA政策との整合性はあるか
	手段としての適切性	プロジェクトは開発課題に効果を生む手段として適切だったか
有効性	プロジェクト目標の達成	プロジェクト目標は達成されるか
	成果とプロジェクト目標達成の因果関係	成果はプロジェクト目標を達成するために十分であったか、外部条件の影響があったか、プロジェクト目標達成の阻害・貢献要因は何か
効率性	アウトプットの産出	アウトプットの産出状況は適切か
	活動とアウトプット産出の因果関係	アウトプットを産出するために十分な活動であったか、外部条件の影響はあったか
	投入のタイミング・質・量	活動を行うために過不足ない量・質の投入が、タイミングよく実施されたか
インパクト	上位目標達成の見込み	プロジェクトの効果として上位目標の発現が見込まれるか
	上位目標とプロジェクト目標の因果関係	上位目標とプロジェクト目標は乖離していないか、外部条件が満たされる可能性は高いか
	波及効果	上位目標以外の正負のインパクトは生じたか
自立発展性	政策・制度面	プロジェクト終了後も政策支援が継続するか、都市農業の普及のための関連規制・法制度は整備されているか
	組織・財政面	協力終了後も活動を継続するための組織能力・オーナーシップは十分か、予算はどの程度確保されているか
	技術面	プロジェクトが取り入れた技術は関係者から受け入れられているか、普及のメカニズムはプロジェクトに取り込まれているか
	社会・文化・環境面	女性、貧困層、社会的弱者、環境への配慮不足により持続的効果を妨げる可能性はないか

出所：本終了時評価評価グリッドから抜粋

2-4 情報の収集

現地調査では評価グリッドに基づき、以下の主な関係者から情報収集を行った。

表3 主な情報収集先

調査対象	プロジェクトとの関係	調査方法
間瀬専門家	長期専門家	聞き取り及び資料の提供
ボゴタ市植物園園長及び幹部	実施機関プロジェクト・ダイレクター、プロジェクト・マネージャー	聞き取り
ボゴタ市植物園サン・クリストバル区担当普及員、専門職員 ²	カウンターパート	アンケート、聞き取り
国家保健機関 (INS)	プロジェクトに対する栄養関連の協力提供	聞き取り及びインパクト調査情報の提供
ロサリオ大学	プロジェクトとの情報交換、研修への参加	聞き取り
サン・クリストバル区住民	受益者	聞き取り
サン・クリストバル区区長	プロジェクト対象地域の区長	聞き取り
Acción Social 国際協力局	プロジェクト監督官庁	聞き取り
Acción Social ReSA	全国規模で都市農業の普及を実施している	聞き取り
ボゴタ市環境局	ボゴタ市における環境分野の監督管理	聞き取り

2-5 分析及び協議

収集した情報は評価5項目に基づいて分析し、その結果から提言・教訓を作成した。なお、本終了時評価は、日本国側調査団とコロンビア国側評価委員からなる合同評価委員会において協議し、合意に至った。その内容は、付属資料の「合同評価報告書」に示すとおりである。

² 本調査実施中は職員の正式な雇用契約が締結されていなかった。さらに、プロジェクト期間中に重要な役割を担った人材の中には既に退職している人材もいるため、プロジェクト開始当初から2008年末までの間に本プロジェクトのカウンターパートとして従事した人材で、今回の聞き取り調査への協力を了解した人材(10名)に対し、調査を実施した。

第3章 終了時評価結果

3-1 投入実績

3-1-1 日本国側の投入実績

本プロジェクトで実施された、日本国側の投入実績の概要は、以下のとおりである。

(1) 長期専門家

プロジェクト開始から現在までプロジェクト運営管理/コミュニティ・エンパワメントの長期専門家1名が継続して派遣されている。

(2) 研修員受け入れ

5名のカウンターパートが、以下の本邦研修に参加した³。

No.	研修内容	参加人数
1	集団研修「参加型地域社会開発の理論と実践」	3名
2	地域別研修「小規模農民支援有機農業普及手法（中米カリブ地域）」	2名

(3) 資機材・インフラ整備費

車両1台のほか、コピー機・PC等のオフィス機器、デジタルカメラ等、合計116,256,518コロンビアペソ相当（約588万円⁴）の機材が供与されている。また、ボゴタ市植物園内に177,137,733コロンビアペソ相当（約992万円⁵）の研修センターが建設された。

(4) プロジェクト活動経費

総額385,626,644コロンビアペソ（約180万円⁶）が、在外事業強化費として投入されている。

3-1-2 コロンビア国側の投入実績

本プロジェクトで実施された、コロンビア国側の投入実績の概要は、以下の通りである。

(1) カウンターパートの配置

プロジェクト・ダイレクターに園長、プロジェクト・マネージャーに技術活動部長が配置された。実際の活動に従事したカウンターパート⁷であるボゴタ市植物園の職員の全員が、都市農業普及プロジェクト（プロジェクト319）のために雇用されている契約職員であり、プロジェクトリーダー1名、サン・クリストバル区の地区アドミニストレーター1名、農業試験専門職1名、教育専門職1~2名、普及員3~4名等である。2008年5月からは栄養専門職2名が雇用され、プロジェクト活動に従事した。

(2) プロジェクト運営費

2008年末までに、総額892,229,396コロンビアペソ（約470万円⁸）が投入されている。

³ この5名の他に、カウンターパート1名がプロジェクトの投入以外の枠組みで、JICAの本邦研修「農村農業（青年研修/中南米混成）」に参加した。

⁴ 日本円の換算は各投入が実施された年月のJICA予算統制レートを用いて計算した。

⁵ 同上

⁶ 同上

⁷ 本報告書内では、実際の活動に従事したカウンターパートであるボゴタ市植物園職員を、「カウンターパート」と呼ぶ。R/DではAcción Social職員もカウンターパートに含まれると記載されているが、実際の活動では含まれていない。

⁸ 日本円の換算は各年度のJICA予算統制レート12カ月分の平均値を用いて計算した。2006年度COP1=0.04992¥、2007年度COP1=0.05733¥、2008年度COP1=0.05075¥

(3) その他

専門家の執務室及び活動に必要な主な資機材が、ボゴタ市植物園から提供された。また、プロジェクト 319 の秘書及びボゴタ市植物園の運転手が、必要に応じて本プロジェクトの活動にも従事した。

3-2 活動実績

各活動の実施はプロジェクトを取り巻く環境に合わせて柔軟に実施されており、必ずしも PO で計画されたタイミングでの実施ではない活動もあったが、活動は概ね達成された。各活動の主な実績は、以下の通り。

3-2-1 成果1に関する活動

(1) ボゴタに適した都市農業技術改善への支援

ボゴタ市植物園では、プロジェクト 319 を開始した 2004 年からボゴタ市の地理的特性や対象住民の生活環境に合わせた栽培技術の開発を行ってきた。本プロジェクトでは、表 4 で示す近隣の都市農業実施国⁹での技術視察の実施や、表 5 で示す国内での栽培技術に関する研修、ボゴタ市植物園内の圃場の設置、研修センターの建設等によって、技術開発の支援を行った。また、普及員がこれらを通して得た技術を、現場で試用することにより技術の検証を行い、検証結果を反映した栽培技術マニュアルが完成した。

表 4 近隣諸国における研修

年度	コース名	開催日	期間	参加人数	対象者
2006	都市農業研修 (アルゼンチン)	8/6-13	8 日間	16	園長、部長、プロジェクト 319 関係者
2007	都市農業研修 (ペルー)	10/8-13	6 日間	6	植物園のサン・クリストバル区普及担当者
2008	都市農業研修 (キューバ)	11/11-14	4 日間	7	園長、部長、プロジェクト 319 リーダー

出所：専門家作成報告書

表 5 栽培技術に関する国内研修

年度	コース名	開催日	期間	参加人数	対象者
2008	栽培技術研修	5/12	1 日	14	植物園都市農業プロジェクト関係者
2008	垂直栽培研修	9/8	1 日	12	植物園都市農業プロジェクト関係者
2008	栄養及びポストハーベスト	10/27	1 日	17	植物園都市農業プロジェクト関係者

出所：専門家作成報告書

研修センターは 2007 年 3 月に竣工の計画であったが、投入計画には基本仕様の合意と建設許可手続き等に必要時間が見込まれていなかったため、実際の竣工は 2008 年 3 月となった。これによる他の活動の実施への直接的な影響はなかった。研修センターは竣工後すぐにボゴタ市植物園のプロジェクト 319 に引き渡され、プロジェクト 319 関連の研修や会議に活用されている。

⁹ 各国とも実施規模や「都市農業」に対する政府の政策等は、ボゴタ市の状況とは異なる。



プロジェクトが建設した研修センター



料理研修等で活用されている
研修センター内の様子

(2) コミュニティワークに関わる能力強化

「日本側の投入実績」の(2)研修員受け入れで示した5名が、本邦研修の参加型地域開発手法及び農業普及技術に参加し、コミュニティワークに関わる能力強化が行われた。国内では表6に示す研修が実施された。これらの研修にはカウンターパートのみならず、ボゴタ市植物園のその他の都市農業普及員や、他の都市農業関連機関からも参加を得た。研修の内容は、専門家が作成した都市農業社会開発マニュアルの草稿に基づいて実施された。同マニュアルは、研修の参加者の反応等から導入した手法の適用可能性や有効性を検証し完成され、5月中旬の納品を目途に印刷・製本中である。

表6 コミュニティワークに関わる国内研修

年度	コース名 (研修内容)	開催日	期間	参加 人数	対象者	備考等
2006	都市農業活動に関わる複数のアクターを巻き込んだ政策・施策の計画と実践	11/27-12/4	6日間	36	ボゴタ市植物園・ロサリオ大学の都市農業関係者、ボサ区の住民	IPES、ロサリオ大学との共同ワークショップ
2007	地域社会開発に基づくサン・クリストバル区都市農業活動計画研修	5/29-6/1	4日間	43	Acción Social、サン・クリストバル区役所、ロサリオ大学等の都市農業関係者、及び植物園のサン・クリストバル普及担当者	グアテマラ PROETTAPA プロジェクト関係者(専門家1名、C/P4名)参加
2007	普及員及びソーシャルワーカーを対象とした研修	6/4,6/25,7/9,7/30,9/10.	半年間	49 ~ 35	ボゴタ市植物園プロジェクト319関係者	
2007	社会分析に関わる研修	10/9-10	2日間	19	IPESの都市農業関係者及び植物園のサン・クリストバル区普及関係者	近隣国における研修の一環としてリマ市で実施
2008	普及技術講習会 - 住民の能力強化と試験研究の改善に向けて -	4/21, 4/28	2日間	33 27	ボゴタ市植物園プロジェクト319関係者	同じ内容の講習会を、2度実施した
2008	コミュニティ・エンパワメント研修	9/22,23,25,26	4日間	35	ボゴタ市植物園プロジェクト319関係者	

出所：専門家作成報告書

(3) 都市農業に関わる広報及び普及戦略の策定と実施

都市農業に関わる教材が整理され、データベースが作成された。また、広報や普及活動に活用するパンフレットやポスターが作成された。さらに、関係者が広く情報・意見交換を行うための都市農業ホームページが立ち上げられた。なお、本終了時評価調査中には国際都市農民祭が開催され、4,000人以上の参加を得て成功裏に終了した。

(4) ベースライン及びインパクト調査

栄養改善に関するベースラインと、インパクトを特定するための調査を実施するにあたり、ボゴタ市植物園には栄養改善関連部署が無く、かつ2008年5月以前には栄養分野の専門職員がいなかったことから、2006年7月より市役所保健局との協力関係の構築を試みたが、最終的に2006年12月に調整が不調に終わった。このためINSから支援を受けるための調整を行い、2007年5月頃より協力関係が成立し、この年の9月頃には継続的な支援が得られるようになった。その後ようやくINSの技術支援を受けてプロジェクトとともに、調査デザイン、ツールの作成、調査実施、分析が行われた。上述の理由から本活動の開始が遅れたため、ベースライン調査の報告書が完成したのは2008年末となった¹⁰。インパクト調査もINSが中心となって実施された。「4-2-2 成果2に関する活動(2)料理、食品加工及び栄養に関わる能力強化」に示す栄養教育が実施された後に調査を行う必要があったため、調査の実施時期が遅れが生じたが、2009年4月の国際都市農民祭の講演の中で、インパクト調査結果の分析内容が発表された¹¹。

3-2-2 成果2に関する活動

(1) 既存の都市農業の改善

受益者800人に研修及び普及活動を実施し、その経験を普及活動の改善のためにフィードバックする計画に対し、研修及び普及活動対象者の実績は、2007年:927人、2008年:921人であった。

(2) 料理、食品加工及び栄養に関わる能力強化

プロジェクト319では、従来料理・食品加工及び栄養に関わる能力強化は行っておらず、ボゴタ市植物園にはこの分野の専門職員がいなかった。プロジェクトの働きかけにより2008年5月に専門職員が雇用され、INSの協力を得て栄養改善研修モジュールの作成を開始した。そのため、栄養改善研修モジュールが完成したのは2008年の9月であり、2008年の残りの3カ月の間に237人に対して研修が実施された。目標受益者の数(800人)には至らなかったものの、3カ月間の活動実績としては十分な取り組みが行われたと言える。

3-2-3 成果3に関する活動

(1) 対象住民の事業形成能力の強化

対象地域で25の住民組織が確認され、2007年にその内の10組織、2008年に15組織に対して事業形成能力強化のための研修が実施された。研修の結果として、2009年1月時点で8グループが事業(主にグループでの野菜の共同生産・販売)を実施していることが確認されている。

¹⁰ ①2008年にボゴタ市植物園の都市農業プロジェクトの受益者となることが想定されている住民(200人)、

②2008年度内には受益者とならない住民(200人)、の2グループを対象に2008年5~6月にデータ収集が実施された。

¹¹ ①ベースライン調査時に受益者となることが想定されていた200人の内実際にプロジェクト活動に参加した住民(85人)、②ベースライン調査時に受益者とならないことが想定されていた200人の内、実際に受益者になっておらず再調査が可能だった住民(160人)、の2グループを対象に2009年2月にデータ収集が実施された。

(2) 区内及び区の領域を超えた単位の組織の参加に基づく、住民組織と行政組織等が交流できる場の振興と強化

サン・クリストバル区の都市農業円卓会議は、以前から存在していたものの機能不全に陥っていたため、2007年9月からプロジェクトが介入を開始した。まずワークショップを通して組織強化に関わる研修（議論におけるルールの設定等）を行い、参加型のツールを用いて円卓会議のベーシック・コンセプトを設定した（規範の設定）。その後、行事及び学習会の企画（参加型ワークショップ）・実施・研修等を通じて、参加者の能力強化や規範の定着を図った。最終的に、それまでボゴタ市植物園に全面的に依存していた「会議開催にかかわる会場予約」、「召集（参加者への電話連絡）」、「会議の司会」まで、全て住民が行うようになった。また、円卓会議の活動として行事の年間計画が立案され、薬草講習会、広報印刷物の発行及び都市農業祭が実施された。区内及び区外の都市農民の交流行事も6回実施された。これらの活動により、「住民によって組織された都市農業円卓会議が、区役所及びサン・クリストバル病院との連携の下に定期的に行事を実施する」という目標が達成されたと言える。

(3) ボゴタ市植物園が中心となって、食生活に関わる機関によって構成されるアドバイスチームを設立する

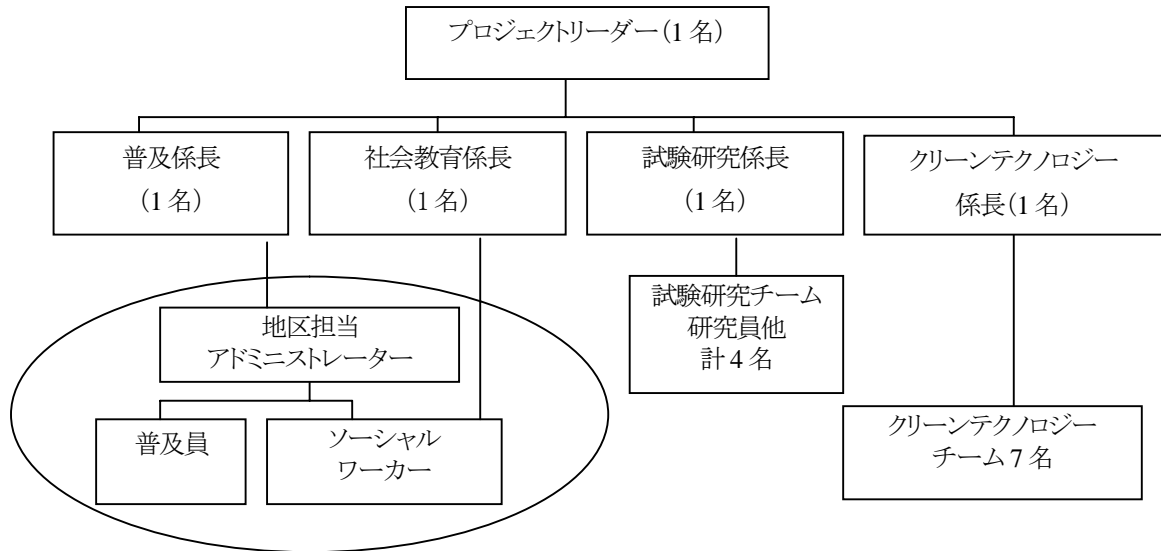
食生活測定に関わる測定ツールは、2008年5月にINSによって作成され、ベースライン調査に活用された。また、普及対象作物毎の特徴、栽培方法、料理方法を記入した、45作物分のパンフレットが作成され、普及活動に活用された。食生活に関わる機関との連携については、2008年の市長交代の影響により食の安全保障と栄養改善、もしくは都市農業に関わる行政組織の会議が実施されなかった。そのため、都市農業政策ラインに関わる提案作成ワークショップを6回実施するとともに、2009年4月に実施された国際都市農民交流会において、政策提言に向けたボゴタ市植物園の取り組み方針が発表され、関係機関との連携構築に向けてのボゴタ市植物園の取り組みが始まった。

3-3 実施プロセス

3-3-1 プロジェクトの実施体制

プロジェクト実施機関であるボゴタ市植物園では、ボゴタ市の出資の下、プロジェクト319を独自に実施しており、本プロジェクトは、プロジェクト319で活用されるべき栽培の適正技術や普及方法等の技術面を支援する形で実施されている。よって、本プロジェクトの技術カウンターパートは、プロジェクト319の実施のために雇われた契約職員である。都市農業の普及はボゴタ市植物園の正式なミッション¹²に含まれていないため、開始当初からプロジェクト319のために雇用されている人員は、全員契約職員であった。

¹² ボゴタ市植物園の正式なミッションは、環境の持続性を確保するための科学的な研究開発事業を行うこととなっている。

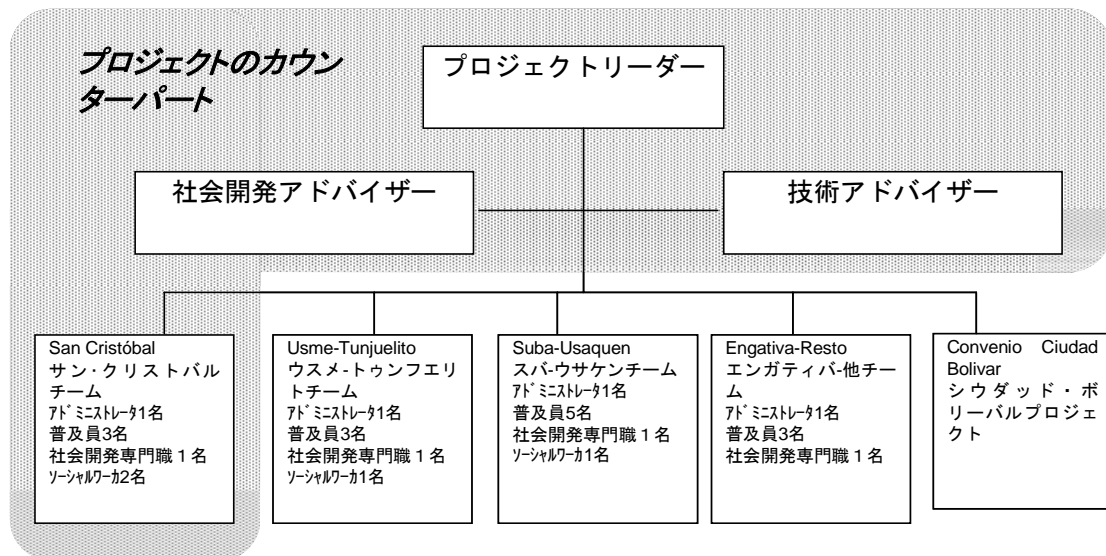


それぞれの地区（一つもしくは複数の区によって構成される）の普及チーム

319プロジェクト全体で
 地区アドミストレーター：7名
 普及員：33名
 ソーシャルワーカー：11名
 (06年7月現在)

出所：第1回技術協力プロジェクト実施運営総括表

図1 プロジェクト開始時のボゴタ市植物園の都市農業プロジェクト（プロジェクト319）の組織図



注：網掛けの部分がプロジェクトのカウンターパートであるが、その他の地域のチームもプロジェクトが実施する研修には参加した。

出所：専門家からの聞き取り調査により作成

図2 2008年2月の園長交代以降のプロジェクト319の組織図

(1) プロジェクトのマネジメントレベルの体制

プロジェクトに関わる意思決定はボゴタ市植物園の園長や幹部を含む体制で進められてきたが、実施期間中園長の交代が3度あり、その都度プロジェクト319の運営体制が変更され、活動が停滞する等の影響を受けた。また、その他のボゴタ市植物園の幹部（技術活動部長、プロジェクト・リーダー等）の相次ぐ交代に伴う移行期間や、カウンターパートの契約更新が行われる1～2カ月の間は空白期間となり、プロジェクト活動が停止する等、プロジェクトの運営に影響が生じた。人事の変遷については以下のとおり。

①ボゴタ市植物園長（RD 上は、Project Director）

06年11月、08年2月及び08年9月に交代

②技術活動部長（RD 上は、Project Manager）

06年11月及び08年9月に交代

③都市農業プロジェクト（プロジェクト319）リーダー

08年5月、09年1月及び09年3月に交代

④プロジェクト319 技術係長

06年12月に交代

⑤プロジェクト319 社会教育係長¹³

07年3月、08年9月に交代

⑥サン・クリストバル区担当アドミニストレーター及び現場普及員等

07年年頭に普及員2名の契約が結ばれなかった（1名は事実上の解雇）。

08年12月にチーム全体が交代。

⑦クリーンテクノロジー係長

08年2月にこの役職が廃止された。該当係長は退職。

(2) プロジェクトの実施運営レベルの体制

プロジェクトの通常業務実施に関わるマネジメントについては、2008年末まではプロジェクト319のリーダーと専門家が共同で実施してきた。その後は2009年5月のプロジェクト終了を目前とした3月に、新しいリーダーが就任したばかりであるため、マネジメント体制は確立されていない。

既述のように、カウンターパートは全員契約職員である。公共機関の予算や人員契約について定められている、法律に基づいた事務手続きに時間を要するため、例年12月に契約が切れたあと、1月～3月まで契約が交わされない。このためこの期間プロジェクトの活動が停滞した。特に2008年は、市長交代に伴い、一旦交わされた契約は6月～8月までで終了し、その後11月まで契約が交わされなかった。このため、プロジェクトで普及員等を雇用する、あるいはボランティア出勤しているカウンターパートに業務を依頼せざるを得ない、という事態が生じた。また、本邦研修に参加した5名のうち、2009年4月現在もカウンターパートである人材は、1名のみとなっている。

(3) 関係者間のコミュニケーション

各関係者間のコミュニケーションについては、専門家とカウンターパートの間は円滑に行われていた。専門家とボゴタ市植物園の幹部とのコミュニケーションについては、既述のとおりマネ

¹³ 当初は社会教育係長。08年より社会開発アドバイザーと改称。

ジメント体制が不安定であったため、必ずしも円滑には進まなかった。既述のプロジェクトの空白期間は受益者への支援も停滞することから、継続的なコミュニケーションを保つことが困難であった。JICA への報告は、専門家からの月毎の報告や合同調整員会での報告等で十分に行われた。プロジェクトの監督機関である **Acción Social** への報告は、同様に合同調整員会等の際に行われた。

(4) 活動・進捗状況のモニタリング

進捗や達成度のモニタリングについては、普及員と地区アドミニストレーターとの会合を週 1 回毎、2008 年 12 月まではプロジェクト・マネージャーと進捗管理を毎月、少ない時でも 3 カ月毎に 1 回実施し、専門家と共同でモニタリングを実施していた。ボゴタ市植物園への報告については、プロジェクト 319 のモニタリングプロセスに基づき、本プロジェクトの進捗報告も行われた。

3-3-2 技術移転の方法

本プロジェクトの技術移転は、本邦研修（「参加型地域社会開発の理論と実践」及び「小規模農民支援有機農業普及手法」）へのカウンターパートの派遣、ペルー、アルゼンチン、キューバでの都市農業研修の実施、コロンビア国内でのボゴタ市植物園の普及員や、その他の都市農業関係者に対する研修（栽培技術及び栄養に関する研修 3 回、コミュニティワークに関わる能力強化研修 6 回、サン・クリストバル区都市農業円卓会議強化ワークショップ等）を通して実施された。カウンターパートに対しては、これらの研修後に課題を出してサン・クリストバル区の現場で活用し、その結果を見直す方法で技術移転が行われた。

カウンターパートは、プロジェクトが導入した技術を積極的に取り入れて活動を行い、サン・クリストバル区における成果を上げている。しかし、プロジェクト当初から現在までカウンターパートであった人材は限られている。また、導入した技術を含めた普及員の活動のスタンダード化を図り、新しい普及員に技術を伝える方法を検討していたが、その役割を担う人材も 2008 年 11 月に退職してしまったため、停滞している。技術移転の内容を取りまとめたマニュアルが作成されており、今後の技術移転に活用できるが、ボゴタ市植物園内でマニュアルがどのように活用されていくかは、まだ具体的に検討されていない。

3-3-3 その他

(1) PDM の改訂

1) PDM バージョン 0 (V-0) からバージョン 1 (V-1) への改訂

プロジェクト開始当初より改正作業を開始し、2006 年 9 月までにプロジェクトとしての案 (V-0) を完成した。この案を基にして JICA 事務所等と調整を行い、この結果、2007 年 1 月 25 日の合同調整委員会で PDM 及び PO の V-1 の承認を受けた。

2) PDM V-1 から V-2 への改訂

2007 年 8 月の運営委員会で PDM V-1 及び PO V-1 改訂の必要性が指摘された。改訂が必要とされた理由は、「①プロジェクト実施機関（ボゴタ市植物園）が独自のプロジェクトとして実施している活動に関しては、JICA プロジェクトとして取り組む必要性が少ない」、「②区役所との活動上の役割分担の明確化が必要である」、「③成果 2 の活動の一部（住民組織強化関連）が PO V-1 では未確定であった」及び「④成果 3 の活動方針変更が必要である」等である。「④成果 3 の活動方針変更が必要である」に関しては、サン・クリストバル病院が 2006 年末をもって都市農業関連活動から撤退したこと等により、「区役所とボゴタ市植物園以外の関連機関を巻き込

んだ組織的活動を促進することによって、都市農業関連活動及び栄養改善活動の持続性を担保する」という、当初計画の実現が難しい事が明らかになったためである。このため、区の都市農業円卓会議の強化と、この会議と公的機関の連携を強化することをもって、都市農業活動及び栄養改善活動の持続性の担保を目指すことになった。V-2の案に関しては2007年10月時点でほぼ出来上がっていたものの、園長との調整に手間取り、12月に開催した運営委員会の場でようやくプロジェクトとしての最終案が作成された。その後、2008年2月の園長の交替等があったため、JICA事務所との調整作業が終了し、合同調整委員会の承認を受けたのは、2008年5月になった。

(2) 中間評価の提言へのフォローアップ

中間評価では13項目の提言がなされた。その中には実施に至らなかった項目もある。各提言へのフォローアップ状況については以下の通りである。

①ターゲットグループの整理

中間評価以降、本プロジェクトの対象となる「国内避難民」は、定住生活を営み始めたグループと認識されている。

②栄養改善の定義

中間評価以降、「栄養改善」は総合的な都市農業戦略を実施することにより、対象住民の消費する野菜の量と種類が増加することと定義されている。

③人員の確保（リーダー的な人材の継続雇用）

中間評価以降、ボゴタ市の政権交代の影響もあり、ボゴタ市植物園の幹部やプロジェクトリーダー等の人員交代が相次いで起こり、実現に至っていない。新園長は2008年9月に就任、プロジェクト319の新プロジェクトリーダーは2009年3月に就任し、契約職員との契約（72名）が2009年4月に終了したばかりである。

④住民参加型都市農業モデルの普及（プロジェクトのパイロット的な適用）

サン・クリストバル区の例をモデルとして、プロジェクト319においては活用される計画となっている。ただし、具体的な活用方法については、マニュアルの活用も含め検討されることとなっている。他方、モデルの全国展開についての検討は進んでいない。

⑤部分的な栄養改善から本格的な栄養改善へ

中間評価において、遊休地をうまく活用した規模の大きな農業への移行を検討することが提言された。本提言に対し、ボゴタ市植物園は、生計向上を目的とした規模の大きな農業への移行を検討しており、ボゴタ市の土地利用計画の見直しに際し、都市農業による土地活用を促進する提言を作成中である。

⑥野菜消費に関する現在の栄養状態診断としてベースライン調査を活用

中間評価では、ベースライン調査で不足する微量栄養素を特定し、奨励する作物、奨励する摂取方法を明確にすることが提言されたが、そのためのデータは採取されなかった。また、ベースライン調査の実施時期が計画より遅れたため、結果の利用には至らなかった。

⑦ボゴタ市植物園による栄養改善に関する情報整理

都市農業に係る教材類の整理は完了した。しかし、栄養に関わる情報については、情報整理には至っていない。

⑧プロジェクト目標達成に貢献する栄養関連機関や組織の明確化（栄養関連に経験のある機関や組織と協力関係）

INSとは2007年5月頃よりプロジェクトとの協力関係が構築され継続されてきたが、この協力関係はプロジェクト期間中に限定的である。市役所関連機関に関しては、2008年の政権交代

以降業務体制が確立されていなかったため、実際の協力体制確立には至らなかった。現在ボゴタ市植物園が市の各関連機関との連携を進めようとしており、市役所の保健局もその中に含まれているが、連携を進める活動は始まったばかりである。

⑨ボゴタ市植物園内の決定採択の流れを確立

ボゴタ市植物園の事業実施体制が不安定であったため、十分に確立するには至らなかった。

⑩プロジェクトを通じて実施された研修コースや活動の結果の文書化・共有化

実際に研修に参加した人材の退職やボゴタ市植物園内の人材交代により、実施には至らなかった。プロジェクトを通して移転された技術が、今後どのように活用されていくかは未定である。

⑪インパクト調査の際に、支出の使途を考慮する

中間評価の提言通りのインパクト調査が実施された。その結果、野菜の入手方法について、ベースライン調査時で最も多かったのは購入であったのに対し、インパクト調査では都市農業を通じて作ったものを自家消費する家庭が最も多くなったことが確認され、間接的な支出減につながっていると理解される。

⑫総合的アプローチとインパクト強化のため、食料栄養教育に関わるコンポーネントを確立する住民に対する、栄養/食生活改善に関わる教育モジュールが確立され、普及員が住民に対して研修を実施した。

⑬PDM の改訂

成果 2、3 及び指標について提言通りの改訂が行われた。

3-4 成果達成状況

成果 1：ボゴタ市植物園の都市農業に関わる能力が強化される。

指標：栽培技術マニュアル ¹⁴ （1 種）及び都市農業社会開発マニュアル ¹⁵ （1 種）が作成される。
--

栽培技術マニュアルは、国際農民交流会において JICA からボゴタ市植物園に引き渡された。都市農業社会開発マニュアルは、5 月中旬の納品を目途に印刷・製本中である。

栽培技術マニュアルについては、ボゴタ市植物園がボゴタ市において都市農業に携わるようになってから、現在までの 4 年間で作り上げてきた適正技術を分かりやすく取りまとめたものであり、関係者からは使いやすく、必要事項を網羅していると評価されている。

都市農業社会開発マニュアルについても、マニュアルで紹介している手法や技術は、サン・クリストバル区で実際に都市農業普及活動を通して実証した内容であり、本手法の研修やコミュニティでの適用に従事したカウンターパートからは、より良いコミュニティとの関係作りや、住民の参加・積極性の促進、組織の形成等に非常に有効であると好評を得ている。

上記のマニュアルで紹介されている技術については、「活動実績」で述べたように、栽培技術研修とコミュニティワークに関する能力強化研修が実施され、カウンターパートをはじめとするボゴタ市植物園職員の能力強化が行われた。

成果 2：対象住民の都市農業に関わる能力が強化される。

指標：ベースライン調査によって特定される対象住民の栽培面積が 10% 上昇する。
--

インパクト調査によれば、ベースライン調査結果と比較して対象住民の栽培面積が 32.1% 増加しており、指標は達成された。

¹⁴ PDM には「農業栽培マニュアル」と記載されているが、スペイン語表記（Manual de tecnología de siembra）に合わせて訂正した。

¹⁵ PDM には「社会学的手法マニュアル」と記載されているが、作成されたマニュアルの名称に合わせて訂正した。

技術の普及に従事してきたカウンターパート達からは、一様に住民は都市農業の栽培技術を習得してきているとの意見が聞かれた。容器栽培等、狭いスペースを活用する新しい栽培方法が住民の間で活用されている様子は、本調査の現場視察でも確認された。

料理、食品加工及び栄養に関する能力についても、研修を受けた住民は、程度はそれぞれ異なるものの家庭生活で実践しつつあることが、カウンターパートの報告や住民へのインタビュー、インパクト調査の結果から確認できた。

成果3：区の都市農業活動の持続性を確保するために、コミュニティにおける組織枠組みが強化される。
 指標：サン・クリストバル区にて開催される円卓会議に、10以上の住民組織が参加し、年間6回以上開催される。

サン・クリストバル区の都市農業円卓会議は、2008年には11回開催され、常に10以上の組織が参加した。

プロジェクトが実施した円卓会議でのワークショップや、住民グループの事業能力強化研修を通じて、住民同士のつながりが強化され、2009年1月の時点では8グループが事業を実施していることが明らかになっている。また、区内の住民グループ間及びこれらグループと地域行政間の連携は、円卓会議が機能するようになったことで強化された。その結果、サン・クリストバル区では、都市農業祭が年間2回実施されることを、制度化するための取り組みが行われている。また、2008年10月、11月及び2009年1月に、農業祭における食品販売を目的として、食品取り扱いに関わる資格習得を行うための講習会を、サン・クリストバル病院の支援の下で、円卓会議が企画・実施した。これらの結果から、都市農業円卓会議の連帯関係が確立したと判断できる。

3-5 プロジェクト目標達成状況

プロジェクト目標：都市農業の強化を通じて、サン・クリストバル区の国内避難民を含む社会的弱者の栄養摂取状況が改善される。
 指標：プロジェクト終了時まで、受益者の消費する野菜の種類及び量が10%増加する。

ボゴタ市植物園では、伝統的な野菜で近年栽培がされていなかった野菜6種を導入し、その内4種（キヌア、クビオス、イビアス、ペピノ・ドゥルセ）が定着したことから、ベースライン調査で消費が確認された野菜29種が、インパクト調査では33種に（13.7%増加）なった。また、インパクト調査では、野菜の消費量について、消費頻度を代替指標として計測している。高頻度消費類型¹⁶の野菜、中・低頻度消費タイプの野菜について、それぞれ12~14%、8~12%の増加が確認されているので、指標は概ね達成された。

3-6 上位目標達成状況

上位目標：都市農業の強化を通じて、ボゴタ市の国内避難民を含む社会的弱者の栄養摂取状況が改善される。
 指標：2014年までに、ボゴタ市の貧困者居住区（estrato 1、2及び3¹⁷）住民の消費する野菜の量が、3%増加する。

¹⁶ 1週間に5~7回消費される野菜を高頻度類型、2~4回消費される野菜を中頻度類型、0~1回を低頻度類型と分類している。

¹⁷ ボゴタ市内では居住区に階層（estrato）1~6が設定しており、主に1~3に貧困者が居住している。低い階層の居住区では公共料金が低く設定されている等、優遇措置がなされている。

今までに、ボゴタ市植物園のプロジェクト 319 や他の機関によって、ボゴタ市のサン・クリストバル区以外の地域でも都市農業が普及されている。しかし、その結果今までに住民の栄養状態がどの程度改善されたかについては評価されておらず、数値データは存在していない。

プロジェクト 319 は、少なくとも現ボゴタ市政府が継続する 2012 年までの実施が担保されており、今後も計画が円滑に実施されることを仮定すれば、ボゴタ市の貧困者居住区住民の野菜消費量は増加する見込みである¹⁸。なお、INS が中心となって野菜の摂取状況調査を 5 年毎に実施しており、次回調査が 2010 年に予定されているため、このデータを代替指標として利用できる可能性がある。

3-7 評価 5 項目による評価

3-7-1 妥当性

本プロジェクトは、ターゲットグループのニーズや、コロンビア国やボゴタ市の政策、日本の ODA 政策との整合性、手段としての適切性、他機関との連携状況、導入した技術の適合性等の面から妥当であったと言える。一方、以下に詳細を述べるとおり、計画の妥当性が十分ではなかった点がいくつか指摘される。

(1) ニーズとの整合性

サン・クリストバル区では、子供の 24%が慢性的栄養失調であり、ボゴタ市平均の 13.41%と比べてきわめて高い¹⁹。INS によると²⁰、近年の国内避難民を含む社会的弱者の栄養失調は、エネルギーやタンパク質の不足状態と、ビタミンやミネラルの不足による栄養バランスの欠如が混在している状態である。同区は居住区階層 1 と 2 に該当する貧困地域であり、国内避難民をはじめとする社会的弱者についても同様の不良な栄養状態にあると考えられる。これに対し、ボゴタ市がコミュニティ・キッチン等を通じて食料の安全保障及び栄養改善に取り組んでいる状況であり、都市農業を通じた栄養改善を目指す本プロジェクトの実施は、ターゲットグループと社会のニーズに合致していると言える。

(2) コロンビア国家政策との整合性

本プロジェクトのプロジェクト目標及び上位目標は、コロンビア政府の国内避難民支援対策と合致している。また、食料安全保障の政策において、Acción Social の RESA においても都市農業の支援が行われていることから、本プロジェクトの国家政策との整合性は高いと言える。

ボゴタ市の開発計画において、都市農業の推進は「食糧安全保障及び栄養改善」に対応する活動として位置付けられている。2008 年のボゴタ市の政権交代後に発表された開発計画「Bogotá Positiva (前向きなボゴタ市)」においても、その位置付けに変更は無く、食料安全保障及び栄養改善を目的としたプログラム「Bogotá Bien Alimentada (食の行き届いたボゴタ)」に属している。このような開発計画の下、ボゴタ市の資金でプロジェクト 319 が実施されており、それを技術的に支援する本プロジェクトは、ボゴタ市の政策に沿った支援である。

(3) 日本の ODA 政策との整合性

JICA の 2007 年国別事業実施計画では、援助重点分野の一つである「平和の構築」に対するアプローチの一つとして、「国内避難民等社会的弱者支援プログラム」を形成しており、本プロジェ

¹⁸ 今後 2012 年までに 7,000 人に対する研修の実施、30,000 人に対する技術支援が計画されており、2012 年までの予算配分も計画されている (ボゴタ市プロジェクトデータベース “Banco Distrital de Programas y Proyectos, Ficha de Estadística Básica de Inversión Distrital” 2009 年 1 月)

¹⁹ プロジェクト実施計画書 2005 年 12 月 16 日 (コロンビア事務所作成)

²⁰ INS 研究副部長 Yibby Forero Torres 氏への本終了時評価調査での聞き取り調査より

クトは、その範疇に位置付けられている。2008年国別事業展開の方向性においては、「紛争の被害者である国内避難民、地雷被災者等の経済的・社会的再統合を支援すると同時に、被害者と加害者、受入コミュニティの共生・和解を促進することを目指す」ことを「平和の構築」における事業展開の方針としている。本プロジェクトは、参加型手法を都市農業の普及活動に取り入れており、社会統合を促進する本プロジェクトのアプローチは、この方針と整合している。

(4) 手段としての適切性

本プロジェクトは、中間評価時に本プロジェクトの対象となる「国内避難民」は都市農業に従事することが可能な「定住生活を営み始めたグループ」と定義し、また「栄養改善」は総合的な都市農業戦略を実施することにより、対象住民の消費する野菜の量と種類が増加することと定義した。この定義に則り、栽培技術の普及だけではなく、栄養教育に取り組むことで、従来の栄養が偏りがちな食習慣から、野菜の摂取の促進による栄養改善に貢献する本プロジェクトのアプローチは、目標達成に向けて適切な手段であったと言える。

また、実施機関であるボゴタ市植物園では2004年からプロジェクト319を実施し、都市農業の普及に取り組んでいたが、特に普及技術や栄養教育については十分な専門性や技術を有していなかった。実施中のプロジェクトの技術面を支援したことで、既存の取り組みを効果的に活用でき、実施機関のオーナーシップも高く、妥当な手段であったと言える。

さらに、国内避難民を含む社会的弱者に対して都市農業を通して介入することは、食料の安全保障、栄養改善のみならず、社会統合やコミュニティの形成・能力強化、環境教育、栄養教育、生計向上等、複数の観点から受益者の生活改善に取り組むことが可能となる。実際、対象グループはこのような複合的な生活改善を必要としているグループであることから、エントリーポイントとして適切なアプローチである。

プロジェクト対象地域については、本プロジェクトは3年間という短期間で都市農業の栽培技術、コミュニティに対する普及技術、参加コミュニティの社会統合の促進といった複数の成果を求めたプロジェクトであり、限られた投入を活用し、既述のような一定の成果を上げてきている。これらを考慮すると、サン・クリストバル区にターゲット地域を限定し、この成果を活用して今後ボゴタ市の他地域に普及させるアプローチは、適切であると言える。

(5) 計画の妥当性

プロジェクトは、以下の4つの点から計画の妥当性が十分ではなかったと言える。

①外部条件の設定

プロジェクトのPDM上の外部条件において、「プロジェクト運営及び実施に関わる人員が変更されない」という条件が挙げられているが、「実施体制」で述べたように、カウンターパートの人員交代は頻繁に発生している。カウンターパートの雇用形態が不安定であることを考慮すると、人員交代は初めから想定されることであり、これを外部条件と捉えることは適切ではなかった。

②各目標の指標の設定

ボゴタ市の都市農業は家庭菜園レベルであるため栽培面積は非常に小さく、面積拡大の余地も限られている中で、「対象住民の栽培面積が10%上昇する（成果2）」は妥当であるとは言い難い。また、「受益者の消費する野菜の種類及び量が10%増加する（プロジェクト目標）」、「2014年までにボゴタ市の貧困者居住区住民の消費する野菜の量が3%増加する（上位目標）」に示されている、数値目標の妥当性を判断する根拠が無い。さらに、上位目標については家

庭レベルの野菜消費量を毎年調査している機関が無く、具体的なデータ収集方法を特定することが困難である。

③都市農業と栄養改善の関係性

「手段の適切性」で述べたように、都市農業を促進することには地域コミュニティの強化をはじめとする様々な価値があり、栄養改善はその中の一つにすぎない。一方、家庭菜園レベルの都市農業による、栄養改善の度合いを測る客観的な指標が無く、PDMに沿ってプロジェクトを論理的に展開することが困難となった。プロジェクト形成時は、まだボゴタ市においては都市農業は新しい取り組みであり、それを取り巻く価値について整理されていなかったことが一因であると考えられる。

④栄養改善関連活動への投入

上述のとおり、都市農業に付随する成果が複数ある中で、本プロジェクトは栄養改善を目的に据えたものの、栄養改善の活動に従事する職員がボゴタ市植物園にはおらず、栄養の専門性を持つ他機関との連携が想定されていたものの、具体的な機関連携の前準備は行われていなかった。このように栄養の専門性を有する人材の投入が、具体的に計画されていなかったことで、該当する活動の実施が困難となった。

(6) 他機関との連携

プロジェクトは、ボゴタ市内で都市農業に係る支援を行っている *Acción Social* の *RESA Urbana*、NGO の *IPES* や *Asociación Manos Amigas*、ロサリオ大学等と協力関係を持ち、情報交換やイベントの共同開催等を実施してきた。これにより、プロジェクトが支援・導入した技術が都市農業を推進する他の機関にも紹介されており、適切な連携体制を築いてきたと言える。

特に、プロジェクトが実施する普及技術に関する研修には、上記機関のスタッフを招待したり、ボゴタ市植物園でプロジェクトの研修を受けたスタッフが退職後それらの組織のスタッフとして勤務していたりする等、技術が他の組織でも活用されていることが明らかになっている。

(7) 導入した技術の適合性

開発されたボゴタに適した都市農業技術（適正技術）については、ボゴタ市の地理的条件（海拔 2,550 メートルから 3,100 メートルに及ぶ標高等）や、社会条件、都市としての条件に合わせて開発されており、普及するべき技術として妥当であるという。都市の小さいスペースに適した栽培方法は、地方での農業経験を有し、ある程度の農業知識を持っている住民からも、新しい方法として好評を得ている。

コミュニティワークに係る能力向上のために導入した普及手法は、参加型地域社会開発（PLSD）のコンセプトを基礎として開発されている。サン・クリストバル区担当のカウンターパートの間では、研修で習得した技術を活用して普及活動が実施されており、カウンターパートからは、自分たちのコミュニティワークに係る態度を変えることで住民との関係が良好になったこと、住民の積極性が向上したこと、個人ではなくコミュニティとしての協力の意識が生じたこと、結果として住民間の関係が改善し、住民組織が強化されたこと等が報告されている。また、円卓会議において実施されたワークショップでは、組織強化に関わる研修を行うと共に、参加型ツールを用いて円卓会議のベーシック・コンセプトを設定した。その後、行事、学習の企画（参加型ワークショップ）、実施及び研修等を通して、参加者の能力強化を図った。その結果、参加者が自ら会議開催のロジスティックや司会を行うまでになった。この一連のプロセスは都市農業社会開発マニュアルにまとめられている。

3-7-2 有効性

本プロジェクトは栽培技術、普及技術、栄養教育の点から、実施機関の能力を強化し、対象地域では実際にこれらの技術を活用して受益者を支援し、さらに都市農業円卓会議の機能強化によって、対象地域での自立発展を促進した。これによりプロジェクト目標を達成しており、有効性は高い。

(1) プロジェクト目標の達成状況

「計画の妥当性」で述べたように数値目標の根拠が十分ではなかったものの、インパクト調査の結果、栽培されている野菜の種類と消費量の増加が確認されていることから、プロジェクト目標は概ね達成された。

ボゴタ市の都市農業は家庭菜園レベルの規模であり、栄養改善に必要な栄養素をそれだけで補うには不十分である。本プロジェクトでは都市農業の普及に栄養教育を取り入れることによって、栄養改善という目標を達成しようと試みた。しかし、妥当性の項目で述べたような外部要因の影響（人員の交代）により、栄養改善研修モジュールの作成および住民に対する研修の実施の活動に遅れが生じたため、目標研修人数の達成には至らなかった（詳細は活動実績の項目を参照）。

一方、栄養改善研修モジュールによる栄養教育の効果は、終了時評価調査での住民やカウンターパートへの聞き取り調査や、インパクト調査の結果において部分的ではあるが確認されている。野菜の調理方法に関し、研修では、微量栄養素を最大限に摂取するため過熱をしないことを薦めているが、インパクト調査ではベースライン調査と比較し、野菜を生で摂取する割合が増加しているという結果が得られた。導入した栄養教育は、食習慣に対する働きかけという側面から、プロジェクト目標である「栄養摂取状況の改善」に貢献しており、有効性が確認できた。

(2) 成果とプロジェクト目標の因果関係

本プロジェクトの3つの成果は普及員の能力面、住民自身の実施能力面、住民の活動を支える組織間の連携面からの支援であり、プロジェクト目標を達成するためには十分なアウトプットであったと言える。

成果の発現からプロジェクト目標達成に至るための外部条件の一つとして、「プロジェクト運営及び実施に関わる人員が変更されていないか」があるが、既述のとおり、人員の交代は頻繁に発生しており、プロジェクトが導入した技術の新しい人材への移転が課題である。もう一つの外部条件、「都市農業が2008年の政権交代以降もボゴタ市の政策の一環としての位置を失っていないか」については、既述のとおり変更はない。

(3) プロジェクト目標達成の貢献要因・阻害要因

貢献要因としては、以下が挙げられる。

- ・決められたプロジェクトの枠組み・デザインの中で、専門家が関連機関との協力関係作りに成功し、普及技術・栄養改善の面の技術強化に貢献したこと。
- ・プロジェクトが導入した技術をカウンターパートが積極的に吸収し取り組んでいること。
- ・ボゴタ市植物園に不足していた栄養に関する専門的な知見につき、INSの協力を得ることができ、ベースライン及びインパクト調査、栄養改善研修モジュールの作成が可能になったこと。

阻害要因としては、以下が挙げられる。

- ・「実施体制」で述べたように実施体制が不安定である上に、外部条件にある人員の交代が頻発したことで混乱が生じ、活動全般に影響を及ぼした。

- ・「妥当性」で述べたように、プロジェクト形成時点に「栄養改善」に関わる投入が具体化されていなかったことにより、プロジェクト前半では具体的な活動が実施できなかった。

3-7-3 効率性

本プロジェクトは、実施機関がボゴタ市やサン・クリストバル区から予算を得て実施しているプロジェクト 319 を、技術的に支援するプロジェクトであったことから、効率性は概して高かった。概ね計画通りの投入により活動が行われ、アウトプットの産出に結びついたが、必要な人材の投入においては以下で述べるような問題が継続した。

(1) アウトプットの産出状況

「成果の達成状況」で示したとおり、各成果の指標は達成されている。一方、それぞれの成果はまだ発現し出したばかりであり、今後さらに安定的に成果を維持していくために、必要な活動を具体化していく必要がある。

(2) 活動とアウトプット産出の因果関係

それぞれのアウトプットに対する活動は、アウトプットを産出するために十分な活動であった。

活動から成果の達成に至る外部条件の一つとして、「食と栄養の安全保障委員会が制度上の地位を確立しているか」があるが、食と栄養の安全保障委員会については制度上の変更はなく、特に影響はない。2 つ目の外部条件である「市の土地利用計画が都市農業に関わる土地利用の障害となっていないか」については、都市農業の推進がボゴタ市の開発計画の中に含まれていること、現在までの都市農業は家庭菜園レベルの規模であること等から、障害になっていない。しかし、今後空地の利用等によって都市農業を発展させる際に、土地利用計画に抵触しないように調整を行う必要があることから、ボゴタ市植物園が中心となって、同計画の改訂に向けた提言の作成が進められている。

(3) 投入のタイミング・質・量

本プロジェクトでは、ボゴタ市植物園のマネジメントレベル、実施運営レベルの双方において実施体制が不安定であり、人材交代が多く発生したこと、「栄養改善」に関する投入が計画時に具体化されていなかったこと等により、必要な人材を適切なタイミングで活用することが困難であった。また、本邦研修に参加したカウンターパートは 5 名中 4 名が既に退職している。その他の投入については、プロジェクト活動の実施に適切に活用された。

3-7-4 インパクト

本プロジェクトの成果が、今後プロジェクト 319 の他地域での活動に活用されることで、上位目標は達成が見込まれている。波及効果としては、対象地域のコミュニティの社会統合に貢献していることが確認されており、他地域でも同様の活動を取り入れることで、インパクトの拡大が期待できる。

(1) 上位目標達成の見込み

プロジェクト 319 はボゴタ市の開発計画と連動していることから、2012 年までの今政権下においては、ボゴタ市内における都市農業の普及は継続される。今後、プロジェクトがサン・クリストバル区を対象として普及してきた適正技術や普及技術、栄養教育ならびに関連組織の連携の支援がプロジェクト 319 を通じて他地域でも活用されることで、より効果的に上位目標の達成に貢献することが期待できる。

(2) 上位目標とプロジェクト目標の因果関係

本プロジェクトは、プロジェクト 319 を技術的に支援するものであり、プロジェクト 319 が今後継続されることで、上位目標「都市農業の強化を通じて、ボゴタ市の国内避難民を含む社会的弱者の栄養摂取状況が改善される。」の達成が期待できることから、上位目標とプロジェクト目標に乖離はないと言える。

プロジェクト目標から上位目標に至るまでの外部条件については、「植物園農業プロジェクト運営及び実施に関わる人員が変更されないか」があるが、人員交代が頻発した要因の一つは、既述のとおり、契約による雇用形態が不安定であることが挙げられる。これはボゴタ市植物園のミッションに都市農業が含まれていないため、安定した雇用形態をとることができないためである。これに対して現在ボゴタ市植物園では、都市農業の普及・推進を正式なミッションにすべく、市に対して働きかけている。また「都市農業がボゴタ市の政策の一環としての位置を失わないか」が外部条件であるが、既述のとおり 2012 年までは市の政策に変更はない。

(3) 波及効果

本プロジェクトの特筆すべきインパクトとして、社会統合への貢献が挙げられる。都市農業をエントリーポイントとして、家庭内のつながりの回復、社会とのつながりの強化、ばらばらに活動してきた関連組織の連携体制の構築等、社会面のインパクトが様々な関係者から聞かれる。

その他都市農業の各関係者からは、次のようなインパクトの事例が報告されている。

- ・都市農業に従事する女性の家庭内での地位が向上しつつある。
- ・有機栽培の実施により、環境や食の安全に関する意識が高まった。
- ・都市農業が普及してきたことで、今度は公共政策として行われるような体制を整えるための提言が準備されている。
- ・収穫されたものを自家消費することが目的であったが、余剰分をフェアやイベントで販売・提供するようになった。
- ・ボゴタ市植物園外部において、関連本邦研修の帰国研修員である元カウンターパートが活躍しており、ボゴタ市植物園以外で都市農業を推進する関連 NGO 等においてもプロジェクトが導入した社会開発技術を活用する動きがある。
- ・上記のような本プロジェクトの技術移転を受けた後に退職した人材と、ボゴタ市植物園の人材の間で、情報交換や技術維持のための協力関係が育っている。

3-7-5 自立発展性

プロジェクト 319 の継続は 2012 年までは決定しており、ボゴタ市植物園は本プロジェクトの成果を積極的に活用することを JCC 会合²¹でも明言していることから、当面の持続性は担保されている。一方、プロジェクト 319 の人材が、今後どのように導入した技術を活用していくかについての具体策は、今後の検討を要している。

(1) 政策・制度面

既述のように、2008 年の政権交代以降、ボゴタ市開発計画の中の都市農業の基本的な位置付けに変更は無く、プロジェクト終了後少なくとも、ボゴタ市の今政権内（2012 年まで）において政策支援が継続的に行われ、活動予算は 2012 年まで確保される見通しが立っている。

²¹ 2009 年 4 月 29 日実施。

都市農業のコンセプトは新しく、1997年に策定された土地利用計画においては都市農業への言及はない。近年の都市農業の進展を鑑みて、本年に予定されている土地利用計画の見直しにおいて、都市農業が認識される必要がある。このためボゴタ市植物園が中心となってその他関連組織の支援を得ながら、都市農業促進に向けた提案を作成中である。

(2) 組織・財政面

ボゴタ市植物園は、今後も都市農業の普及に積極的に取り組む意欲を示している。ボゴタ市植物園では、食の安全保障と栄養改善活動に限定されない、都市農業活動の利点を政策決定者に対して提示し、都市農業の普及を市の政策とするとともにボゴタ市植物園の正式なミッションとすることを目指している。これにより、都市農業を担当する職員を公務員として雇用できるようになるという利点がある。

一方、各区役所においては、ボゴタ市の開発計画の実施においてそれぞれの区における実施計画を作成し、予算を執行している。各区は都市農業普及における実施機関としてボゴタ市植物園のほか、NGOや大学等をそれぞれ選定し、計画の実進を進めている。これまでサン・クリストバル区役所においてはボゴタ市植物園と協定を結んで、植物園はこの予算を用いて活動を実施し（主に普及員の人件費）、区役所はボゴタ市植物園から提出される報告書を基に、活動の監督を行ってきた。しかし、2007年の予算執行が滞っていたため、2008年以降サン・クリストバル区はこの協定を他のNGOや大学と結んでおり、ボゴタ市植物園とは結んでいない。このような状況から、プロジェクト終了後は、サン・クリストバル区内でのボゴタ市植物園による普及活動は、縮小されることになる。

(3) 技術面

栽培技術においては、本プロジェクトはプロジェクト319が行っている容器栽培技術の開発及び普及を支援した。この技術は住民に普及され、実践されている。社会開発における技術（普及技術）については、本プロジェクトが導入した参加型地域社会開発（PLSD）のコンセプトを基礎とする普及手法が高い評価を受けているが、ボゴタ市植物園運営陣の交代、及び技術移転を受けたカウンターパート全員が退職（あるいは契約の打ち切り）したため、その成果の継続性を確保するための、研修制度導入等の具体策が必要になっている。

これらの技術における普及員への研修には、カウンターパート以外のボゴタ市植物園関係者も参加したが、人員の入れ代わりも多く、サン・クリストバル区の担当以外の普及員がこの技術をどの程度活用しているのかは確認されていない。

(4) 社会・文化・環境面

プロジェクト対象地域では住民組織が強化され、育ちつつあることから、都市農業活動の持続性が期待できる。また、元々避難民は地方出身で農業経験者が多く、野菜の栽培に慣れ親しんでいることから、小さなスペースやプラスチックの容器でも栽培できることが分かり、喜んでいる住民が少なからず存在し、活動が継続されることが期待できる。

3-8 結論

本プロジェクトは専門家の柔軟かつ適切な対応、カウンターパートの積極的な取り組み、INSをはじめとする協力機関の支援により、人的投入面や計画の具体性が不十分であった等の困難にもかかわらず、対象地域において成果を発現している。栄養改善を目的とした都市農業の実施といった目標設定の面で

は、指標の設定が難しく、限定的な定義における成果を図るに留まったが、都市農業の普及活動に栄養教育を導入することで、さらにプロジェクト目標の達成に貢献できたと言える。また、普及技術の移転や住民組織及びその他関連機関の連携を強化する活動によって、社会統合、地域コミュニティの育成という面で大きく貢献したことは特筆すべき点である。

ボゴタ市植物園をはじめとする関係者は、今後も都市農業の普及に取り組むことに意欲を示しており、活動の継続・発展が期待できる。一方で、人材交代の影響により、プロジェクトが導入した技術や手法、栄養改善のモジュール等が、今後どのように活用されていくかが具体化されておらず、ボゴタ市植物園をはじめ、関連機関での活用を進めるための、具体的な方策の検討が必要となっている。

第4章 教訓

(1) 円卓会議

サン・クリストバル地区の円卓会議では、都市農業を実践する地域住民と地域行政とが参加して、「サン・クリストバル区都市農業祭」の定期開催が決定されている。より良い地域社会を作るのは地域行政だけの仕事ではなく、また個々の地域住民の力だけでも十分ではない。そのために求められるのは、地域住民同士が、そしてこれら住民と地域行政が地域社会を構成する主体として意見を交換し、妥協点を探り、そして参加者が持つリソースを統合 (integrate) するための場を持つことである。

(2) 都市農業の意義：栄養改善と社会統合→新たな都市社会の構築

ボゴタ市への多数の避難民の流入という社会環境においては、その社会的安定を図る上で特殊な社会的装置が求められている。サン・クリストバル区でのパイロット事業により、都市農業はその装置の一つとして有効に機能し得ることが実証されている。都市農業の意義を食糧の安全保障という側面だけでなく、社会統合機能の側面からも再定義することによって、ボゴタ市独自の新たな都市社会の構築に向けた地平が開ける。日本には都市社会を評して、「隣は何をする人ぞ」という台詞がある。ボゴタ市がそういう乾いた社会にならぬよう期待する。

(3) 栄養教育の重要性

ボゴタ市の開発計画では都市農業は食の安全保障と栄養改善のラインに位置付けられており、近年の栄養問題の傾向（慢性的栄養失調から栄養バランスの問題の混在）においても、野菜の摂取を促進することは重要である。都市農業の普及活動にあたって、栽培技術のみならず、栄養教育を組み合わせることで、栄養改善にさらに効果的に貢献できることが、プロジェクトの取り組みから明らかになった。

(4) 実施機関の人員の交代

プロジェクト実施期間中に政権交代があったこともあり、ボゴタ市植物園の園長を始めとする関係者が数度にわたり交代した。また、本プロジェクトを通じて社会開発手法を実践できるようになったカウンターパートが、ボゴタ市植物園を離れ他の組織に移動している。案件形成段階で人員の交代によるプロジェクトへの影響を最小限に留めるための工夫が必要であった。また、研修員の選定においても、帰国後の組織での活躍が担保されるための工夫が望まれた。

(5) 都市農業の性格を反映した成果指標の設定

本プロジェクトでは都市農業による栄養改善を目標としたが、都市農業で生産される野菜は必要な栄養の一部を補完する位置付け（その他の食品は購入している）に過ぎないこと等を考慮すると、目標の合理性を十分に説明できない。また、都市農業が本来的に狭隘な面積で営まれる性格を有することから、栽培面積が10%増加するという成果指標にも問題があったと言える。目標達成に向けたアプローチの性格を十分に分析した上で、成果指標が設定される必要があった。

第5章 提言

5-1 ボゴタ市植物園に対する提言

(1) 本プロジェクトの成果の活用（プロジェクト中に対応）

教訓(4)の課題を案件終了後に解決する方策としては、JBBの普及員が新規で採用された際に、本プロジェクトで導入したマニュアルやモジュールを活用して研修を行うことが、彼らの業務を標準化するために有益なツールであると言える。これらのツールを活用した研修体制を内部制度化することにより、普及員が交代した場合も業務の質を一定水準に保つことが可能となることから、本プロジェクトで作成された成果品や、技術移転がなされた人材の活用方針を早期に検討し実践に移す必要がある。

また、インターネット上で公開されている都市農業ホームページにこれらの成果物を掲載し、新たな関連情報等を定期的にアップデートすることにより、コロンビア全土の都市農業関係者への情報発信機能が充実すると期待される。

(2) 栄養改善のための専門知識の重要性（継続）

INSと連携してベースライン調査とインパクト調査の実施や、栄養教育のモジュール作成が行われた。今後も都市農業の栄養改善に関する効果を高めるためには、これらの成果を普及活動に反映させることが重要である。また、INSをはじめとする栄養学の専門知識を持つ組織との協力関係を持つことが望ましい。

(3) サン・クリストバル区に対するモニタリング（早期に対応）

サン・クリストバル区では住民グループや連携体制が強化されてきたが、これらの成果の自立発展性を高めるために、SESPA（Sistema de Evaluacion, Seguiniunto y Monitoreo）の効果的な活用を念頭においた定量的、定性的なモニタリングとフォローアップ体制を具体化する必要がある。

(4) 上位目標の代替指標

「2014年までに、ボゴタ市の貧困者居住区（estrato1、2、及び3）住民の消費する野菜の量が3%増加する。」という指標に対しては、野菜の消費量を定期的に調査している機関は存在していないため、以下の指標を代替案として提案する。

①プロジェクト319で実施する栄養改善研修を7,000人が受講する。研修では、本プロジェクトで作成された栄養改善研修モジュールを活用することとする。

②2010年にINSが実施する微量栄養素に特化した調査に含まれる指標。

5-2 ボゴタ市役所に対する提言

(1) 都市農業政策と土地利用計画

ボゴタ市役所が、環境局、計画局、ボゴタ市植物園を通じて、都市農業政策形成のプロセスを推進し、土地利用計画の見直しと調整において、都市農業に必要な配慮を行うことが必要である。

5-3 都市農業関係者全般に対する提言

(1) プロジェクトで実証した普及アプローチの活用（早期に対応）

本プロジェクトで導入した普及手法は、都市農業の持つ社会統合機能を高める上で、優れた効果

を持っている。ボゴタ市の都市農業をさらに発展させるためには、サン・クリストバル地区の円卓会議に示されるような機能を持つ、円卓会議の制度的な定着が必要とされている。我々都市農業を支援するものの役割は、住民が主体的に都市農業に取り組むプロセスのファシリテーターになることである。プロジェクトはこの普及手法の実践経験を持つ人材を育成しただけでなく、その基礎理論や活用の実際を記したマニュアルを作成している。終了時評価合同調査団は、都市農業関係者に対して

- ①これら人材を含めた都市農業普及員ネットワークを形成し、情報交換や経験の共有を進めること
- ②プロジェクトが作成した普及マニュアルを広く活用すること

を提言し、ボゴタ市の各区で円卓会議の機能化が進むことを期待する。

(2) 都市農業についての共通理解の形成（早期に対応）

ボゴタ市の土地利用計画をレビューする年を迎えて、都市農業の是非をめぐる議論があるが、各人各様の都市農業のイメージを持ったままの議論は、必ずしも建設的な展開に結びつかない。また、土地利用計画のレビューでは、ボゴタ市の多くの関連部局が関わるが、彼らへの周知も不十分である。教訓(2)で示したような都市農業の意義を明確にし、関係者間で共有した上で議論を進めることが望ましい。

(3) 都市農業の普及における栄養教育の重要性（継続）

教訓(3)に関連し、都市農業の普及においては栽培技術、普及技術の面から取り組むことが一般的であったが、栄養教育という観点からは今まで十分に組み込まれてこなかった。一方、栄養教育の有効性は本調査においても確認されており、この目標を達成するためには、この3つの要素からのアプローチが必要であり、各機関の強みを他の機関が活かせるように関係の強化がなされることが望ましい。

(4) コミュニティと区・市の関係強化（早期に対応、中長期に継続）

コミュニティの取り組みが上位レベルの政策に反映されるために、区レベルの都市農業円卓会議と食の安全保障に関する、区委員会及び市委員会の間に、直接的なコミュニケーションルートを確立する必要がある。

5-4 JICAに対する提言

(1) 研修員ネットワークへの支援（早期に対応、中長期に継続）

人材育成に対する専門家の熱意により、国内、本邦及び都市農業に実績のある周辺諸国での研修が実施されている。これらの研修に参加したのは単年度契約のカウンターパート達であり、現在はそのほとんどが、ボゴタ市植物園との雇用関係はない。終了時評価のインタビュー調査では、

- ①これら元カウンターパートが、プロジェクトの提供した研修内容や普及手法を高く評価していること
- ②ボゴタ市植物園を離れた後も、他の政府機関や NGO で都市農業に関わる業務に就き、情報交換ネットワークを形成していること

が明らかになった。本件が残した人材育成の成果を持続発展させる意味において、さらに都市農業に関わる機関同士の横の連携を促進する意味においても、必要に応じて帰国研修員を中心とするこ

ういったネットワークへの支援を提供することが、国内避難民や帰還兵士の社会統合というコロンビアの国家的課題への、JICA の継続的貢献に繋がると期待できる。

(2) 調査報告書等の成果物の和文・英文要約の作成（早期に対応）

本プロジェクトで作成したマニュアル類、調査報告書等の成果物は質的に優れており、カウンターパートをはじめとする関係者から高い評価を受けている。これらについては、少なくとも和文、あるいは英文の要約を作成し、本部担当部をはじめとする JICA 関係者の利用に供することが望まれる。²²

(3) 事後評価の実施時期

本来このプロジェクトは、プロジェクト 319 を支援するプロジェクトである。プロジェクト 319 はボゴタ市の現政権内（2012 年まで）は継続が保証されているが、その後の展開は不明である。プロジェクト 319 の指標を活用して評価を行うためには、事後評価の実施は 2014 年ではなく、2012 年までの達成状況で測定することが望ましい。

²² 特に「都市農業社会開発マニュアル」は、農村・農業開発系の専門家や青年海外協力隊員の参考資料として有用と考えられる。

第6章 団長所感

(1) 参加型地域開発の応用事例

本件専門家は、参加型地域社会開発（Participatory Local Social Development, PLSD）のコンセプトを応用して、効果的な普及手法の開発に結び付けている。PLSD は、1980 年代から国連地域開発センター（United Nations Center for Regional Development, UNCRD）で精緻化されてきた地域開発理論で、近年の参加型開発重視の流れの中で、JICA 本部においても貧困削減タスクフォースが中心となって、その具体的な応用方法の検討が進められてきた経緯がある。

本件では、(1) サン・クリストバル区において進められた円卓会議の機能化プロセス、及び(2) 周辺国（ペルー、アルゼンチン、キューバ）とボゴタ市の都市農業支援制度と住民組織化の比較分析に、応用事例を見ることができるが、これら事例の詳細は、専門家作成の「都市農業社会開発マニュアル」に所収されている（スペイン語原稿は完成して製本中、日本語版は現在専門家が作成中で5月末に完成予定）。本件専門家は、カウンターパートをはじめとするコロンビア人関係者に対する説明能力に優れた実績を残しているため、帰国報告会の際に、関心のある JICA 職員との座談会等を設け、PLSD の具体的な応用方法の理解を深める機会を持つことは、有意義であろう。

(2) 人材育成と持続性

専門家が育成してきたカウンターパートが植物園に定着していないことから、終了時評価の対処方針検討の場において、本件の人材育成成果の持続性について強く懸念されていた。これは本件に限らず広く中南米諸国に一般的に見られる課題であるため、他ドナーとの面談の機会を設けて見解を聞きとり、今後の参考とすることとした。面談で示された要点は、次の三点である。

- 1) 国の優先課題と支援事業との高い整合性の確認。
- 2) 事業実施期間中及び実施後一定期間、カウンターパートの人事異動が無いことを条件付けた協定の締結を求める。やむを得ず異動する場合には、確実な「業務引き継ぎ」を行うための仕組みの構築を求め、これを協定に明文化して含める（これは、中央政府レベルにおいては、遵守される傾向にあるとのこと）。
- 3) プロジェクト成果を相手側機関の規則・制度に組み込む。教育分野への支援であれば、成果をカリキュラムに反映することを目的にする等、プロジェクト目標に「制度化」を反映した表現にするとともに、適切な実施期間を設定する。

人事異動に政治的意図が強く作用する環境であることを勘案すると、1)と3)を重視してきた JICA のアプローチは間違っていないと考えられるが、他方、(1)これまで以上にプロジェクト期間の合理性を慎重に検討する必要があること、(2) PDM に「プロジェクトの実施運営に関わる人員が変更されない」といった外部条件を設定することには、実質的な意味がないこと、(3) 必要性に応じ、プロジェクト終了後にも支援を柔軟に行う必要があること、を指摘しておかなくてはならない。

さらに、本件が対象とする都市農業の普及には、ボゴタ市植物園だけでなく大学や NGO 等の他機関も多く参画しているため、都市農業に関わる普及専門職の、機関横断的なネットワーク形成といった方向性を明示的に打ち出すことが、検討されて然るべきであったと考えられる。カウンターパートが実施機関に定着しないことを前提とするとき、その実施機関の能力強化だけに固執することに積極的な意味はない。むしろ、都市社会における人材ネットワークを視野に入れて中核的な人材を育成し、そのネットワークの機能を継続的に支援するといった、中長期的な協力のあり方が模索されて良いだ

ろう。

(3) 機関連携について

本件は事業名に栄養改善を謳いながら、栄養に関わる具体的な活動内容が明確化されないままにプロジェクト前半期が過ぎている。これには、(1) ボゴタ市の国内避難民を始めとする社会的弱者がどのような食生活を営み、どのような栄養問題が客観的に把握されているかといった、基礎情報が不十分であったことに加えて、(2) プロジェクト形成時点において、栄養改善について公立病院等の協力候補機関は挙げられていたものの、実質的な協力協議がなされていたわけではなく、活動の具体化を協議する相手機関の特定が容易ではなかったことが、その理由として挙げられる。

2007年5月から国家保健機関（INS）との協力関係が形成されたものの、ベースライン調査の最終報告が2008年12月となり、その結果をプロジェクト活動に活かすことができなかった。ここには、機関連携を実質化するには相当の時間を要することが示されており、この点はプロジェクト形成時の見通しの甘さと指摘せざるを得ない。機関連携というと聞こえは良いが、機関が連携する前に人的な関係が形成されていること、すなわち、機関連携はあくまで人同士の良好な関係を基礎に考えるべきもの（あるいは先行経験としてJICAとの協力経験があることを前提に検討されるべきもの）という教訓が導き出される。また、上記関係に基づいた機関連携を行う際にも、案件形成段階から関連機関を巻き込み、R/Dへの署名を求める等の実質的な対応の必要性も教訓となる。

(4) 計画の妥当性について

本報告書の2-3-1(5)で、本件の計画に関わる複数の問題点が指摘されているが、これらは在外主管の導入時期にあって、十分な専門性に裏打ちされたプロジェクト形成がかなわなかったことによるところが大きいと考えられる。また中間評価において、「栄養改善」の意味するところを再定義し、数値目標に変更が加えられているが、計画の妥当性を高めるに至っていない。すなわち、成果指標の「栽培面積の10%増加」、プロジェクト目標の「消費する野菜の量と種類の10%増加」、そして上位目標の「消費する野菜の3%増加」の間に関連性が乏しく、さらには、それぞれの数値の合理性を判断する根拠が希薄である。指標の設定においては、数値の合理性を明確にした上で、関連機関が定期的に調査しているデータを指標とすることも、案件形成時に配慮すべき点である。

プロジェクトで取り組むべき課題設定ー「都市農業を通じた栄養改善」が最優先されるべき住民ニーズであったかどうかを含めて、代替事業案を比較検討するプロセスの重要性、そして成果を示す数値目標が持つべき合理性について、本件が示唆するところは大きい。

(5) 知的財産の喪失

プロジェクトが、NGOや大学等の研究機関に委託して実施した調査の報告書等には、少なくとも和文要約（調査の背景と目的を含めた5W+1H、調査結果の概要）を付すことが望ましい。スペイン語、フランス語に代表される非英語外国語能力を備えたJICA職員の人材層が薄いため、これらの言語圏で実施された事業の場合には、特にその必要性が高い。これら調査結果を基礎にした意思決定がなされる場合もあるため、少なくとも課題部の担当職員には、その内容を把握しておく必要があるはずである。本件についても報告書に和文要約が無いと、全くJICAの財産にならないまま、散逸する運命にある。

JICAはこの知的財産の喪失を課題として認識すべきである。開発調査の再委託調査にも同様の課題があり、組織的な対策を講ずるべきであると考えられる。昨年10月のJJ統合を機に設置されたJICA研究所には、内容に応じてこういった調査に対する関心があるとも考えられる。和文要約を課題部と

研究所で共有する仕組みができれば、多額の費用を投じた調査報告を、さらに効果的に利用できる道筋がつくと期待できる。

(6) 事業規模について

本プロジェクトについて、事業規模が小さく、ボゴタ市サン・クリストバル区のみを対象とした裨益地域が限定的なプロジェクトであるとの見方が、対処方針検討の場においてなされており、JICA が実施する意義について懸念が示された。一方で、本プロジェクトのカウンターパート機関であるボゴタ市植物園は、サン・クリストバル区での成果を、ボゴタ市全域に広げることが政策とすることを検討していることが確認された。また、その際にプロジェクトが作成した成果品を、広く活用していく意志も示された。従って、本プロジェクトは、通常の JICA プロジェクトと同様、持続性が視野に入れられた普及のためのパイロット的な役割を果たしていると言え、JICA の協力により実施する意義が確認された。

付 属 資 料

1. 調査団日程
2. ミニッツ
3. 合同評価報告書－ミニッツ添付資料－（和文）

コロンビア国内避難民等社会的弱者に対する栄養改善プロジェクト
終了時評価調査団日程

	月日	曜日	時間	活動内容			宿泊地
				団長	計画調整	評価分析	
1	4/12	日	AM PM	/		15:50 成田 → (CO006) → 13:55 ヒューストン 15:45 → (CO883) → 20:40 ボゴタ	ボゴタ
2	4/13	月	AM PM		08:30 JICAコロンビア支所打ち合わせ 11:00 Accion Social表敬 14:00 JBB表敬 15:00 間瀬専門家インタビュー		
3	4/14	火	AM PM		09:00 合同評価委員会キックオフミーティング 13:30 INSインタビュー 16:00 ロザリオ大学インタビュー		
4	4/15	水	AM PM		09:00 サン・クリストバル区サンタ・ロサ地区住民インタビュー 11:30 サン・クリストバル区区長インタビュー 14:30 エントレスベ公園付近住民インタビュー		
5	4/16	木	AM PM		09:00 JBB園長及び幹部インタビュー 11:30 カウンターパート(普及員・専門職員等)インタビュー カウンターパートインタビュー続き 資料整理		
6	4/17	金	AM PM		11:00 Accion Socialインタビュー 14:00 ボゴタ市環境局インタビュー		
7	4/18	土	AM PM		調査結果の取りまとめ(評価グリッドの作成) 調査結果の取りまとめ(評価グリッドの作成)		
8	4/19	日	AM PM		15:50 成田 → (CO006) → 13:55 ヒューストン 15:45 → (CO883) → 20:40 ボゴタ	調査結果の取りまとめ(評価グリッドの作成)	
9	4/20	月	AM PM		09:00 JICAコロンビア支所打合せ 11:00 Accion Social表敬 11:30 IOM意見交換 15:00 JBB表敬		
10	4/21	火	AM PM		合同評価報告書案作成 合同評価報告書案作成		
11	4/22	水	AM PM		08:00 サン・クリストバル区視察 18:30 国際都市農民経験交流会開会式		
12	4/23	木	AM PM		09:00 国際都市農民交流会出席		
13	4/24	金	AM PM		09:00 国際都市農民交流会出席 17:30 合同評価委員会		
14	4/25	土	AM PM		合同評価報告書案検討 合同評価報告書案検討		
15	4/26	日	AM PM		10:00 ボゴタ市都市農業祭視察 合同評価報告書案検討		
16	4/27	月	AM PM		09:00 合同評価委員会協議:評価レポートの修正		
17	4/28	火	AM AM		09:00 合同評価委員会協議:評価レポートの修正 17:00 合同調整委員会:ミッツ署名		
18	4/29	水	AM AM		資料整理 13:30 事務所報告 15:30 大使館報告	機内泊	
19	4/30	木	AM AM		ボゴタ 00:15 → (CO885) → 05:22 ヒューストン 10:50 → (CO007)	機内泊	
20	5/1	金	AM AM		14:20 成田		

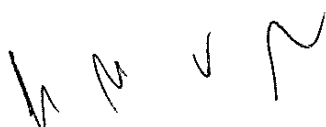
**MINUTA DE DISCUSIONES ACORDADA
ENTRE LA MISIÓN JAPONESA DE EVALUACIÓN FINAL Y
LAS AUTORIDADES RELACIONADAS
DEL GOBIERNO DE LA REPÚBLICA DE COLOMBIA SOBRE
EL PROYECTO DE MEJORAMIENTO DE LA CONDICIÓN NUTRICIONAL
DE LA POBLACIÓN VULNERABLE
INCLUYENDO LA POBLACIÓN EN SITUACIÓN DE DESPLAZAMIENTO
A TRAVÉS DEL FORTALECIMIENTO DE LA AGRICULTURA URBANA
EN LA REPÚBLICA DE COLOMBIA**

La Misión Japonesa de Evaluación Final (en adelante denominada como "la Misión") enviada por la Agencia de Cooperación Internacional del Japón (en adelante denominada como "JICA"), liderada por el Sr. Masanobu Kiyoka, visitó la República de Colombia desde el 12 de abril hasta el 30 de abril de 2009 con el propósito de realizar la evaluación final del "Proyecto de Mejoramiento de la Condición Nutricional de la Población Vulnerable Incluyendo la Población en Situación de Desplazamiento a través del Fortalecimiento de la Agricultura Urbana en la República de Colombia" (en adelante denominado como "el Proyecto").


Durante la estadía de la Misión en Colombia, el Comité de Evaluación Conjunta fue conformado por los miembros de la Misión y del Gobierno de la República de Colombia con el propósito de realizar la evaluación final. La Misión confirmó la situación del Proyecto y sus logros a través de las visitas al sitio del Proyecto, encuestas y entrevistas realizadas al personal de contraparte del Proyecto, funcionarios de las entidades relacionadas y la comunidad local que participó en el Proyecto.

Luego de que fue elaborado un informe del estudio en el Comité de Evaluación Conjunta, se sostuvo una serie de presentaciones y discusiones en el Comité de Coordinación Conjunta y ambas partes acordaron reportar a sus respectivos gobiernos los asuntos referidos en el documento adjunto.

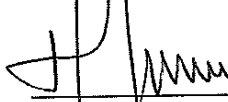
Bogotá D.C., 28 de abril de 2009



Sr. Luis Alfonso Hoyos Aristizábal
Alto Consejero Presidencial
Agencia Presidencial para la
Acción Social y la Cooperación Internacional



Sr. Masanobu Kiyoka
Líder
Misión de Evaluación Final
Agencia de Cooperación Internacional del
Japón (JICA)

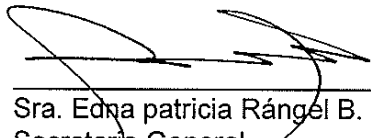


Sr. Herman Martínez Gómez
Director
Jardín Botánico José Celestino Mutis
Alcaldía Mayor de Bogotá D.C.

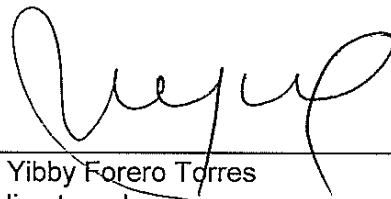
**El Proyecto de
Mejoramiento de la Condición Nutricional de la Población Vulnerable Incluyendo
la Población en Situación de Desplazamiento a Través del Fortalecimiento de la
Agricultura Urbana
en la Republica de Colombia
Informe de la Evaluación Final**

Bogotá D.C., 28 de abril de 2009

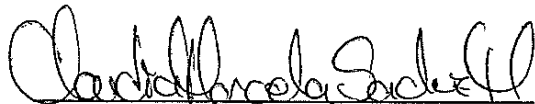
Miembros del Comité Conjunto de Evaluación



Sra. Edna Patricia Rangel B.
Secretaria General
Jardín Botánico de Bogotá (JBB)



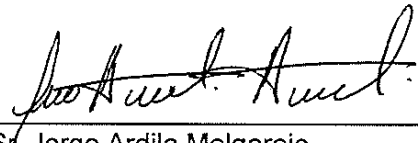
Sra. Yibby Forero Torres
Subdirectora de
Investigación
Instituto Nacional de Salud (INS)



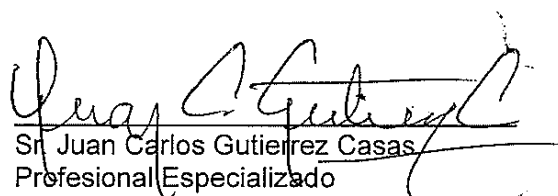
Sra. Claudia Sánchez
Coordinadora
Gestión Ambiental
Promoción de Desarrollo Sostenible
(IPES)



Sra. Rosángela Correa
Asesora
Dirección de Cooperación Internacional
(DCI), Acción Social



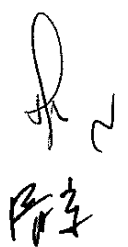
Sr. Jorge Ardila Melgarejo
Asesor
Red de Seguridad Alimentaria (ReSA),
Acción Social



Sr. Juan Carlos Gutierrez Casas
Profesional Especializado
Silvicultura, Flora y Fauna Silvestre
Secretaría Distrital de Ambiente (SDA)

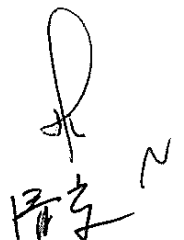


Sr. Rodrigo Isaza Bordamalo
Subdirector
Cooperación Internacional
Dirección Distrital de Relaciones
Internacionales,
Secretaría General





Sr. Masanobu Kiyoka
Líder
Misión de Evaluación Final
Agencia de Cooperación Internacional del
Japón (JICA)



**El Proyecto de
Mejoramiento de la Condición Nutricional de la
Población Vulnerable Incluyendo la Población en
Situación de Desplazamiento a Través del
Fortalecimiento de la Agricultura Urbana
en la Republica de Colombia**

Informe de la Evaluación Final

Equipo de Evaluación Conjunta

Abril de 2009

A handwritten signature in black ink, located in the bottom right corner of the page. The signature is stylized and appears to consist of several loops and lines, possibly representing the initials of the author.

CONTENIDO

Lista de Abreviaturas

1. Introducción

1-1. Resumen del Proyecto

1-1-1. Nombre del Proyecto

1-1-2. Período del Proyecto

1-1-3. País y Área Objeto del Proyecto

1-1-4. Beneficiarios del Proyecto

1-1-5. Entidad Ejecutora del Proyecto

1-1-6. Resumen del Proyecto

1-2. Resumen de la Evaluación Final

1-2-1. Resumen de la Evaluación

1-2-2. Objetivos de la Evaluación

1-2-3. Metodología de la Evaluación

1-2-4. Conformación del Comité de Evaluación Conjunta

1-2-5. Agenda de la Evaluación

2. Resultados de Evaluación

2-1 Logros del Proyecto

2-1-1. Inversión por Japón

2-1-2. Inversión por Colombia

2-1-3. Realización de los Resultados

2-1-4. Realización del Objetivo del Proyecto

2-1-5. Realización del Objetivo Superior (Perspectiva)

2-2. Proceso de Implementación del Proyecto

2-2-1. Implementación de las Actividades

2-2-2. Estructura (sistema) de Operación y Gestión del Proyecto

2-2-3. Método de la Cooperación Técnica

2-2-4. Otros Asuntos

2-3. Evaluación por 5 Criterios

2-3-1. Pertinencia

2-3-2. Efectividad

2-3-3. Eficiencia

2-3-4. Impacto

2-3-5. Sostenibilidad

2-4. Conclusión

3. Lecciones aprendidas .

4. Recomendación

4-1. Recomendaciones al JBB

4-2. Recomendación a la Alcaldía Mayor de Bogotá

4-3. Recomendaciones a las entidades relacionadas con la Agricultura Urbana

4-4. Recomendaciones para JICA

Anexo

1. PDM versión 2

2. Plan Operativo y Resultados (tres años hasta marzo 2009)

3. Tabal de Evaluación (con los resultados de investigación)

4. Resultados de la Inversión

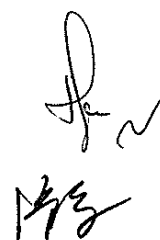
5. Organigrama de la Entidad Ejecutora del Proyecto

6. Lista de Entrevistados



Lista de Abreviaturas

AOD	Asistencia Oficial para el Desarrollo
COP	Pesos Colombianos (Columbia Peso)
COHDES	Consultoría para los Derechos Humanos y el Desplazamiento
DCI	Dirección de Cooperación Internacional
DSL P	Desarrollo Social Local Participativo (Participatory Local Social Development)
FAO	Organización de las Naciones Unidas para la Agricultura y la Alimentación (Food and Agriculture Organization of the United Nations)
INS	Instituto Nacional de Salud
IPES	Promoción del Desarrollo Sostenible
JBB	Jardín Botánico de Bogota José Celestino Mutis
JICA	Agencia de Cooperación Internacional del Japón (Japan International Cooperation Agency)
PDM	Matriz de Diseño del Proyecto (Project Design Matrix)
PO	Plan de Operación (Plan of Operation)
POT	Plan de Ordenamiento Territorial
R/D	Registro de Discusiones (Record of Discussion)
RESA	Red de Seguridad Alimentaria
SDA	Secretaría Distrital de Ambiente
SDIS	Secretaría Distrital de Integración Social)
UNFPA	Fondo de Población de las Naciones Unidas (United Nation Population Fund)



1. Introducción

1-1. Resumen del Proyecto

1-1-1. Nombre del Proyecto

El Proyecto de Mejoramiento de la Condición Nutricional De la Población Vulnerable Incluyendo La Población en Situación de Desplazamiento a Través del Fortalecimiento de la Agricultura Urbana En la Republica de Colombia

1-1-2. Período del Proyecto

Desde el 31 de mayo de 2006 hasta el 30 de mayo de 2009

1-1-3. País y Área Objeto del Proyecto

País objeto: República de Colombia

Área objeto: Localidad de San Cristóbal de Bogotá, D.C.

1-1-4. Beneficiarios del Proyecto

Población Vulnerable Incluyendo la Población en Situación de Desplazamiento

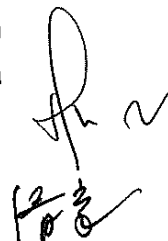
* La población recién desplazada es población flotante que cambia constantemente su sitio de vivienda. Por lo tanto, no posee terreno para realizar actividades de la agricultura urbana. Por consiguiente, en la evaluación intermedia se definió que el grupo objeto de este proyecto es la población vulnerable incluyendo la población desplazada reubicada.

1-1-5. Entidad Ejecutora del Proyecto

Jardín Botánico de Bogotá (Jardín Botánico José Celestino Mutis)

1-1-6. Resumen del Proyecto

En Colombia, desde hace 40 años sigue la violencia generada por grupos armados al margen de la ley. El actual gobierno del Presidente Uribe establece la recuperación de la seguridad como uno de los temas más importantes de la política del país. En el desarrollo de esta política se intensificó el combate entre grupos subversivos y grupos de autodefensa, y también entre grupos subversivos y la fuerza pública. Como consecuencia de este conflicto, muchos campesinos y población vulnerable se están volviendo población desplazada dejando su tierra y fortuna en busca de una vida tranquila. El número de desplazados está aumentando cada año, al momento de la



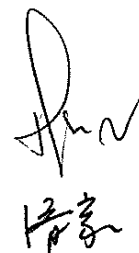
formulación del proyecto en 2005, según la Consultoría para los Derechos Humanos y el Desplazamiento (COHDES), entre 1985 y septiembre de 2005 el número de desplazados alcanzó a 3,6 millones de personas, mientras la cifra emitida por la Presidencia de la República era de 1,7 millones.

Según el gobierno, entre las personas registradas como desplazadas, cerca de 100.000 personas viven en Bogotá. La población desplazada está concentrada en general en el sur de la capital. La localidad de San Cristóbal fue escogida como sitio del proyecto, teniendo en cuenta que en la localidad de Ciudad Bolívar donde está más concentrada la población desplazada dentro de las 20 localidades de Bogotá ya se había realizado un proyecto de agricultura urbana por parte de Organización de las Naciones Unidas para la Agricultura y la Alimentación (FAO) y que la Unidad Territorial de Bogotá de la anterior Red de Solidaridad Social (actual Acción Social) tiene mucha experiencia de operar en la Localidad de San Cristóbal, que es la quinta localidad en cuanto al número de la población desplazada.

La condición nutricional de la población vulnerable incluyendo la población desplazada es precaria en general, el Gobierno Distrital de Bogotá, bajo la política distrital titulada "Bogotá sin Hambre" de la administración anterior y "Bogotá Bien Alimentada" de la actual administración, realiza diferentes actividades tales como comedores comunitarios¹ en busca de mejoramiento de la condición nutricional de dicha población y proyecto de la agricultura urbana (Proyecto 319) con el objeto de contribuir en el mejoramiento de la condición socioeconómica, cultural y de la seguridad alimentaria de dicha población. El Proyecto 319 fue realizado durante la administración anterior entre 2004 y 2008, siendo entidad ejecutora el Jardín Botánico de Bogotá (JBB), y bajo la actual administración está continuado desde el 2008 hasta el 2012.

Ante esta situación, el gobierno colombiano solicitó al gobierno japonés la cooperación técnica en un proyecto que busca fortalecer la comunidad a través de la difusión de la técnica de agricultura urbana. Ante esta solicitud, la Agencia de Cooperación Japonesa (JICA) estableció un proyecto de cooperación técnica que dura 3 años desde el 31 de mayo de 2006, siendo la entidad ejecutora el JBB en la coordinación con el Proyecto 319 en busca de complementar algunos aspectos que faltan en dicho Proyecto tales como fortalecimiento de la técnica de difusión.

¹ Actualmente en Bogotá existe 350 comedores comunitarios y ofrecen el almuerzo a 500.000 personas incluyendo a la población desplazada.



1-2. Resumen de la Evaluación Final

1-2-1. Resumen de la Evaluación

Como el Proyecto se culmina a final del mes de mayo de 2009, se realiza la evaluación conjunta entre el lado colombiano y el lado japonés. En la evaluación se confirman los resultados y el proceso de realización del Proyecto y con base la información obtenida se evalúa el Proyecto conjuntamente entre Colombia y Japón según cinco aspectos (pertinencia, efectividad, eficiencia, impactos y sostenibilidad).

1-2-2. Objetivo de la Evaluación

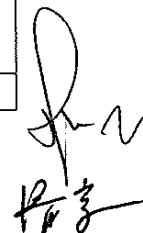
De acuerdo con el resultado de la evaluación, se formulan las recomendaciones que se deberían cumplir para alcanzar a la meta superior y a la vez se extraen lecciones que se puedan ser útiles para proyectos similares con el fin de presentarlos a las entidades relacionadas de ambos países.

1-2-3. Metodología de la Evaluación

La Matriz de Diseño del Proyecto (PDM) fue modificada en dos ocasiones durante el período del proyecto. En la evaluación final, con base en la PDM versión 2 aprobada en mayo de 2008 por el Comité Conjunto de Coordinación, se realizó la evaluación sobre los 5 siguientes aspectos:

Tabla 1: Aspectos de la Evaluación

Logros del Proyecto		Se refiere a la confirmación del nivel de logro respecto a los aportes, resultados esperados, objetivos del Proyecto.
Proceso de Implementación		Se refiere a la confirmación de las actividades ejecutadas durante el período del Proyecto.
5 Criterio	Pertinencia	Un criterio para considerar la validez y necesidad de un proyecto en cuanto a si los efectos esperados del proyecto (o el objetivo del proyecto y el objetivo general) satisfacen las necesidades de los beneficiarios objetivo; si la intervención de un proyecto es adecuada como una solución a los problemas en cuestión; si el contenido de un proyecto es consistente con las políticas; si las estrategias y enfoques del proyecto son relevantes, y si se justifica implementar el proyecto con fondos públicos de la Asistencia Oficial para el Desarrollo (AOD).
	Efectividad	Un criterio para considerar si la implementación de un proyecto a beneficiado (o beneficiará) a los beneficiarios a quienes está dirigido o a la sociedad objeto.
	Eficiencia	Un criterio para considerar cómo se convierten los recursos



		económicos/insumos en resultados. Se concentra principalmente en la relación entre el costo del proyecto y los efectos.
	Impacto	Un criterio para considerar los efectos del proyecto con atención a los efectos de largo plazo, incluyendo los directos o indirectos, positivos o negativos, intencionales o involuntarios.
	Sostenibilidad	Un criterio para considerar si los efectos producidos continúan una vez que se termina la asistencia.

Fuente: Lineamientos de la JICA para la Evaluación de Proyectos ~ Métodos Prácticos para la Evaluación de Proyectos ~ (Febrero de 2004)

1-2-4. Conformación del Comité de Evaluación Conjunta

(1) Miembros del lado japonés

No	Nombre y apellido	Cargo	Entidad
1	Masanobu Kiyoka	Líder de la Misión	Profesional de la cooperación internacional de JICA
2	Yuki Ohashi	Evaluación y análisis	Interworks Inc.
3	Yohei Hashimoto	Planeación y administración	Funcionario de JICA Sección de Cultivos del Campo No. 1 del Departamento de Desarrollo Rural

(2) Miembros del lado colombiano

No	Nombre y apellido	Cargo	Entidad
1	Edna Rángel	Secretaría General	JBB (Jardín Botánico de Bogotá)
2	Yibby Forero Torres	Subdirectora de Investigación	INS (Instituto Nacional de Salud)
3	Claudia Sánchez	Coordinadora de Gestión Ambiental	IPES (Promoción de Desarrollo Sostenible)
4	Rosángela Correa	Asesora	DCI (Dirección de Cooperación Internacional), Acción Social
5	Jorge Ardila	Asesor	ReSA (Red de Seguridad Alimentaria), Acción Social
6	Juan Carlos Gutierrez	Profesional especializado en Selvicultura Flora y Fauna Silvestre	SDA (Secretaría Distrital de Ambiente)
7	Rodrigo Isaza	Subdirector Cooperación Internacional	Dirección Distrital de Relaciones Internacionales, Secretaría General

1-2-5. Agenda de la Evaluación

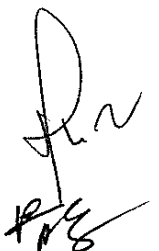
Período de la evaluación: Desde el 12 de abril hasta el 1 de mayo de 2009

Líder y miembro encargados de la planeación y administración:

Desde el 19 de abril hasta el 1 de mayo de 2009

Miembro encargado de la evaluación y análisis:

Desde el 12 de abril hasta el 1 de mayo de 2009

A handwritten signature in black ink, consisting of a large, stylized initial 'D' followed by a cursive name, and a second signature below it.

2. Resultados de Evaluación

2-1 Logros del Proyecto

2-1-1 Inversión por Japón

El resumen de la inversión realizada por el lado japonés en el Proyecto es el siguiente, cuyo detalle se encuentra en el Anexo 4: Resultados de la Inversión:

(1) Un experto japonés de largo plazo

Hay un experto de largo plazo enviado de JICA (operación y administración del proyecto y fortalecimiento de la comunidad) desde el inicio del Proyecto hasta la fecha.

(2) Pasantías de contrapartes en Japón

Fueron enviados 5 contrapartes a las pasantías en Japón².

	Temas	Número de Contrapartes Participantes
1	Curso General "Teoría y Práctica del Desarrollo Social Local Participativo" (DSLPP)	3
2	Curso Regional "Metodología de difusión de la Agricultura Orgánica como apoyo a los agricultores de pequeña escala (para el América Central y el Caribe)	2

(3) Equipamientos, materiales e infraestructura

Se donaron equipos que equivalen a 116.256.518 pesos colombianos (equivalente a 5.880.000 yenes japoneses³), tales como un vehículo, equipos de oficina como fotocopidora y computador, y cámaras digitales. Además se construyó un salón de Capacitación en el JBB con el monto de 177.137.733 pesos colombianos (equivalente a 9.920.000 yenes japoneses⁴).

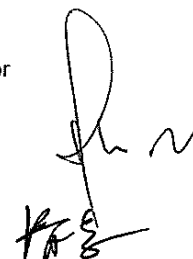
(4) Costo de operación

Fue invertido el monto de 385.626.644 pesos colombianos (equivalente a 18.543.000

² Uno del personal de contraparte participó en Programa de Capacitación para Líderes Jóvenes/Países latinoamericanos (español) fuera del marco del Proyecto.

³ Para convertir el valor en pesos en el valor en yenes se aplicó la tasa de cambio mensual establecida por JICA para control de presupuesto para cada mes en que se realizó la inversión.

⁴ Ídem.



yenes japoneses⁵) como recursos para el fortalecimiento de actividades locales.

2-1-2. Inversión por Colombia

El resumen de la inversión realizada por el lado colombiano en el Proyecto es el siguiente cuyo detalle se encuentra en el Anexo 4: Resultados de la Inversión:

(1) Profesionales y técnicos contrapartes

Se asignó el Director del JBB como Director del Proyecto y el Subdirector Técnico como Coordinador del Proyecto. Todo el personal de contraparte quien fue asignado para realizar las actividades del Proyecto son contratistas del JBB para el Proyecto 319⁶. Entre ellos se encuentra un Coordinador del Proyecto, un Coordinador Territorial de la Localidad de San Cristóbal, un profesional agrónomo, uno o dos profesional(es) de educación y 3 a 4 técnicos. A partir del año 2008, se contrataron 1 ó 2 profesionales del tema de nutrición.

(2) Costo de operación del Proyecto

Se invirtieron 892.229.396 pesos colombianos (equivalente a 47.188.593 yenes japoneses⁷) hasta el final de 2008.

(3) Otros aportes

Una oficina para el experto de JICA, los equipos y materiales principales para las actividades fueron suministrados por el JBB. Además una secretaria y conductores del Proyecto 319 se encargaron del trabajo del Proyecto de JICA según la necesidad.

2-1-3 Logro de los Resultados

Resultado 1: Se fortalece la capacidad técnica instalada en Jardín Botánico en Agricultura Urbana
Indicador: Se elabora un Manual de tecnología de siembra y un Manual de metodología social.

⁵ Ídem.

⁶ En este informe se denomina como el "Personal de Contraparte" el personal del JBB que se dedicó a actividades del Proyecto. En el Registro de Discusiones (R/D) el personal de Acción Social se incluye en el personal de contraparte, sin embargo, no se incluye en este informe, debido a que no se dedicó a las actividades del proyecto.

⁷ Para obtener el valor en yenes se aplicó la tasa de cambio promedio anual (12 meses) establecida por JICA para el control de presupuesto de cada año como se muestra en continuación:
Año 2006: COP1=¥0.04992, Año2007:COP1=¥0.05733, Año2008:COP1=¥0.05075

El manual de Tecnología de Siembra se ha entregado por parte de JICA al JBB en el 2º Intercambio Internacional de Agricultores Urbanos. El Manual de Metodología Social se encuentra en proceso de impresión para la entrega en mayo.

El Manual sobre la técnica de cultivo sintetiza en una manera didáctica la técnica adecuada de cultivo de la agricultura urbana formulado en estos cuatro años por el Jardín Botánico a través de actividades en Bogotá (desde que el JBB empezó a dedicarse a la agricultura urbana en Bogotá), por lo tanto las partes involucradas manifiestan que en él están recogidos todos los aspectos necesarios.

En cuanto al Manual sobre la metodología de fortalecimiento social, la metodología y la técnica que muestra el manual se han comprobado su utilidad en las prácticas realizadas en la Localidad de San Cristóbal para promocionar la agricultura urbana. Por lo tanto el personal de contraparte que se dedicó a la capacitación y al trabajo comunitario manifiesta que es muy efectivo para construir una buena relación con la comunidad, promocionar la participación activa de la comunidad y organizarla.

La técnica presentada en el manual arriba mencionado se transfirió a través de la capacitación sobre la técnica de cultivo y el trabajo comunitario (ambas capacitaciones se realizaron en tres ocasiones en estos tres años), con el fin de fortalecer la capacidad del personal del JBB.

Resultado 2: Se fortalecen las capacidades del grupo objetivo en Agricultura Urbana.

Indicador: El área de producción de las familias del grupo objetivo determinadas por la línea base, se incrementa en un 10%.

Según el Estudio de Evaluación de Impacto, comparando la línea base con la segunda medición, el área sembrada de los beneficiarios aumentó en 32,1%, por lo tanto se logró este Resultado 2.

El personal de contraparte expresa que la técnica de cultivo de los beneficiarios se ha mejorado. A través de las visitas realizadas al sitio de Proyecto, se ha identificado el estado de aprovechamiento de espacios pequeños para los cultivos.

El nivel de la capacidad de preparación y transformación de alimentos y del conocimiento sobre el tema nutricional se varía según beneficiario, sin embargo a través del informe del personal de contraparte y de entrevistas con la comunidad se pudo confirmar que se aplica lo aprendido en la vida cotidiana.

Resultado 3: Fortalecer un marco organizacional comunitario para apoyar la sostenibilidad de la agricultura urbana en la localidad.
Indicador: La Mesa Local de Agricultura Urbana se celebra 6 veces por un año con la participación de 10 representantes del grupo comunitario.

En el año 2008 la Mesa Local de Agricultura Urbana de San Cristóbal fue convocada en 11 ocasiones y tuvo la participación de más de 10 representantes de los grupos comunitarios por reunión.

A través de los talleres y capacitación para fortalecer la organización comunitaria realizados por el Proyecto se fortaleció el tejido social y se ha aclarado que a enero de 2009 hay 8 grupos que ya empezaron algún proyecto propio. La alianza entre diferentes grupos comunitarios y la relación entre estos grupos e instituciones territoriales fue fortalecida con el funcionamiento de la Mesa. Se adelantan esfuerzos para institucionalizar la realización de la feria de agricultores urbanos dos veces al año en la Localidad de San Cristóbal. En los meses octubre y noviembre de 2008 y en enero de 2009 se realizó una capacitación para obtener la licencia de tratamiento de alimentos con el fin de la comunidad pudiera vender sus cosechas en la feria, con la ayuda del Hospital de San Cristóbal, la cual fue planeada y realizada por la Mesa Local. Con base en este hecho, se puede decir que la alianza entre entidades participantes de la Mesa se ha establecido.

2-1-4 Realización del Objetivo del Proyecto

Objetivo del Proyecto: Se mejoran las condiciones nutricionales de la población vulnerable incluyendo la población en situación de desplazamiento de la Localidad 4ta. de Bogotá D.C., a través del fortalecimiento de a agricultura urbana.
Indicador: La cantidad y variedad de hortalizas que consumen las familias beneficiarias aumenta 10% hasta final del Proyecto.



Se han promovido la siembra y el consumo de 6 especies (quinua, pepino dulce, cubios, ibias, amaranto y ulluco), las cuales son especies tradicionales pero habían dejado de ser cultivadas. A través del Estudio de Impacto se ha confirmado el consumo sobre 4 de ellas, por lo tanto el número de especies que se consume se aumentó de 29 a 33 (13,7%) comparando línea base con el resultado de la segunda medición respectivamente, resaltando rescate de especies ancestrales.

En el Estudio de Impacto se midió el consumo a través de la frecuencia del consumo. El consumo del Grupo de Verduras de Alta Frecuencia y del Grupo Verduras de Baja y Media Frecuencia aumentó en 12 a 14% y 8 a 12% respectivamente,⁸ Por lo tanto se puede decir que el objetivo del Proyecto se logró en su mayoría.

2-1-5 Realización del Objetivo Superior (Perspectiva)

Objetivo Superior: Se mejoran las condiciones nutricionales de la población vulnerable, incluyendo la población en situación de desplazamiento a través del fortalecimiento de la agricultura urbana en Bogotá D.C.

Indicador: La cantidad de hortalizas que consumen los habitantes del estrato⁹ 1, 2 y 3 en Bogotá aumenta 3% hasta 2014.

Como se ha logrado el objetivo del Proyecto, si se desarrolla el Proyecto 319 sin mayor obstáculo, se podrá esperar el logro del objetivo superior. En Colombia se realiza cada cinco años una encuesta sobre la situación nutricional incluyendo el consumo de verduras y está programada la realización de una próxima encuesta en el año 2010, por lo tanto, hay posibilidad de utilizar algunos datos que se obtienen a través de esta encuesta como indicadores alternativos.

2-2. Proceso de Implementación del Proyecto

⁸ Los alimentos se clasificaron en tres grupos de la siguiente manera: el consumo de frecuencia alta: 5 a 7 veces por semana, frecuencia media: 2 a 4 veces por semana, y frecuencia baja: 0 a 1 vez.

⁹ En Bogotá están establecidos 6 estratos sociales y la población vulnerable se encuentra en los estratos de 1 a 3. En los estratos sociales bajos se puede recibir algunos beneficios tales como la tarifa subsidiada de los servicios públicos domiciliarios

2-2-1. Implementación de las Actividades

Cada actividad fue realizada según el entorno que rodea al Proyecto, por lo tanto hubo actividades que se realizaron en diferentes momentos que el momento programado por el Plan de Operación (PO). Sin embargo, casi todas las actividades fueron realizadas. Las actividades que no se realizaron según el PO y sus principales causas son las siguientes (el detalle de otras actividades se ve en el PO y el cuadro de evaluación adjuntos.):

(1) Construcción del salón de capacitación

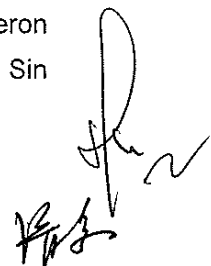
Fue construido un salón de capacitación. Esta construcción estaba programada para cumplir en marzo de 2007, sin embargo como se requirió tiempo para definir el diseño, la inversión fue realizado más tarde de lo programado, y cumplió en marzo de 2008. Se requirió el tiempo para tener acuerdo sobre las especificaciones básicas y realizar el trámite del permiso de construcción. El Salón de Capacitación, después de la culminación de la obra, se entregó inmediatamente al Proyecto 319 del JBB y se utiliza para capacitaciones y reuniones relacionadas al Proyecto 319.

(2) Establecimiento de la línea base

Como el JBB no tiene dependencia relacionada al tema de nutrición y no contaba con el personal especializado en este tema antes del mayo de 2008, primero se intentó establecer una relación de cooperación con la Secretaría de Salud de la Alcaldía Mayor. Pero no se concretó a diciembre de 2006. Por lo tanto se realizó coordinación con INS y en mayo de 2007 se logró establecer una relación de cooperación con esta entidad. A partir del septiembre de ese año el Proyecto cuenta con la ayuda permanente de dicha entidad, con la que se realizó el diseño, ejecución y análisis de estudios de línea base y impacto y la elaboración de instrumentos.

(3) Capacitación a los beneficiarios en técnicas de preparación y transformación de alimentos y en nutrición

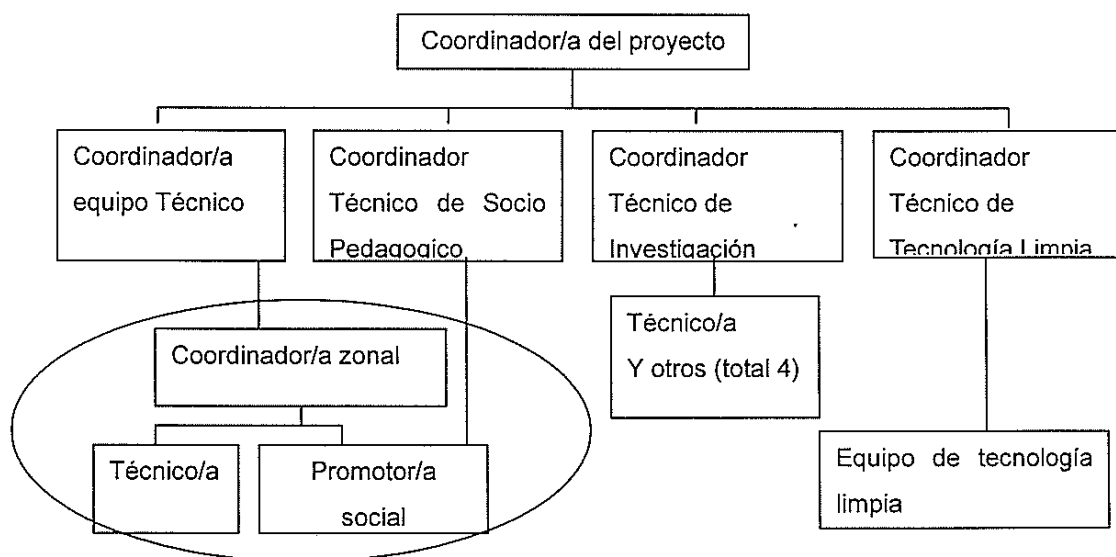
Inicialmente el JBB no contaba profesional sobre la nutrición, pero fueron contratados 2 profesionales desde mayo de 2008 y con la ayuda de INS elaboraron un módulo de capacitación del tema nutricional. Inicialmente la elaboración del módulo estaba programada a partir de abril de 2007, sin embargo, por las razones mencionadas se inició en mayo de 2008 y terminó en septiembre del mismo año. Luego, fueron realizadas actividades de capacitación utilizando este módulo para 237 personas. Sin embargo no se pudo alcanzar a la meta (800 personas).



2-2-2. Estructura (sistema) de Operación y Gestión del Proyecto

El JBB que es la entidad ejecutora del Proyecto de JICA está realizando el Proyecto 319 aparte, por lo tanto el Proyecto de JICA fue realizado para complementar la parte técnica del Proyecto 310, como la tecnología de siembra y la metodología social. Por lo tanto el personal de contraparte técnica del Proyecto de JICA son contratistas contratados para el Proyecto 319. Teniendo en cuenta que la Agricultura Urbana no hace parte de las funciones misionales¹⁰ del JBB, todo el personal para la ejecución del Proyecto 319 fue vinculado mediante la figura de prestación de servicios regido por la ley 80 de 1993.

**Figura 1: Organigrama del Proyecto de Agricultura Urbana (Proyecto 319)
(cuando inició el Proyecto)**



Equipo de difusión que se conforma por cada (uno o varios) sector(es)

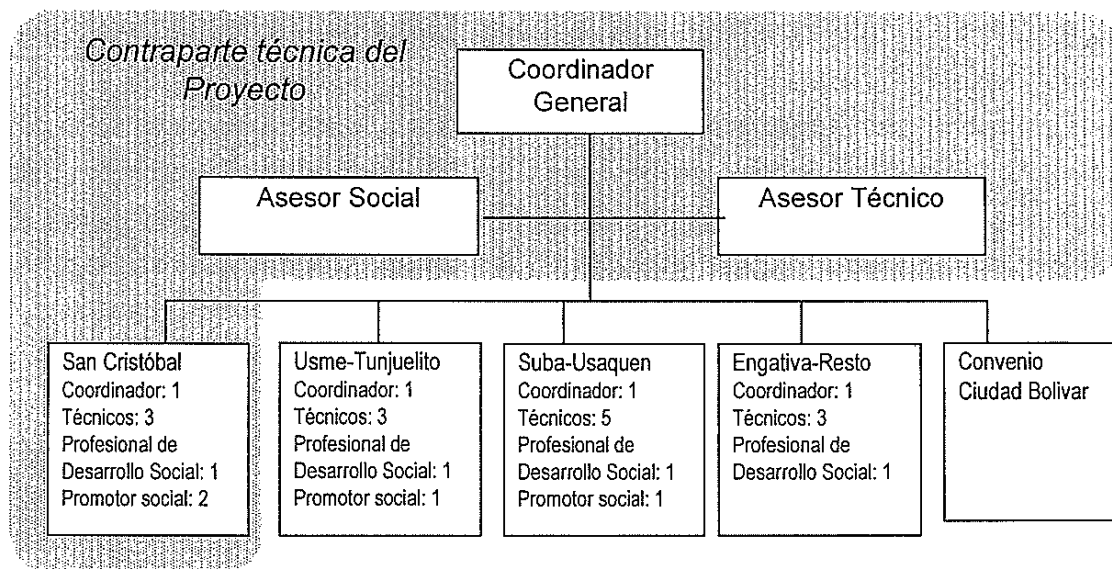
En total del Proyecto 319
 Coordinadores Zonales: 7
 Técnicos: 3
 Promotores sociales: 11
 (A julio de 2006)

Fuente: Cuadro de la Estructura de Operación del Proyecto de Cooperación Técnica I

¹⁰ La función misional de JBB es el Centro de Investigación y Desarrollo Científico con énfasis en ecosistemas altoandinos y de páramo, que contribuye a la conservación de la flora del Distrito Capital, a la sostenibilidad ambiental de su territorio y al aprovechamiento de su patrimonio genético, a través de la investigación científica, la transferencia tecnológica y la educación ambiental.

Firma manuscrita en la parte inferior derecha de la página.

**Figura 2: Organigrama del Proyecto 319
(Después del cambio del Director del JBB en febrero de 2008)**



Nota: La parte sombreadada corresponde al personal de contraparte del Proyecto, pero algunos técnicos y funcionarios del JBB que trabajan en otras localidades también participaron en algunas capacitaciones del Proyecto.

Fuente: Se ha preparado según la entrevista con el experto.

(1) Nivel de Gestión y Administración

La toma de decisión fue realizada con el Director y los directivos de JBB. Sin embargo, con el cambio del Director del JBB que presentó en febrero de 2008 y septiembre de 2008 cambió el sistema de operación del Proyecto 319 y con ese cambio el avance de actividades del proyecto fue afectado. También fue generado un período vacío de uno a dos meses con el cambio seguido de directivos (subdirector técnico y coordinador del proyecto) y del personal de contraparte, generando afectación al desarrollo del Proyecto. El cambio del personal que se ha presentado hasta ahora son los siguientes:

- i) Cambio del director del JBB:
En noviembre de 2006, febrero y septiembre de 2008
- ii) Cambio del subdirector técnico:
En noviembre de 2006 y septiembre de 2008
- iii) Cambio del coordinador del proyecto 319:
En mayo de 2008, enero y marzo de 2009

- iv) Cambio del jefe técnico del proyecto 319:
En diciembre de 2006
- v) Cambio del jefe de educación social del proyecto 319¹¹:
En marzo de 2007 y septiembre de 2008
- vi) Cambio del coordinador territorial y técnicos de la Localidad de San Cristóbal:
En 2007 no se renovó el contrato con dos técnicos y uno de ellos fue despedido prácticamente. En diciembre de 2008 fue terminado el contrato del equipo completo. .
- vii) Cambio del jefe de la tecnología limpia:
Fue abolido este cargo en febrero de 2008

(2) Nivel de Operación y Implementación


La administración de la operación del Proyecto fue realizado conjuntamente entre el Coordinador del Proyecto del Proyecto 319 y el experto de JICA hasta el final de 2008. Luego por el cambio del personal no se ha estructurado completamente el mecanismo de operación del Proyecto.

Todos personales de contraparte son contratista para un período determinado y después de que se caducó el contrato anterior en el mes de diciembre del año pasado no se renovó durante 3 primeros meses de este año. Por lo tanto se veían estancadas actividades del Proyecto durante este período. Especialmente en el año 2008, con el cambio de la administración distrital, los contratos que se firmaron una vez terminaron entre junio y agosto, y luego hasta el noviembre no se renovó ninguno. Los anteriores inconvenientes se presentaron en virtud a los impedimentos presupuestales y contractuales que limitan a las entidades públicas por razones jurídicas. Por eso, el Proyecto tuvo que contratar técnicos con el presupuesto del Proyecto o contar con el personal de contraparte que se ofrecía trabajar voluntariamente. De los cinco becarios que participaron en el curso de capacitación en Japón solamente se queda uno como contraparte del Proyecto.

(3) Comunicación entre las Partes Interesadas

En cuanto a la comunicación entre las partes interesadas, la comunicación entre el experto y el personal de contraparte fue fluida. En cuanto a la comunicación entre el experto y los directivos del JBB, no siempre fue fluida por la inestabilidad de la

¹¹ Inicialmente se llama Jefe de Educación Social, y a partir del año 2008 se denomina Asesor del Desarrollo Social.



estructura operativa y administrativa del JBB. El período vacío del Proyecto mencionado afectó a la comunicación continua con los beneficiarios. El reporte para JICA sobre el desarrollo del Proyecto fue realizado satisfactoriamente a través del reporte mensual presentado por el experto y de Comité Conjunto de Coordinación. El reporte a Acción Social, que es la entidad supervisora del Proyecto, fue realizado en el Comité Conjunto de Coordinación.

(4) Monitoreo del Avance del Proyecto

Con relación al monitoreo de avance y logro del Proyecto, se realizaron una reunión semanal con los técnicos y coordinador territorial y una reunión mensual o por lo menos trimestralmente con el coordinador de Proyecto sobre el avance del proyecto (hasta el diciembre de 2008). El reporte del desarrollo del Proyecto para el JBB fue presentado mensualmente junto con el reporte del proyecto 319.

2-2-3. Método de la Cooperación Técnica

La transferencia técnica del Proyecto se realizó de siguiente manera: mandar el personal de contraparte a las capacitaciones en Japón ("Teoría y Práctica del Desarrollo Social Local Participativo, DSLP" y "Metodología de difusión de la Agricultura Orgánica como apoyo a los agricultores de pequeña escala"), llevar a cabo pasantías sobre la agricultura urbana en Perú, Argentina y Cuba, y realizar capacitación (3 capacitaciones en la técnica de siembra y nutrición, 6 en la técnica de trabajo comunitario, y un taller para fortalecer la meza redonda de la agricultura urbana de la localidad de San Cristóbal etc.). Con el personal de contraparte se les hizo aplicar lo aprendido en el campo según un tema planteado cada vez y revisar el contenido de la capacitación.

El personal de contraparte aplica activamente la técnica introducida por el Proyecto logrando diferentes resultados en la Localidad de San Cristóbal. Sin embargo el personal de contraparte que continúa desde el inicio del Proyecto hasta la fecha es muy poco. Por otro lado se buscó una metodología para estandarizar la técnica transferida y las actividades de los técnicos para poder capacitar a nuevos técnicos, sin embargo el personal encargado de este papel se retiró en noviembre de 2008 por lo tanto este proceso se quedó estancado. El manual elaborado en el proyecto se puede aplicar en la futura transferencia técnica, pero todavía no se ha definido el uso concreto del manual en el JBB.

Handwritten signature and initials in black ink, located in the bottom right corner of the page.

2-2-4 Otros Asuntos

(1) Revisión de PDM

1) Modificación de PDM de la versión 0 a la versión 1

El trabajo de modificación fue iniciado desde el comienzo del Proyecto y el borrador fue preparado en septiembre de 2006 por parte del Proyecto. Con base en este borrador fue realizado ajustes con la Oficina de JICA y el PDM versión 1 y PO versión 1 fueron aprobados en el Comité Conjunto de Coordinación en 25 de enero de 2007.

2) Modificación de PDM de la versión 1 a la versión 2

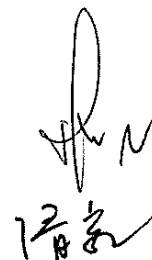
En el Comité de Operación realizado en agosto de 2007 fue identificada la necesidad de nueva modificación de PDM y PO por las siguientes razones:

- a) en el marco del Proyecto no había mucha necesidad de trabajar en las actividades del Proyecto 319 que realiza el JBB como proyecto propio
- b) se requería aclarar el que debería asumir el Proyecto y la Alcaldía Menor en las actividades,
- c) no se había definido una parte de las actividades para el Resultado 2 en PO versión 1,
- d) se requería cambiar el lineamiento de las actividades para el Resultado 3.

En cuanto a la última razón mencionada (se requería cambiar el lineamiento de las actividades para el Resultado 3), eso fue necesario porque se dificultó lograr "asegurar la sostenibilidad de las actividades de la agricultura urbana y del mejoramiento de la condición nutricional con las actividades organizacional involucrando otras instituciones que la Alcaldía Menor y el JBB". Por lo tanto se planteó asegurar dicha sostenibilidad a través del fortalecimiento de la Mesa Local y de la alianza entre la Mesa y entidades relacionadas. El borrador de versión 2 ya se había preparado en octubre de 2007, sin embargo se demoró para tener acuerdo del Director del JBB, y fue elaborado el borrador final en el Comité de Operación realizado en diciembre. Luego por el cambio del director presentado en febrero de 2008, se demoró el proceso y finalmente fue aprobado en mayo de 2008 en el Comité Conjunto de Coordinación luego del ajuste con la Oficina de JICA.

(2) Seguimientos de las recomendaciones de la Evaluación Intermedia

En la evaluación intermedia se presentaron 13 recomendaciones, de las cuales hay algunas que no se han realizado. En continuación muestra el avance de la realización



Handwritten signature and date: 12/18/08

de las recomendaciones.

① **La definición del grupo objeto**

Después de la Evaluación Intermedia, se han definido que la “población recién desplazada” en el Proyecto es la población desplazada reubicada.

② **Definición del mejoramiento de la condición nutricional**

Después de la Evaluación Intermedia, se han definido que el “mejoramiento de la condición nutricional” es en términos de aumento de la cantidad y variedad de hortalizas consumidas por la población objeto del proyecto, a través de una estrategia integral de agricultura urbana que implica capacitación, producción y educación alimentaria y nutricional.

③ **Estabilidad del personal contraparte**

Se presentó el cambio frecuente de directivos y del personal de contraparte, por lo tanto no se ha logrado. El nuevo Director del JBB asumió su cargo en septiembre de 2008 y el nuevo Coordinador del Proyecto llegó en marzo de 2009. Por lo tanto el trámite de contratación (72 personas en total del Proyecto 319) fue terminado apenas en abril de este año.

④ **Difusión del modelo participativo de la agricultura urbana**

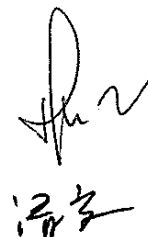
Se ha definido aplicar el modelo participativo desarrollado en la Localidad de San Cristóbal en el Proyecto 319. En cuanto a la implementación del modelo incluyendo el uso del manual social elaborado en el Proyecto está en etapa de planeación. Por otro lado, no se ha adelantado la discusión sobre la aplicación del modelo en el nivel nacional.

⑤ **Mayor mejoramiento de la condición nutricional**

En la evaluación intermedia se planteó desarrollar la agricultura a una escala más grande identificando y aprovechando terrenos desocupados. Ante esta propuesta, el JBB está pensando expandir la escala de agricultura urbana con el fin de hacerla como una alternativa productiva. También está elaborando una propuesta para que al realizar la revisión del Plan de Ordenamiento Territorial (POT) la agricultura urbana se incluya como un uso de terreno.

⑥ **Utilizar la línea base como diagnóstico de la situación nutricional actual relacionada con el consume de hortalizas**

El estudio de línea base no aportó información sobre deficiencias específicas de micronutrientes y por lo tanto no se pudo recomendar la siembra, consumo y forma de preparación de especies sugeridas en la evaluación intermedia, que permitiera mejorar la condición nutricional. La ejecución del Estudio Línea



Base se atrasó más de lo programado, por lo tanto no se pudo aprovechar el resultado del Estudio.

⑦ **Organizar información sobre mejoramiento de condiciones nutricionales por parte del JBB**

Se terminó la recopilación de los materiales sobre la agricultura urbana. Sin embargo, no se ha terminado la organización de la información sobre la nutrición.

⑧ **Identificar los espacios y las entidades relacionadas con el tema nutricional que contribuyen al cumplimiento del Objetivo del Proyecto**

Con el INS se estableció una relación de cooperación en mayo de 2007, sin embargo esta relación está limitada al período del Proyecto. Especialmente en cuanto a las instituciones de la Alcaldía Mayor, después del cambio de la administración en 2008 no se ha estructurado la relación de cooperación. Actualmente el JBB está adelantando esfuerzos para establecer la alianza con entidades relacionadas incluyendo la Secretaría de Salud de Bogotá, pero este proceso apenas está iniciando.

⑨ **Establecimiento de una dinámica pertinente para la toma de decisiones al interior del JBB**

No se ha establecido suficientemente por la inestabilidad de la estructura operativa del JBB.

⑩ **Garantizar la transferencia y documentación de la información y capacitación recibida en el marco de desarrollo del proyecto**

No se ha logrado por el cambio y el retiro del personal capacitado. No se ha definido cómo se aprovecharía la técnica transferida por el Proyecto de aquí en adelante.

⑪ **Se debe tener en cuenta los aspectos de redistribución del gasto en la evaluación de impacto**

Se realizó el Estudio de Impacto incluyendo análisis del gasto y forma de acceso de alimentos.

A través del Estudio de Impacto se ha confirmado que la forma de adquisición de verduras más representativa para el grupo de agricultores urbanos es el autoconsumo a diferencia de la Línea Base donde era la compra, por lo consiguiente el gasto en verduras se redujo

⑫ **Estructurar el componente de educación alimentaria y nutricional para garantizar su integralidad e impacto**

Se ha establecido un módulo de capacitación sobre la nutrición y la vida

alimenticia y se han realizado capacitaciones a la comunidad por parte de técnicos.

⑬ Modificación de la PDM

Se han modificado los indicadores de los resultados 2 y 3 según las recomendaciones.

2-3 Evaluación por 5 criterios

2-3-1 Pertinencia

(1) Relevancia con las necesidades

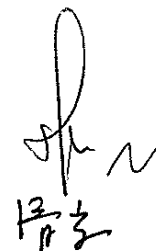
En la Localidad de San Cristóbal el 24% de los niños presenta la situación de desnutrición crónica y este porcentaje es muy alto comparando con el promedio de Bogotá que es el 13.41%¹². Esta localidad principalmente se consiste en los estratos sociales 1 y 2, y se considera que la condición nutricional de la población vulnerable incluyendo la población desplazada es precaria. Ante esta situación la Alcaldía de Bogotá realiza varias actividades para la seguridad alimentaria y nutrición tales como comedores comunitarios. Por lo tanto la realización del proyecto en busca del mejoramiento de la condición nutricional a través de la Agricultura Urbana coincide con la necesidad del grupo objeto y de la sociedad.

(2) Relevancia con el Plan de Desarrollo de Colombia

La meta y la meta superior del Proyecto coincide con la política del gobierno colombiano para la atención a la población desplazada y según la política se realiza la asistencia a la agricultura urbana por parte de RESA de Acción Social, por lo tanto este Proyecto está acorde con la política del gobierno colombiano.

En cuanto al Distrito Capital de Bogotá, el Proyecto está acorde con la programa de la seguridad alimentaria y nutricional. Dentro de esa programa la agricultura urbana se ubica en el lineamiento para el mejoramiento del acceso a alimentos. Después del cambio de la administración distrital, se continúa el mismo lineamiento en el Plan de Desarrollo "Bogotá Positiva", bajo el programa de "Bogotá Bien Alimentada" que trata de la seguridad alimentaria y mejoramiento nutricional. El Proyecto 319 como una alternativa para realizar este Plan de Desarrollo, por lo tanto el Proyecto que apoya técnicamente a la realización del Proyecto 319 está acorde con la política del distrito.

¹² Plan Preliminar del Proyecto 16 de diciembre de 2005 (JICA, Oficina Colombia)



(3) Pertinencia de la política de la asistencia de desarrollo oficial (AOD) del Japón

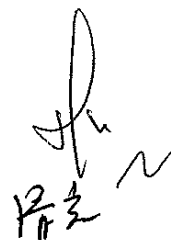
En el Plan de Operación según el país de JICA para el año 2007, se formó el Programa de Asistencia para la Población Vulnerable Incluyendo la Población Desplazada como una alternativa para alcanzar la meta "Construcción de la Paz", y este Proyecto se figura debajo de este Programa. En el Plan arriba mencionado para el año 2008, como lineamiento del desarrollo de proyectos para la construcción de la paz, se estableció promocionar la convivencia y reconciliación entre actores y víctimas y dentro de la comunidad receptora, ofreciendo asistencia a la reintegración socio-económica de la población desplazada y las víctimas de minas antipersonales que son víctimas del conflicto armado. Como en este Proyecto se aplicó la metodología participativo en las actividades de difusión, la aproximación del Proyecto que promueve a la integración social coincide con esta política de JICA.

(4) Pertinencia del Proyecto como el método para lograr el objetivo

A través de la evaluación intermedia se definió que la población desplazada que es objeto del Proyecto es la población reubicada que se puede dedicar a la agricultura urbana. También se estableció que el mejoramiento de la condición nutricional se logra a través del aumento del volumen y variedad de las hortalizas que consumen los beneficiarios. Por lo tanto se puede decir que fue adecuada la aproximación del Proyecto que buscaba contribuir no solamente en la difusión de la técnica del cultivo sino en la promoción del cambio de hábito alimentario desde la dieta tradicional conformada por algunos nutrientes hacia la dieta con el consumo de hortalizas a través de la educación nutricional con base en esta definición.

Al intervenir en la población vulnerable incluyendo la población desplazada a través de las actividades de la agricultura urbana permite contribuir en el mejoramiento del nivel de la vida de los beneficiarios desde diferentes aspectos, tales como la seguridad alimentaria y nutricional, integración social, formación y fortalecimiento de la comunidad, educación ambiental y nutricional y generación del ingreso. Éstas son las necesidades que tiene el grupo objeto del Proyecto, por lo tanto el lineamiento del Proyecto es adecuado.

En cuanto a la selección del área objeto, este proyecto, a pesar de un período relativamente corto de tres años, busca lograr varios resultados tales como transferir la



técnica de la agricultura urbana, técnica de la difusión para la comunidad, y promoción de la integración social de la comunidad participante y aprovechando en lo posible la inversión limitada obtuvo los resultados arriba mencionados. Ante este logro, se puede decir que la orientación del Proyecto que busca difundir y replicar los resultados del Proyecto obtenidos en la Localidad de San Cristóbal a otras localidades de Bogotá fue adecuada.

(5) Pertinencia del Plan

La pertinencia del Proyecto no fue suficiente por los siguientes cuatro aspectos:

1) Condiciones externas

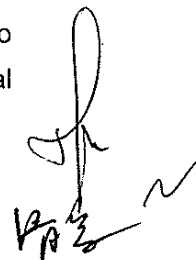
En la PDM se estableció como una de las condiciones externas necesarias para el Proyecto "No hay cambios de personal directivo y operativo en la estructura del Proyecto". Sin embargo, como se mencionó en la estructura del Proyecto, se ha presentado el cambio del personal de contraparte con frecuencia. Si se considera que la modalidad contractual del personal es inestable, se suponía el cambio del personal, por lo tanto no fue adecuado establecer la continuidad del personal como condición externa necesaria.

2) Indicadores de cada objetivo

La agricultura urbana de Bogotá todavía no sale del nivel de huertas caseras, por lo tanto, el área del cultivo es muy pequeña y se limita la posibilidad de expandir. En esta situación no parece adecuado el indicador del Resultado 2 "El área de producción de las familias del grupo objetivo determinadas por la línea base, se incrementa en un 10%" Además no hay soportes para juzgar la pertinencia de las cifras de los objetivos "La cantidad y variedad de hortalizas que consumen las familias beneficiarias aumenta 10 % hasta final del proyecto (Objetivo del Proyecto)" y "La cantidad de hortalizas que consumen los habitantes del estrato 1, 2 y 3 en Bogotá aumenta 3 % hasta 2014 (Objetivo superior)". En cuanto al objetivo superior, no hay entidad que investigue anualmente sobre el consumo de hortalizas en el nivel del hogar, por lo tanto es difícil identificar el método de conseguir datos concretos.

3) La relación entre la agricultura urbana y el mejoramiento de la condición nutricional

Como se ha mencionado en la "pertinencia del Proyecto como un método para lograr el objetivo", la agricultura urbana genera muchos beneficios como fortalecimiento de la comunidad local, y el mejoramiento de la condición nutricional



es uno de ellos. Por otro lado, no hay indicadores objetivos con los que se pueda medir el grado de mejoramiento de la condición nutricional a través de la agricultura urbana del nivel de huerta casera. Por lo tanto fue difícil desarrollar el Proyecto con base en la PDM. En la etapa del Proyecto la agricultura urbana en Bogotá era un intento nuevo y no se habían identificado los beneficios que se podían generar con la agricultura urbana.

4) Insumo para las actividades relacionadas con el mejoramiento de la condición nutricional

En este Proyecto se estableció como el objetivo el mejoramiento de la condición nutricional, pero en el JBB no había personal especializado en este tema. Además aunque se planeaba establecer una relación de alianza con otras entidades especializadas de la nutrición, no se había realizado contacto previo para este objetivo. Por no haber planeado el insumo del personal especializado, se dificultó realizar actividades correspondientes.

(6) Colaboración con otras organizaciones

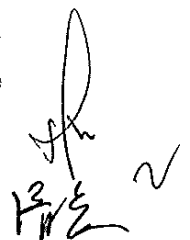
El Proyecto ha mantenido la relación de colaboración con diferentes entidades tales como RESA Urbana de Acción Social, que realiza asistencia a la agricultura urbana en diferentes partes del país incluyendo Bogotá, IPES y Asociación Manos Amigas, las cuales con las ONGs, y la Universidad del Rosario y ha venido realizando el intercambio de la información y la organización conjunta de eventos con ellas.

Se puede destacar que en la capacitación de la técnica de difusión que realizó el Proyecto participaron estas entidades y algunos técnicos o contratistas capacitados en el Proyecto y luego retirados del JBB ingresaron en estas entidades. Así la técnica transferida se aprovecha en diferentes entidades también.

(7) Pertinencia de la tecnología introducida en el Proyecto

La técnica desarrollada es acorde con las condiciones geográficas (desde 2550 hasta 3100 metros sobre el nivel del mar) sociales y urbanas de Bogotá, por lo tanto es adecuada para su difusión. La metodología del cultivo aprovechando en espacios pequeños de la ciudad fue bastante acogida como una nueva alternativa por parte de habitantes que tienen experiencia de cultivo y conocimiento sobre la agricultura.

La metodología introducida para fortalecer la capacidad relacionada con el trabajo comunitario se ha desarrollado con base en el concepto de DSLP. El personal de

Handwritten signature and initials in the bottom right corner of the page.

contraparte de la Localidad de San Cristóbal realiza actividades de difusión utilizando la técnica obtenida en la capacitación. El personal de contraparte afirma que se ha mejorado la relación con la comunidad por cambiar la actitud en el trabajo comunitario, se ha aumentado el grado de participación en los habitantes, se ha generado la relación de colaboración en la comunidad, se mejoró la relación en el interior de la comunidad y se fortaleció el tejido social. En los talleres realizados en la Mesa Local, se realizó capacitación sobre el fortalecimiento organizacional y se estableció el concepto básico de la Mesa utilizando instrumentos participativos. Luego, a través de planeación y realización de eventos y talleres participativos se trabajó para fortalecer la capacidad de los beneficiarios. Como resultado de estas actividades, la comunidad se puede encargar de la logística y la moderación de las reuniones. Este proceso está recopilado en el Manual Social.

2-3-2 Efectividad

(1) Logros del Objetivo del Proyecto

El objetivo del Proyecto se logró, ya que se ha confirmado el aumento del consumo y de variedad que se cultiva.

La escala de la agricultura urbana de Bogotá es del nivel de la huerta casera, por lo tanto no se puede completar nutriente solamente a través de la agricultura urbana. En este Proyecto, introduciendo la educación nutricional como una actividad de capacitación de la agricultura urbana se intentó alcanzar a la meta del mejoramiento de la condición nutricional. Sin embargo por la influencia de algunos factores externos mencionado en la "Pertinencia" (el cambio del personal) se demoró la elaboración del módulo de capacitación y la realización de las capacitaciones a la comunidad, y se pudo lograr la meta en cuanto al número de las personas capacitadas. Sin embargo, teniendo en cuenta que el módulo de capacitación se terminó de ser elaborado en el mes de septiembre de 2008, el hecho de que se han capacitado 237 personas en aproximadamente 3 meses es apreciable.

(2) Contribución de los Resultados generados para alcanzar el Objetivo Especifico

En el Proyecto para obtener los tres resultados planteados trabajaron en el mejoramiento de la capacidad de los técnicos, en el incremento de la capacidad de los

beneficiarios y el fortalecimiento de la alianza entre diferentes entidades que apoyan a las actividades de los beneficiarios. Para lograr la meta del Proyecto estos resultados fueron suficientes.

Una de las condiciones externas para lograr el Objetivo del Proyecto fue "cambios de personal directivo y operativo en la estructura del Proyecto". Como se presenta el cambio del personal frecuentemente, una de las tareas es asegurar la transferencia de la técnica introducida por el Proyecto al personal nuevo. En cuanto a otra condición externa, "La AU continúa con respaldo político a nivel Distrital después del 2008", no hay cambio de la prioridad sobre la agricultura urbana en la política de la administración distrital.

(3) Factores positivos y negativos para lograr la meta del Proyecto

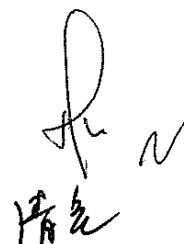
Los factores que contribuyeron el desarrollo del Proyecto son los siguientes:

- De acuerdo con el marco y el diseño del Proyecto, el experto logró establecer una relación de colaboración con una entidad especializada y contribuyó en el fortalecimiento de la técnica de la difusión y del mejoramiento de la condición nutricional.
- El personal de contraparte apropió activamente la técnica introducida por el Proyecto y la aplica en su trabajo.
- Se pudo contar con la ayuda del INS sobre los conocimientos nutricionales que hacían falta en el Proyecto, y gracias a esa relación se pudo realizar el estudio de impacto y la construcción de módulo de capacitación sobre la educación nutricional-

Los factores que impidieron o dificultaron el desarrollo del Proyecto son los siguientes:

- Como se ha mencionado en la "Estructura del Proyecto", el cambio frecuente del personal que era condición externo del Proyecto generó confusión en el Proyecto, afectando a las actividades en general.
- Como se ha mencionado en la "Pertinencia", en la etapa de formulación del Proyecto no se habían concretado el contenido de las actividades relacionadas con el mejoramiento de la condición nutricional, en la primera mitad del Proyecto no se realizó ninguna actividad concreta para este fin.

2-3-3 Eficiencia



(1) Generación de los resultados

Como se mostró en "Logro de los Resultados", los indicadores de cada resultado fueron cumplidos y se confirmó igualmente que se obtuvieron los resultados planteados. Sin embargo, estos resultados apenas están empezando a aparecer, por lo tanto es necesario realizar un seguimiento para mantener y establecer estos resultados.

(2) Vínculo entre las actividades y los resultados

Las actividades establecidas para cada uno de los resultados fueron suficientes.

Una de las condiciones externas para lograr los Resultados esperados fue "El Comité de Seguridad Alimentaria y Nutricional (SAN) se vincula institucionalmente durante el Proyecto". La Mesa de Seguridad Alimentaria y Nutricional no se ha afectado ni se ha presentado ningún cambio estructural. En cuanto a la segunda condición externa "El plan de ordenamiento territorial no determina el aprovechamiento de espacio para la AU", actualmente no es una barrera para desarrollar la agricultura urbana por ser actividades que aparecen en el Plan de Desarrollo de Bogotá, y el nivel no sale de la escala de huertas caseras. Sin embargo, para poder desarrollar más la agricultura urbana utilizando espacios vacíos de la ciudad es necesario realizar algunos ajustes para no generar choque con el POT. Por lo tanto se está elaborando una propuesta sobre la modificación del POT.

(3) Tiempo, calidad y cantidad de las inversiones

En este Proyecto la estructura de la realización del Proyecto era inestable tanto del nivel administrativo del JBB como el nivel operativo. Fue difícil aprovechar el personal de contraparte necesario oportunamente por el cambio frecuente del personal y el insumo no planeado en el tema de la nutrición. Por otro lado de los cinco becarios que participaron en el curso de capacitación en Japón ya cuatro se han retirado del JBB. Las otras inversiones fueron aprovechadas en la realización de las actividades del Proyecto.

2-3-4 Impacto

(1) Perspectivas de la realización del Objetivo Superior

La agricultura urbana se está difundiendo a través del Proyecto 319 y por otras entidades en otras zonas que San Cristóbal. Pero estos esfuerzos no han evaluados y



no hay datos que muestren con cifras en qué grado se haya mejorado la condición nutricional a través de la agricultura urbana.

El proyecto 319 se relaciona con el Plan de Desarrollo del actual gobierno distrital, por lo tanto está asegurada la continuidad durante la actual administración. Se espera que la técnica de la agricultura urbana, la técnica de la difusión, la educación nutricional y la metodología para fortalecer la alianza entre entidades relacionadas se apliquen en otras localidades y que contribuyan a la realización de la meta superior.

(2) Causalidad entre el Objetivo del Proyecto y el Objetivo Superior

Este Proyecto se considera como un apoyo técnico al Proyecto 319. Con la continuidad del Proyecto 319, se puede esperar el logro del Objetivo Superior " Se mejoran las condiciones nutricionales de la población vulnerable, incluyendo la población en situación de desplazamiento a través del fortalecimiento de la agricultura urbana en Bogotá D.C.".

Una de las condiciones externas para lograr el Objetivo Superior es "No habrá cambios de personal directivo y operativo en la estructura del proyecto". Uno de los factores que causaron el cambio frecuente del personal, como se mencionó anteriormente, es la situación laboral inestable por tratarse de contratistas. Eso porque la agricultura urbana no se figura en la Misión del JBB, por eso, según la norma vigente de Bogotá, para un proyecto que realiza una entidad del Distrito solamente se puede contar con contratistas. La situación laboral de contratistas sigue siendo inestable. Ante esta situación el JBB está haciendo gestión para que la agricultura urbana se figure dentro de la Misión oficial del JBB. En cuanto a la otra condición externa "La AU continuará con respaldo político a nivel Distrital", No hay cambio de la prioridad sobre la agricultura urbana en la política de la administración distrital.

(3) Otras repercusiones

Como uno de los impactos destacados del Proyecto es la integración social. Muchos de los actores del proyecto mencionaron como impactos sociales del Proyecto la recuperación de la unión familiar, el fortalecimiento del tejido social y la construcción de la alianza entre organizaciones relacionadas que antes actuaban separadamente.

Además de lo mencionado, por parte de diferentes actores de la agricultura urbana se destacaron los siguientes ejemplos de los cambios positivos:

- se ha mejorado la posición de algunas mujeres en el hogar
- se ha despertado la conciencia sobre el medio ambiente y la seguridad de los alimentos gracias a la práctica de cultivo orgánico
- con la difusión de la agricultura urbana se generó el movimiento para impulsar la agricultura al nivel de la política pública
- inicialmente las hortalizas cultivadas eran para el autoconsumo, pero empezaron a ofrecer y vender las sobrantes en ferias y eventos
- el personal de contraparte capacitado y luego retirado del JBB se mantiene alrededor del tema de la agricultura urbana en diferentes organizaciones como ONGs, y a través de ellos se ha fortalecido la relación entre diferentes entidades
- se mantiene una comunicación permanente entre los exbecarios y el ex personal de contraparte fuera el JBB y ellos están aplicando la técnica del desarrollo social introducido por el Proyecto en las entidades a que pertenecen actualmente.

2-3-5 Sostenibilidad

(1) Base política e institucional

Como se ha mencionado anteriormente, bajo la nueva administración que inició en el año 2008 no hay cambio en el lineamiento del Plan de Desarrollo de Bogotá en cuanto a la agricultura urbana. Por lo tanto, se proyecta que después de la culminación del Proyecto la asistencia a la agricultura urbana se continúa por lo menos durante el período de la actual administración con la asignación presupuestal hasta el 2012.

Como la agricultura urbana es un concepto relativamente nuevo, en el POT establecido no hay referencia sobre este tema. Teniendo en cuenta el desarrollo que ha tenido la agricultura urbana en estos últimos años, se requiere que en la revisión del POT se haga reconocimiento adecuado de la misma. Para este fin se está elaborando una propuesta para el debido desarrollo de la agricultura urbana por parte de JBB con el apoyo de otras instituciones y organizaciones.

(2) Base organizacional y financiera

El JBB está dispuesto a seguir trabajando activamente en el tema de la agricultura urbana. Realiza gestión necesaria con el fin de que la promoción de la agricultura se figure como una política del Distrito de Bogotá y la misión del JBB, mostrando la ventaja

Handwritten signature and initials in the bottom right corner of the page.

de la agricultura urbana que no se limita solamente de la seguridad alimentaria y nutricional. Con este cambio se podrá emplear funcionarios de la planta para la agricultura urbana.

Por otro lado, cada alcaldía menor elabora un plan de acción anual del Plan de Desarrollo de Bogotá y ejecuta el presupuesto. Cada alcaldía menor escoge una entidad ejecutora de la agricultura urbana como el JBB, ONGs, y universidades, y a través de la entidad ejecutora realiza el plan establecido. En caso de la Localidad de San Cristóbal estableció convenio con el JBB. El JBB realizaba actividades con los recursos que aportaba la Alcaldía Menor y la Alcaldía Menor hacía supervisión de las actividades según el informe presentado por el JBB. Sin embargo, por la demora de la ejecución del presupuesto del año 2007, a partir de septiembre de 2008 la Alcaldía Menor establece convenio con otras ONGs o universidad, pero no con el JBB. Por lo tanto, después de la terminación del Proyecto, las actividades de difusión por parte del JBB se reducirán en la Localidad de San Cristóbal.

(3) Base técnica

En cuanto a la técnica del cultivo, este Proyecto apoyó el desarrollo y la difusión de la técnica del cultivo que realizaba el Proyecto 319. Esta técnica fue difundida entre los beneficiarios. Acerca de la metodología de desarrollo social, en el interior del JBB la metodología de DSLP tuvo gran aceptación. Sin embargo por el cambio de directivos del JBB y el retiro del personal de contraparte (o terminación del contrato) no se ha concretado. Es necesario definir alternativas para asegurar la continuidad de este resultado tales como mecanismo de capacitación

En la capacitación participaron técnicos de otras localidades y funcionarios del JBB, sin embargo, como se presenta frecuentemente el cambio del personal no se pudo confirmar en qué grado se ha aplicado la técnica transferida por parte de otros técnicos.

(4) Base social, cultural, y medio ambiente

En el sitio objeto del Proyecto se fortaleció la organización comunitaria, por lo tanto se espera la continuación de las actividades. Además, la mayoría de la población desplazada tiene experiencias de agricultura y el cultivo es algo familiar para ellos. Por lo tanto están contentos de poder cultivar en espacios pequeños incluyendo recipientes de plástico. Por eso se espera que se continúen las actividades.

2-4 Conclusión

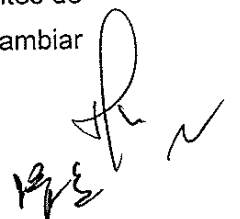
Este Proyecto pudo obtener resultados suficientes en el sitio objeto, gracias a la atención flexible y adecuada del experto de JICA, el trabajo activo del personal de contraparte y la asistencia de entidades relacionadas como INS, a pesar de algunas dificultades tales como insumo personal y ineficiencia del plan concreta antes de empezar el Proyecto. En cuanto a la meta establecida "realizar la agricultura urbana en busca del mejoramiento de la condición nutricional", fue difícil cómo establecer los indicadores y por lo tanto solamente se limitó en medir resultados según una definición de mejoramiento de la condición nutricional. Sin embargo, introducir la educación nutricional en las actividades de capacitación sobre la agricultura urbana le permitió al Proyecto acercar y lograr la meta del Proyecto. También se puede destacar que a través de la transferencia de la técnica de difusión y actividades para fortalecer la relación entre la comunidad y entidades relacionadas el Proyecto contribuyó mucho en la integración local y la formación la comunidad local.

Las entidades relacionadas como el JBB muestra intención de seguir trabajando en la promoción de la agricultura de aquí en adelante, por lo tanto se espera que estas actividades continúen y se desarrollen. Por otro lado, por el cambio frecuente del personal, no se ha concretado ni definido cómo van a aprovechar la técnica y la metodología introducidas por el Proyecto y el módulo de capacitación sobre el mejoramiento de la condición nutricional. Se requiere que se establezca un mecanismo para aprovechar estos resultados del Proyecto no solamente en el JBB sino en otras entidades también.

3. Lecciones aprendidas

(1) Mesa Local de Agricultura Urbana

En la Mesa Local de Agricultura Urbana de San Cristóbal se decidió realizar periódicamente la "Feria de Agricultura Urbana de la Localidad de San Cristóbal" con la participación de los habitantes locales que se dedican a la agricultura urbana y la autoridad local. La construcción de una mejor sociedad local no se logra solamente por los esfuerzos de la administración local, ni tampoco suficiente la fuerza solamente de la comunidad local. Por eso es necesario crear un espacio donde entre los habitantes de la comunidad y entre la comunidad y la administración local se pueda intercambiar



opiniones con el fin de buscar un acuerdo e integrar recursos de los participantes.

(2) Significado de la Agricultura Urbana: Mejoramiento de la condición nutricional y la integración social: estructuración de una nueva sociedad urbana

Ante la situación social de Bogotá en que cada día llegan muchas personas desplazadas a la Ciudad, se requiere una alternativa social para lograr la estabilidad social. A través del Proyecto Piloto de la Localidad San Cristóbal, se probó que la agricultura urbana puede funcionar efectivamente como una de las alternativas. Definiendo la agricultura urbana no solamente como una alternativa para la seguridad alimentaria sino también para la integración social, se podrá abrir un horizonte nuevo para construir una nueva sociedad urbana. En Japón dicen que en una ciudad uno no sabe a qué se dedica su vecino. Se espera que Bogotá no se convierta en una sociedad así de seca.

(3) Importancia de la educación nutricional

En el Plan de Desarrollo de Bogotá, la agricultura urbana se figura como una de los lineamientos de la seguridad alimentaria y nutricional. Teniendo en cuenta la tendencia del problema nutricional de estos últimos años (coexistencia de los problemas de desnutrición y deficiencia de micronutrientes), es importante promocionar el consumo de hortalizas y verduras. A través del Proyecto se pudo aclarar que introducir la educación nutricional en la promoción de la agricultura urbana contribuye más efectivamente en el mejoramiento de la condición nutricional.

(4) Cambio del personal de la entidad ejecutora

Por diferentes razones tales como el cambio de la administración distrital, se presentó el cambio frecuente del director, directivos y otros personales del JBB. Una parte del personal de contraparte que fue capacitada por el Proyecto sobre la metodología del desarrollo social se retiró del JBB y actualmente trabaja en otras entidades. Se debería haber establecido alguna medida para minimizar la influencia del cambio del personal al Proyecto, en la etapa de formulación del Proyecto. También se debería tomar alguna medida en la selección de becarios para asegurar la continuidad del mismo después del regreso al país.

(5) Establecer los indicadores según las características de la agricultura urbana

En este Proyecto la meta fue mejorar la condición nutricional a través de la agricultura urbana. Sin embargo, teniendo en cuenta que las hortalizas y verduras que se puedan producir en la agricultura urbana complementan una parte de la nutrición necesaria, no se explica bien la racionalidad de la meta. Además considerando una de las características de la agricultura urbana de ser desarrollada en espacios pequeños, tampoco fue adecuado el indicador establecido de "aumentar en 10% el área de cultivo". Se debería haber establecido el indicador con base en el análisis de la aproximación del Proyecto para lograr la meta.

4. Recomendación

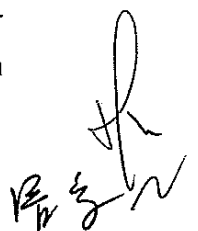
4-1. Recomendaciones al JBB

(1) Aprovechamiento y aplicación de los resultados del Proyecto (este tema debe ser atendido durante el período del Proyecto)

Como una alternativa para solucionar el problema mencionado en el numeral (4) de las lecciones aprendidas, se puede plantear realizar capacitación al personal nuevo del JBB utilizando los manuales y el módulo de capacitación desarrollados en este Proyecto, con el fin de estandarizar el trabajo del personal. Estableciendo un sistema interno de capacitación aprovechando estos instrumentos se permite mantener un nivel determinado de la calidad del trabajo en caso del cambio del personal también. Por eso es necesario establecer un lineamiento de aprovechamiento de los productos y el personal capacitado del Proyecto lo más pronto posible. A la vez se recomienda publicar estos resultados en la Página Web de la Agricultura Urbana y actualizar los contenidos de la Página periódicamente con el fin de enriquecer la función de emitir la información a las personas y entidades relacionadas con la agricultura urbana en el nivel nacional.

(2) Importancia del conocimiento especializado sobre el mejoramiento de la condición nutricional (continuar)

Con el apoyo del INS, se realizaron los estudios de línea base y de impactos y se desarrolló el módulo de la capacitación. Para aumentar el efecto de la agricultura urbana en el mejoramiento de la condición nutricional es importante reflejar estos resultados en las actividades de difusión. También es deseable mantener y desarrollar la relación de colaboración con entidades que tienen conocimiento especializado en la



nutrición como el INS.

(3) Monitoreo a la Localidad de San Cristóbal (se requiere ser atendido en la etapa temprana)

Aunque en la localidad de San Cristóbal se ha venido fortaleciendo la organización comunitaria y la alianza entre diferentes entidades, para aumentar la sostenibilidad de estos resultados es necesario implementar el mecanismo de monitoreo y seguimiento tanto cualitativo como cuantitativo como aprovechamiento del Sistema de Evaluación, Seguimiento y Monitoreo (SESPA) del JBB.

(4) Indicador alternativo del Objetivo Superior

En cuanto al indicador inicialmente establecido "La cantidad de hortalizas que consumen los habitantes del estrato 1, 2 y 3 en Bogotá aumenta 3 % hasta 2014", no existe datos que muestra el consumo de hortalizas. Por lo tanto se plantea el siguiente indicador como alternativo:

- 1) Realizar la capacitación sobre el mejoramiento de la condición nutricional a 7.000 personas en el marco del Proyecto 319, aplicando el módulo de capacitación nutricional elaborado en este Proyecto.
- 2) Indicadores del estudio sobre micronutrientes que va a realizar el INS en 2010.

4-2. Recomendaciones a la Alcaldía Mayor de Bogotá

(1) Política pública de Agricultura Urbana y POT

Es necesario que el Distrito a través de la Secretaría Distrital de Ambiente, la Secretaría Distrital de Planeación y el Jardín Botánico José Celestino Mutis continúen con el proceso de formulación de la Política Pública de Agricultura Urbana y con el proceso de revisión y ajuste al Plan de Ordenamiento Territorial en lo pertinente.

4-3. Recomendaciones a las entidades relacionadas con la Agricultura Urbana

(1) Aplicación de la aproximación del Proyecto para promocionar la agricultura urbana (se requiere ser atendido en la etapa temprana)

La metodología de difusión introducida por este Proyecto tiene efecto destacado en aumentar la función de la agricultura en cuanto a la integración social. Para desarrollar más la agricultura urbana en Bogotá, es necesario institucionalizar la Mesa Local de la



Agricultura Urbana representada por la Mesa Local de San Cristóbal. El rol nuestro para apoyar la agricultura urbana es ser facilitador del proceso en que los habitantes se dedican a la agricultura urbana por su propia iniciativa. El Proyecto capacitó recursos humanos con la experiencia de haber aplicado la metodología de difusión en la práctica, además de elaborar manuales que muestran la teoría básica y guía para la práctica.

Por lo tanto la Misión Conjunta de la Evaluación Final del Proyecto propone lo siguiente a las entidades relacionadas con la agricultura urbana:

- (a) Formar una red de los técnicos de la agricultura urbana incluyendo el personal capacitado en este Proyecto con el fin de adelantar el intercambio de la información y compartir las experiencias.
- (b) Aprovechar y aplicar ampliamente el manual de la técnica de difusión elaborado por el Proyecto con el fin de institucionalizar y aumentar la funcionalidad de la Mesa Local.

(2) Formación de entendimiento común sobre la agricultura urbana (debe ser atendido en la etapa temprana)

Se ha abierto la discusión sobre la agricultura urbana en relación con la revisión del POT de Bogotá. Sin embargo, la discusión con base en la imagen o concepto diferente de la agricultura, no se podrá desarrollar una discusión constructiva. En la revisión del POT se involucran muchas dependencias y entidades distritales, pero no es suficiente la difusión del conocimiento sobre la agricultura urbana en ellos. Como se mencionó en el numeral (2) de Lecciones Aprendidas, es necesario aclarar el concepto de la agricultura urbana para poder desarrollar la discusión con base en un concepto común.

(3) Importancia de la educación nutricional en la promoción de la agricultura urbana (continuar)

En relación con la lección aprendida (3), en general se trabajaba transfiriendo la técnica de cultivo y la técnica de difusión, pero no se ha trabajado suficientemente desde el aspecto de la educación nutricional. Pero por otro lado, en este estudio se ha confirmado la efectividad de la educación nutricional. Por lo tanto para lograr la meta es necesario tomar aproximación desde estos tres aspectos, y para eso se espera que fortalezca la relación entre diferentes entidades para que la fortaleza de una entidad puedan aprovecharla las otras también.

(4) Establecer comunicación directa entre la Mesa Local de la agricultura urbana y la Mesa Local de seguridad alimentaria y nutricional (debe ser atendido en la etapa temprana y seguir apoyo a mediano plazo)

Para que los esfuerzos de la comunidad se reflejen en la política del nivel superior, es necesario establecer un canal de comunicación directa entre la mesa local de agricultura urbana y la mesa local de la seguridad alimentaria nutricional, igualmente con el comité intersectorial de la seguridad alimentaria y nutricional.

4-4. Recomendaciones para JICA

(1) Apoyo a la red de becarios (debe ser atendido en la etapa temprana y seguir apoyo a mediano plazo)

Gracias a la dedicación del experto a la formación de recursos humanos, se han realizado capacitaciones en el país, en Japón y otros países que tienen experiencias en la agricultura urbana. Los que participaron en estas capacitaciones son técnicos y contratistas de contraparte que tienen contrato de un año, y la mayoría de ellos ya se retiraron del JBB. Sin embargo, a través de las entrevistas que se realizaron en la evaluación final, se han aclarado los siguientes aspectos:

- (a) Estos ex técnicos y contratistas aprecian el contenido de las capacitaciones y la metodología de difusión ofrecidas en el Proyecto.
- (b) el personal de contraparte, después de retirarse del JBB, se dedica a la agricultura urbana en diferentes entidades del gobierno y ONGs y realiza intercambio de la información entre ellos formando una red.

Para mantener y hacer perdurar los resultados de la formación de recursos humanos obtenidos por este Proyecto y desarrollar la alianza horizontal entre entidades relacionadas con la agricultura urbana, es importante apoyar a la red conformada por principalmente de ex becarios, lo cual permitirá a JICA contribuir en la integración social de la población desplazada o desmovilizada que es un reto importante del gobierno colombiano.

(2) Elaboración del resumen de los informes de los estudios en japonés (debe ser atendido en la etapa temprana)

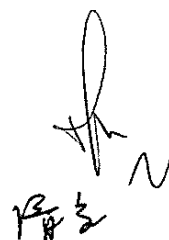
Los productos generados por el Proyecto tales como manuales e informes de diferentes estudios son de excelente calidad y reciben muy buena aceptación por parte

de contrapartes y entidades relacionadas. Por lo tanto se recomienda elaborar por lo menos el resumen de estos productos en inglés y japonés para que en el Departamento de Desarrollo Rural y otras entidades puedan aprovecharlos¹³.

(3) Época de la Realización de la Post Evaluación

Este Proyecto es un proyecto que apoya el Proyecto 319. La continuidad del Proyecto 319 está asegurada durante el período de actual administración (hasta el año 2012), pero no está claro la continuidad del largo plazo. Para realizar la evaluación utilizando los indicadores establecidos para el Proyecto 319, es preferible realizar la post evaluación del Proyecto no en 2014 sino antes del 2012.

¹³ Estos productos pueden ser útiles especialmente para expertos y voluntarios que trabajan en el tema de la agricultura y desarrollo rural.

Handwritten signature and initials in the bottom right corner of the page.

Anexo 1: PDM versión 2

Nombre del Proyecto: **Mejoramiento de la Condición Nutricional de la Población Vulnerable Incluyendo la Población vulnerable incluyendo los desplazados de la Localidad 4ta de Bogotá D.C.**

Área de Cobertura: **4ta. Localidad (San Cristóbal), Bogotá D.C.**

Nº de versión de PDM: **2**

Resumen Narrativo	Indicadores	Medios	Condiciones Externas
<p>Objetivo Superior</p> <p>Se mejoran las condiciones nutricionales de la población vulnerable, incluyendo la población en situación de desplazamiento a través del fortalecimiento de la agricultura urbana en Bogotá D.C.</p>	<p>La cantidad de hortalizas que consumen los habitantes del estrato 1, 2 y 3 en Bogotá aumenta 3 % hasta 2014</p>	<p>Estadística de los hospitales. (SAN)</p>	<p>No hay cambios de personal directivo y operativo en la estructura del proyecto.</p> <p>La Agricultura urbana continúa con respaldo político a nivel Distrital.</p>
<p>Objetivo de proyecto</p> <p>Se mejoran las condiciones nutricionales de la población vulnerable incluyendo la población en situación de desplazamiento de la Localidad 4ta. de Bogotá D.C., a través del fortalecimiento de la agricultura urbana.</p>	<p>La cantidad y variedad de hortalizas que consumen las familias beneficiarias aumenta 10 % hasta final del proyecto.</p>	<p>Estudio periódico. (Diagnostico participativo)</p>	<p>No hay cambios de personal directivo y operativo en la estructura del proyecto.</p> <p>La Agricultura urbana continúa con respaldo político a nivel Distrital después del 2008.</p>
<p>Resultados (objetivos específicos)</p> <p>1. Se fortalece la capacidad técnica instalada en Jardín Botánico en Agricultura Urbana</p> <p>2. Se fortalecen las capacidades del grupo objetivo en Agricultura Urbana</p> <p>3. Fortalecer un marco organizacional comunitario para apoyar la sostenibilidad de la agricultura urbana en la localidad.</p>	<p>1. Se elabora un Manual de tecnología de siembra y un Manual de metodología social.</p> <p>2. El área de producción de las familias del grupo objetivo determinadas por la línea base, se incrementa en un 10%.</p> <p>3. La Mesa Local de Agricultura Urbana se celebra 6 veces por un año con la participación de 10 organizaciones.</p>	<p>1. Documento del Proyecto.</p> <p>2. Estudio Periódico.</p> <p>3. Documento del Proyecto.</p>	<p>No hay cambios de personal directivo y operativo en la estructura del proyecto.</p> <p>La Agricultura urbana continúa con respaldo político a nivel Distrital después del 2008.</p>

<p>Actividades</p> <p>1.1. Apoyar el mejoramiento de tecnologías apropiadas en AU para Bogota.</p> <p>1.1.1. Investigación y adopción de tecnologías.</p> <p>1.1.2. Capacitación al personal del Jardín Botánico en tecnología de Agricultura Urbana.</p> <p>1.1.3. Preparación de Manual en Agricultura Urbana</p> <p>1.2. Capacitación en técnicas de trabajo comunitario.</p> <p>1.2.1. Capacitación al personal del Jardín Botánico en técnicas de trabajo comunitario.</p> <p>1.2.2. Preparación de Manual y Texto.</p> <p>1.3. Diseñar y ejecutar una estrategia pedagógica de comunicación y divulgación de AU.</p> <p>1.3.1. Compilar, sistematizar y procesar los productos de comunicación del proyecto AU.</p> <p>1.3.2. Formular el plan estratégico de información y comunicación.</p> <p>1.3.3. Fortalecer medios de comunicación y herramientas pedagógicas.</p> <p>1.3.4. Diseñar, implementar, alimentar con componente interactivo como sistema de información en Agricultura Urbana.</p> <p>1.4. Establecer la línea base.</p> <p>1.4.1. Diagnóstico de comportamiento alimentario en la localidad.</p> <p>1.4.2. Diagnóstico de Agricultura Urbana en la localidad.</p> <p>1.5. Monitoreo y evaluación.</p> <p>1.5.1. Monitoreo comportamiento alimentario en la localidad.</p> <p>1.5.2. Monitoreo de Agricultura Urbana en la localidad.</p> <p>2.1. Optimizar los cultivos urbanos existentes adecuados para la producción.</p> <p>2.2. Capacitación a los beneficiarios en técnicas de preparación y transformación de alimentos y en nutrición.</p> <p>3.1. Fortalecer habilidades en el grupo objetivo para formular proyectos.</p> <p>3.1.1. Fortalecer las organizaciones.</p> <p>3.1.2. Capacitación y acompañamiento en formulación de proyectos.</p> <p>3.2. Promover y fomentar espacios de encuentro entre las organizaciones comunitarias e instituciones para su reconocimiento a nivel intralocal e interlocal.</p> <p>3.3. Conformar un equipo asesor liderado por JBB, con las entidades relacionadas en el tema de comportamiento alimentario.</p>	<p>Aportes</p> <p>Jardín Botánico:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Profesionales y técnicos contrapartes • Oficinas para los expertos de JICA, espacios de capacitación y otras facilidades • Costo de operación del Proyecto • Equipamientos y materiales • Secretarías, conductores y personal de vigilancia. <p>JICA:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Un experto japonés de largo plazo • Expertos internacionales de corto plazo • Costo de pasantías de contrapartes en los países extranjeros Equipamientos, materiales e infraestructura 	<p>El Comité de Seguridad alimentaria y nutricional (SAN) se vincula institucionalmente durante el proyecto. (no se materializa el objetivo #3 si no se cumple este condición)</p> <p>El plan de ordenamiento territorial no determina el aprovechamiento de espacio para la A.U.</p> <p>Precondiciones (supuestos)</p> <p>Se adopta el término comportamiento alimentario, entendiéndolo como equiparable al término nutrición planteado en el proyecto. Lo anterior en razón a que el aumento de la cantidad y variedad de hortalizas que se producen en las actividades de Agricultura Urbana para la finalidad del autoconsumo de las familias beneficiarias se entiende como mejoramiento de la nutrición en este Proyecto.</p>
--	---	---

Anexo 2: Plan Operativo y Resultados (tres años hasta marzo 2009)

Mejoramiento de la Condición Nutricional de la Población Vulnerable Incluyendo la Población Desplazada y el Fortalecimiento de la Agricultura Urbana

Fecha de elaboración: 31 de marzo 2009

- Referencia en grado de progreso:
- 4. Se cumplió todo
 - 3. Se va a cumplir posiblemente
 - 2. Esta pendiente
 - 1. No se ha realizado

Resultados Esperados y Actividades	Grado de Progreso	Logros y productos	PLAN EJECUCIÓN																								
			2006						2007						2008						2009						
			Año Fiscal Japonesa H 18						H 19						H 20						H 21						
1	Se fortalece la capacidad técnica instalada en Jardín Botánico	4	Se elabora un Manual de tecnología de siembra y un Manual de metodología social.	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5
1.1.	Apoyar el mejoramiento de tecnologías apropiadas en AU para Bogotá.	4	Un Manual de tecnología de siembra elaborado	J	J	A	S	O	N	D	E	F	M	A	M	J	J	A	S	O	N	D	E	F	M	A	M
1.1.1.	Investigación y adopción de tecnologías	4	Protocolos de investigación desarrollados para AU																								
1.1.2.	Apoyo para el desarrollo y evaluación de tecnología de siembra en contenedores y tecnologías limpias	4	Un procedimiento estandarizado de manejo de contenedores y sustratos y un procedimiento estandarizado de manejo de aprovechamiento de residuos sólidos orgánicos																								
1.1.2.	Apoyo en desarrollo de infraestructura física	4	1 aula hasta Marzo de 2007. Un área de investigación en AU instalada y en funcionamiento dentro del área de uso sostenible del JBB																								
1.1.2.	Capacitación al personal del Jardín Botánico en tecnología de Agricultura Urbana.	4	Se capacitan las personas contratadas para el Proyecto de AU, en aspectos técnicos agronómicos.																								
	Pasantías a los países latinoamericanos	4	3 pasantías en 3 años																								
	Cursos en Colombia (Instructor nacional y extranjero)	4	3 cursos al equipo de AU en los 3 años																								

[Handwritten signature]

Resultados Esperados y Actividades		META 36 meses	Grado de progreso	Logros y productos	PLANEJECIÓN																			
					2007						2008						2009							
					Año Fiscal Japonés H 18						H 20						H 21							
6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	
J	J	A	S	O	N	D	E	F	M	A	M	J	J	A	S	O	N	D	E	F	M	A	M	
2.2	Capacitación a los beneficiarios en técnicas de preparación y transformación de alimentos y en nutrición.	Una estrategia pedagógica de formación ajustada y validada																						
	Formación de un módulo para probar en campo	Un módulo de capacitación para probar en campo.	4	Un módulo de capacitación para probar en campo.																				
	Ejecución de la capacitación a los habitantes y retroalimentación para mejorar el módulo.	800 beneficiarios reciben la capacitación y acompañamiento.	2	Han recibido la capacitación 237 personas.																				
3	Fortalecer un marco organizacional comunitario para apoyar la sostenibilidad de la agricultura urbana en la localidad.	La Mesa Local de Agricultura Urbana se celebra 6 veces por año con la participación de al menos 10 organizaciones.																						
3.1	Fortalecer habilidades en el grupo objetivo para formular proyectos.	Al menos 5 organizaciones han puesto en marcha un proyecto comunitario de agricultura urbana.																						
	3.1.1. Fortalecer las organizaciones.	Se identifican 25 organizaciones que son fortalecidas organizacionalmente por el JBB, para recibir capacitación y mejorar habilidades en formulación de proyectos.	4	Se ha identificado 25 organizaciones																				
	3.1.2. Capacitación y acompañamiento en formulación de proyectos.	Al menos 5 proyectos formulados y asesorados en su implementación	4	Están funcionando 8 iniciativas productivas de los grupos comunitarios (enero 2009)																				

Resultados Esperados y Actividades		PLAN EJECUCIÓN																																					
		2006												2007												2008												2009	
		Año Fiscal Japonés H 18												H 19												H 20												H 21	
		6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5		
		J	J	A	S	O	N	D	E	F	M	A	M	J	J	A	S	O	N	D	E	F	M	A	M	J	J	A	S	O	N	D	E	F	M	A	M		
3.2	Promover y fomentar espacios de encuentro entre las organizaciones comunitarias e instituciones para su reconocimiento a nivel intralocal e interlocal.	Se han ejecutado 1) Foro de medicina alternativa y plantas medicinales, 2) Crear y publicar un boletín sobre agricultores urbanos y 3) Feria de Agricultura Urbana.																																					
	Fortalecimiento de la Mesa Local de Agricultura Urbana	Se ha establecido el plan, se están en el proceso de ejecución de los eventos.																																					
	Apoyo al intercambio de experiencia con las organizaciones de AU en San	Se han ejecutado 6 eventos.																																					
3.3	Conformar un equipo asesor liderado por JBB, con las entidades relacionadas en el tema de comportamiento alimentario.																																						
	Se articula con Proyecto con entidades o espacios de orden distrital o nacional en temas de mejoramiento de nutrición.	No se ejecutaron SAN ni AU (Mesa Distrital) por el cambio del gobierno distrital. Se ejecutaron 6 Talleres de Formación de Lineamiento de Política pública de AU y "Encuentro Internacional de Agricultura Urbana", por eso se estima que se cumplió la meta.																																					
	Se elabora una herramienta de medición de comportamiento alimentaria.	Se ha elaborado la herramienta por INS en mayo 2008																																					
	Se elabora una minuta que incorpore especies de AU.	Minuta: 30 menús diarios.																																					
	Se elabora un folleto de transformación y conservación de especies de AU.	Un folleto hasta septiembre 2008																																					

Anexo 3: Tabla de Evaluación (con los resultados de investigación)
Logros de Proyecto

Preguntas para Evaluación		Criterios y métodos de Evaluación (Indicadores)	Resultados de Investigación
Preguntas Grandes	Preguntas Pequeñas		
<p>Realización del objetivo superior (respectiva)</p>	<p>Se mejoran las condiciones nutricionales de la población vulnerable, incluyendo la población en situación de desplazamiento a través del fortalecimiento de la agricultura urbana en Bogotá D.C.</p>	<p>La cantidad de hortalizas que consumen los habitantes del estrato 1, 2 y 3 en Bogotá aumenta 3% hasta 2014.</p> <p>Otros criterios</p>	<p>En la etapa de estudios para la formulación del Proyecto y en la coordinación con el Hospital San Cristóbal después de la llegada del experto de JICA, le habían pedido al Hospital la presentación de los datos correspondientes al volumen de consumo de hortalizas, sin embargo, luego se confirmó que esos datos no existían (únicamente hay datos estadísticos sobre la obesidad y la desnutrición)</p> <ul style="list-style-type: none"> En Colombia se realiza cada cinco años un estudio sobre la condición nutricional incluyendo el consumo de verduras y está programada la realización del estudio en el año 2011, por lo tanto hay posibilidad de utilizar algunos datos que se obtienen a través de este estudio como indicadores alternativos. Como se ha logrado el objetivo del Proyecto, si se desarrolla el Proyecto 319 sin mayor obstáculo, se podrá esperar el logro del objetivo superior. En diferentes localidades de Bogotá, se están ejecutando proyectos para promocional la agricultura urbana tales como Proyecto 319 del Jardín Botánico y proyectos dirigidos por otras entidades. De parte de beneficiarios se manifiesta que el consumo de hortalizas en los hogares se aumentó por haber iniciado actividades de agricultura urbana, sin embargo no existen datos que muestra concretamente el mejoramiento de la situación de consumo nutricional. Se han promovido la siembra y el consumo de 6 especies (quinua, pepino dulce, cubios, ibias, amaranto y ulluco), las cuales son especies tradicionales pero habían dejado de ser cultivadas. A través del Estudio de Impacto se ha confirmado el consumo sobre 4 de ellas, por lo tanto el número de especies que se consume se aumentó de 29 a 33 (13,7%) comparando línea base con el resultado de la segunda medición respectivamente, resaltando rescate de especies ancestrales. En el Estudio de Impacto se midió el consumo a través de la frecuencia del consumo. El consumo del Grupo de Verduras de Alta Frecuencia y del Grupo Verduras de Baja y Media Frecuencia aumentó en 12 a 14% y 8 a 12% respectivamente, Por lo tanto se puede decir que el objetivo del Proyecto se logró en su mayoría. Tanto los beneficiarios como el personal de contraparte del Jardín Botánico entrevistados se expresan que el volumen y la variedad de hortalizas que se consumen están en aumento.
<p>Realización del objetivo del Proyecto</p>	<p>Se mejoran las condiciones nutricionales de la población vulnerable incluyendo la población en situación de desplazamiento de a la Localidad 4ta. de Bogotá D.C., a través del fortalecimiento de a agricultura urbana.</p>	<p>La cantidad y variedad de hortalizas que consumen las familias beneficiarias aumenta 10% hasta final del Proyecto.</p> <p>Otros criterios</p> <ul style="list-style-type: none"> ¿Se aumentan la cantidad y variedad de hortalizas (información cualitativa)? 	<p>El manual sobre la técnica de cultivo sintetiza en una manera didáctica la técnica adecuada de cultivo de la agricultura urbana formulado en estos cuatro años por el Jardín Botánico a través de actividades en Bogotá, por lo tanto el personal de contraparte manifiesta que en el están recogidos todos los aspectos necesarios. Si un técnico tiene unos conocimientos básicos, puede aplicar el contenido del manual en su mayoría.</p> <ul style="list-style-type: none"> En cuanto al Manual sobre la metodología de fortalecimiento social, la metodología y la técnica que muestra el manual se han comprobado su utilidad en las prácticas realizadas en la Localidad de San Cristóbal para
<p>Realización de los resultados</p>	<p>1. Se fortalece la capacidad técnica instalada en Jardín Botánico en Agricultura Urbana</p>	<p>1. Se elabora un Manual de tecnología de siembra y un Manual de metodología social.</p> <p>Otros criterios</p> <ul style="list-style-type: none"> ¿Son los manuales adecuados en cuanto a la necesidad, el nivel de conocimiento, y utilidad de los usuarios? ¿Comprenden los técnicos 	<p>El manual de Tecnología de Siembra se ha entregado por parte de JICA al JBB en el 2º Intercambio Internacional de Agricultores Urbanos. El Manual de Metodología Social se encuentra en proceso de impresión para la entrega en mayo.</p> <ul style="list-style-type: none"> El Manual sobre la técnica de cultivo sintetiza en una manera didáctica la técnica adecuada de cultivo de la agricultura urbana formulado en estos cuatro años por el Jardín Botánico a través de actividades en Bogotá, por lo tanto el personal de contraparte manifiesta que en el están recogidos todos los aspectos necesarios. Si un técnico tiene unos conocimientos básicos, puede aplicar el contenido del manual en su mayoría. En cuanto al Manual sobre la metodología de fortalecimiento social, la metodología y la técnica que muestra el manual se han comprobado su utilidad en las prácticas realizadas en la Localidad de San Cristóbal para

<p>2. Se fortalecen las capacidades del grupo objetivo en Agricultura Urbana.</p>	<p>suficientemente el contenido de los manuales y pueden utilizarlos adecuadamente?</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ ¿Pueden los técnicos nuevos entender las tecnologías necesarias utilizando los manuales y ejecutar sus trabajos? ○ ¿esta asegurada las capacitaciones? 	<p>promocionar la agricultura urbana. Por lo tanto el personal de contraparte que se dedicó a la capacitación y al trabajo comunitario manifiesta que es muy efectivo para construir una buena relación con la comunidad, promocionar la participación activa de la comunidad y organizarla.</p> <ul style="list-style-type: none"> • Todavía no se ha definido concretamente cómo se va a aprovechar estos manuales en el trabajo que realiza el Jardín Botánico.
<p>3. Fortalecer un marco organizacional comunitario para apoyar la sostenibilidad de la agricultura urbana en la localidad.</p>	<p>2. El área de producción de las familias del grupo objetivo determinadas por la línea base, se incrementa en un 10%.</p> <p>Otros criterios</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ ¿Se ha mejorado las capacidades de los beneficiarios en la Agricultura Urbana? ◆ ¿Se ha mejorado las capacidades de los beneficiarios en técnicas de preparación y transformación de alimentos y en nutrición? <p>3. La Mesa Local de Agricultura Urbana se celebra 6 veces por un año con la participación de 10 representantes del grupo comunitario.</p> <p>Otros criterios</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ ¿Se mantiene la ejecución y participación de la Mesa Local de Agricultura Urbana continuadamente? ◆ ¿Se ha mejorado la capacidad de grupos de beneficiarios en formación de proyectos? ◆ ¿Se ha fortalecido la colaboración entre las organizaciones comunitarias e instituciones a nivel intralocal e interlocal? ◆ ¿Se ha establecido un equipo asesor liderado por JBB, con las entidades relacionadas en el tema de comportamiento alimentario? 	<ul style="list-style-type: none"> • Según el Estudio de Impacto, comparando con el resultado del Estudio Línea Base, el área sembrada de los beneficiarios aumentó en 32,1%, por lo tanto se logró este Resultado 2. • El personal de contraparte expresa que la técnica de cultivo de los beneficiarios se ha mejorado. • A través de las visitas realizadas al sitio de Proyecto, se ha identificado el estado de aprovechamiento de espacios pequeños para los cultivos. • Algunos habitantes que tenían experiencia de haberse dedicado a la agricultura expresan que adquirieron la técnica de cultivo de hortalizas en espacios pequeños a través de la capacitación del Jardín Botánico y la aplicaron en su espacio. • El nivel de la capacidad de preparación y transformación de alimentos y del conocimiento sobre el tema nutricional se varía según beneficiario, sin embargo a través del informe del personal de contraparte y de entrevistas con la comunidad se pudo confirmar que se aplica lo aprendido en la vida cotidiana. • En el año 2008 la Mesa fue convocada en 11 ocasiones y tuvo la participación de más de 10 representantes de los grupos comunitarios por reunión.
<p>Profesionales y técnicos</p>	<p>Tiempo, plazo, hora completa o parcial,</p>	<ul style="list-style-type: none"> • Según el Alcalde Menor de San Cristóbal, la localidad va a seguir apoyando a la mesa local de la agricultura urbana y también están programados algunos eventos de la agricultura urbana. Por lo tanto se puede esperar que la alianza entre la comunidad y la institución continúe. • A través de los talleres y capacitación para fortalecer la organización comunitaria realizados por el Proyecto se fortaleció el tejido social y algunos proyectos ya empezaron su proyecto. • La alianza entre diferentes grupos comunitarios e instituciones de la Localidad fue fortalecida con el funcionamiento de la Mesa. • En cuanto a la alianza entre el JBB y otras instituciones sobre el tema de mejoramiento de la condición nutricional, no se ha alcanzado a establecer un sistema de cooperación y coordinación definitivo, ya que solamente se la elaboró un módulo de capacitación para beneficiarios sobre la nutrición y preparación de alimentos con la ayuda de INS y se ha introducido en la Localidad de San Cristóbal. • Aunque se ve el mejoramiento en los aspectos arriba mencionados, se requiere hacer seguimiento, porque es un proceso que requiere tiempo para madurarse. • Todo el personal de contraparte que realizan las actividades del Proyecto son contratistas para el Proyecto

Resultados de

contrapartes	carga, etc.	<p>319. Entre ellos se encuentra un Coordinador del Proyecto, un Coordinador Territorial de la Localidad de San Crístobal, un profesional agrónomo, uno o dos profesional(es) de educación y 3 a 4 técnicos (el detalle se ve en el listado de resultados sobre la asignación del personal de contraparte). A partir del año 2008, se contrataron 1 ó 2 profesionales del tema de nutrición. Todos ellos son contratista para un período determinado y después de que se caducó el contrato anterior en el mes de diciembre del año pasado no se renovó durante 3 primeros meses de este año. A partir de abril de este año se reinició el trámite de renovación de contratos.</p> <ul style="list-style-type: none"> Muchos de los contratistas que recibieron la transferencia técnica se retiraron o no pudieron renovar su contrato. Las principales causas de esta situación son las siguientes: 1) por la demora del trámite de renovación del contrato busca otro trabajo, 2) por el problema de los contratos anteriores no se puede liquidar el contrato caducado y por lo tanto no se puede iniciar el trámite, 3) busca un trabajo más estable por la situación laboral inestable de JBB, y 4) razones personales. Durante estos tres años JBB tuvo cuatro directores y el nuevo Coordinador del Proyecto asumió el cargo en el mes de marzo de este año. En el comienzo del año 2008 hubo cambio de la administración distrital, que causó cambio de directivos de JBB y un período sin presupuesto, lo cual dificultó la contratación continua del personal de contraparte. El Proyecto tuvo que emplear a algunos del personal de contraparte por recursos de JICA. En el edificio para el Proyecto 319 se instaló una oficina para el experto de JICA. Se invirtieron 892.229.396 pesos colombianos hasta el final de 2008. Los equipos y materiales principales para las actividades fueron suministrados por el JBB. Una secretaria del Proyecto 319 se encarga del trabajo del Proyecto de JICA según la necesidad. Se asignaron conductores necesarios para algunas actividades. Hay un experto de largo plazo enviado de JICA (operación y administración del proyecto y fortalecimiento de la comunidad) desde el inicio del Proyecto hasta la fecha. No se envió Fueron enviados tres para el Curso General "Teoría y Práctica del Desarrollo Social Local Participativo" (DSLPL), dos para el Curso Regional "Metodología de difusión de la Agricultura Orgánica como apoyo a los agricultores de pequeña escala (para el América Central y el Caribe)". Además, a parte de la inversión del Proyecto fue enviado uno para el Programa de Capacitación para Líderes Jóvenes/Paises latinoamericanos. De los ex becarios a uno le fue renovado el contrato como Coordinador Territorial, uno continúa en el proyecto como planeador de eventos (diferente que anterior cargo), dos se retiraron, y dos se encuentran en el proceso de renovación del contrato. En caso de que no se renovara uno de dos becarios que están en proceso, resultaría que ninguno de los tres becarios del curso de DSLP se quede en JBB. Se donaron equipos que equivalen a 116.256.518 pesos colombianos, tales como un vehículo, equipos de oficina como fotocopiadora y computador, y cámaras digitales. Se construyó un salón de Capacitación en el
Oficinas para los expertos de JICA, espacios de capacitación y otras facilidades	Tiempo de provisión, si hay espacio suficiente, si las instalaciones son adecuadas, etc.	
Costo de operación del Proyecto	Montos, tiempo de desembolso, rublos, etc.	
Equipamientos y materiales	Tipo y número, estado de utilización	
Secretarías, conductores y personal de vigilancia	Número, período, tiempo, etc.	
Un experto japonés de largo plazo	Cargo, número, plazo/período, etc.	
Expertos internacionales de corto plazo	Cargo, número, plazo/período, etc.	
Costo de pasantías de contrapartes en los países extranjeros	Área, número de participantes, plazo/período, utilización después de las pasantías, etc.	
Equipamientos, materiales e infraestructura	Tiempo, contenido, número, costo, situación de uso y manejo, etc.	

	JBB con el monto de 177.137.733 pesos colombianos.
	<ul style="list-style-type: none"> Todos los equipos donados están registrados en el listado de Control. Excepto GPS portátiles y el vehículo, el proyecto administra los equipos. Los GPS portátiles y el vehículo los administra el JBB. El salón de capacitación fue entregado al JBB en el mes de marzo de 2008 y el Coordinador del Proyecto 319 está encargado de su administración. Fue invertido el monto de 385.626.644 pesos colombianos como recursos para el fortalecimiento de actividades locales.
Costo de operación	Monto, tiempo, rubro, contenido de expensas, etc.

Proceso de Implementación del Proyecto

Preguntas Grandes	Preguntas para Evaluación		Resultados de Investigación
	Preguntas Pequeñas	Criterios y métodos de Evaluación (Indicadores)	
Implementación de actividades	1.1. Apoyar el mejoramiento de tecnologías apropiadas en AU para Bogota.		
	1.1.1. Investigación y adopción de tecnologías.	Estandarizar las tecnologías de AU e instalar las infraestructuras.	<ul style="list-style-type: none"> Con el fin de desarrollar una técnica adecuada, se realizaron las capacitaciones para tener en cuenta la experiencia de otros países. Apoyó la adquisición de accesorios e infraestructura para ensayos de cultivo. Fue construido un salón de capacitación. Esta inversión estaba programada para el primer año del Proyecto, sin embargo como se requirió tiempo para definir el diseño, la inversión fue realizado más tarde de lo programado. Se requirió el tiempo para tener acuerdo sobre las especificaciones básicas y realizar el trámite del permiso de construcción. Fue instalado un campo de experimento.
	1.1.2. Capacitación al personal de Jardín Botánico en tecnología de Agricultura Urbana.	Realizar las capacitaciones en los países latinoamericanos, y en Colombia	<ul style="list-style-type: none"> Para conocer la experiencia de otros países en el tema de agricultura urbana se realizaron actividades de capacitación en Argentina (2006), Perú (2007) y Cuba (2008). En Colombia se realizaron una capacitación sobre la técnica de cultivo en el mes de mayo de 2008, una capacitación sobre la técnica de cultivo vertical en mayo de 2008 y una capacitación sobre poscosecha y nutrición en octubre de 2008.
	1.1.3. Preparación de Manual en Agricultura Urbana.	Perfeccionar un manual en AU, preparando un borrador, verificándolo y reflejando los resultados de verificación.	<ul style="list-style-type: none"> Fue elaborado un manual sobre la técnica de cultivo con base en la técnica desarrollada y escandalizada, y fue entregado por parte de JICA al JBB en el 2º Intercambio Internacional de Agricultores Urbanos. Para la elaboración del manual, el personal de contraparte preparó el borrador, a través de la aplicación en el campo se revisó el contenido y fue ajustado y terminado según el resultado de la revisión.
	1.2. Capacitación en técnicas de trabajo comunitario.		
	1.2.1. Capacitación al personal del Jardín Botánico en técnicas de trabajo comunitario	Mandar los personales a las capacitaciones del Japón (3 personales en 3 años), y realizar las capacitaciones en Colombia (3 capacitaciones en 3 años)	<ul style="list-style-type: none"> Fueron enviados dos en el año 2007 y uno en 2009. En Colombia se realizaron siguientes capacitaciones: planeación y realización de la política de la agricultura urbana involucrando diferentes actores (2006), planeación de actividades de la agricultura urbana en la localidad de San Cristóbal según el DSLP (2007), capacitación para técnicos y promotores sociales (2007), taller para el fortalecimiento de la capacidad comunitaria y el mejoramiento de la investigación (2008) y la capacitación sobre el fortalecimiento comunitario (2008). Una parte de estas capacitaciones fueron realizadas para técnicos de otras localidades además de los de San Cristóbal. Además fueron invitados representantes de otras entidades tales como Acción Social, Alcaldía Menor de San Cristóbal y la Universidad del Rosario.

1.2.2. Preparación de Manual y Texto.	Redactar los textos, preparar borrador, verificar y perfeccionar los manuales.	<ul style="list-style-type: none"> En el mes de abril de 2009 fue elaborado un manual, se encuentra en proceso de impresión para la entrega en mayo El borrador del manual fue elaborado por parte del experto de JICA, y fue revisado y ajustado el contenido del borrador a través de la realización de capacitaciones para técnicos y actores relacionados de la agricultura urbana con el fin de confirmar la utilidad y efectividad del manual.
1.3. Diseñar y ejecutar una estrategia pedagógica de comunicación y divulgación de AU.		
1.3.1. Compilar, sistematizar y procesar los productos de comunicación del proyecto AU.	Preparar la base de dato de los productos de comunicación.	<ul style="list-style-type: none"> Fue elaborada una base de datos sobre materiales didácticos de la agricultura urbana y fue entregado a la biblioteca del JBB.
1.3.2. Formular el plan estratégico de información y comunicación.	Preparar el plan estratégico de información y comunicación	<ul style="list-style-type: none"> No se ha formado un plan estratégico.
1.3.3. Fortalecer medios de comunicación y herramientas pedagógicas.	1 panfleto, folletos sobre actividades de cada zona (19 zonas), 3 carteles, y 2 calendarios	<ul style="list-style-type: none"> Fueron elaborados una cartilla, un borrador de libreto sobre los resultados de cada uno de 19 localidades, tres afiches y dos calendarios.
1.3.4. Diseñar, implementar, alimentar con componente interactivo como sistema de información en Agricultura Urbana.	Paginas web de AU enlazada con las de JBB.	<ul style="list-style-type: none"> Fue diseñada una página de Web de la agricultura urbana (http://www.agrourbano.unlugar.com/).
1.4. Establecer la línea base.		
1.4.1. Diagnostico de comportamiento alimentario en la localidad.	Identificar la línea base de la situación de AU y el consumo de alimentación en la zona para Julio de 2008.	<ul style="list-style-type: none"> Fue realizado un estudio de la línea base en los meses de mayo y junio de 2008 y el informe final de dicho estudio fue presentado en diciembre de 2008. Inicialmente el JBB no contaba profesional sobre la nutrición. Por lo tanto no se pudo realizar estudio por la falta de conocimientos profesionales. Luego con la asistencia técnica de INS realizaron el diseño del estudio la elaboración de instrumentos y se realizó el estudio.
1.4.2. Diagnóstico de Agricultura Urbana en la localidad.		
1.5. Monitoreo y evaluación.		
1.5.1. Monitoreo comportamiento alimentario en la localidad.	Preparar el informe de la investigación de evaluación para Marzo de 2009.	<ul style="list-style-type: none"> Igual que el estudio de línea base, con la ayuda de INS fue realizado un estudio en febrero de 2009. El resultado se fue presentado en el 2º Encuentro Internacional de Agricultores Urbanos programado para el 24 de abril de 2009.
1.5.2. Monitoreo de Agricultura Urbana en la localidad.		
2.1. Optimizar los cultivos urbanos existentes adecuados para la producción.	Realizar las capacitaciones y las actividades de multiplicación a 800 beneficiarios, y utilizar las experiencias para mejorar los módulos.	<ul style="list-style-type: none"> En las actividades de capacitación participaron 927 personas en el año 2007 y 921 en 2008.
2.2. Capacitación a los beneficiarios en técnicas de preparación y transformación de alimentos y en nutrición.	Preparar los módulos de capacitación, realizar las capacitaciones y las actividades de multiplicación a 800 beneficiarios, y utilizar las experiencias para mejorar los módulos.	<ul style="list-style-type: none"> Inicialmente el JBB no contaba profesional sobre la nutrición, pero fueron contratados 2 profesionales desde Mayo de 2008 y con la ayuda de INS elaboraron un módulo de capacitación. El módulo de capacitación fue construido en septiembre de 2008 y fueron realizadas actividades de capacitación según este módulo para 237 personas. Sin embargo no se pudo alcanzar a la meta.

3.1. Fortalecer habilidades en el grupo objetivo para formular proyectos.	Identificar 25 organizaciones comunitarias de los beneficiarios del Proyecto de AU de JBB para realizar las capacitaciones para fortalecer sus organizaciones y capacidades.	<ul style="list-style-type: none"> Fueron identificados 25 organizaciones en la Localidad de San Cristóbal.
3.1.1. Fortalecer las organizaciones.	Implementar por lo menos 5 proyectos como el resultado del fortalecimiento de la capacidad.	<ul style="list-style-type: none"> En cuanto a las 25 organizaciones arriba mencionadas, fue realizada la capacitación sobre el fortalecimiento de la capacidad para elaborar un proyecto. En el año 2007 10 de ellas recibieron esta capacitación y en 2008 15. Para la realización de dicha capacitación fue contratada una ONG para el primer año y para el segundo año fueron contratados 2 profesionales. Como resultado de esta capacitación se confirmó que hay 8 grupos que están realizando algún proyecto a enero de 2008 (principalmente proyectos de producción y venta).
3.1.2. Capacitación y acompañamiento en formulación de proyectos.	Planear y implementar 3 eventos a través de fortalecimiento (preparación y realización de plan anual) de la Mesa Local de AU de la zona San Cristóbal, y promover el intercambio de experiencias de las organizaciones de AU en el zona y las de otras zonas (6 veces al año).	<ul style="list-style-type: none"> La Mesa Local de Agricultura Urbana se realizaba antes de la intervención de JICA, pero no funcionaba bien y en la reunión realizado en el mes de agosto de 2007 solamente tuvo la participación de dos habitantes. El Proyecto realizó un taller en septiembre de 2007 y fueron establecidos los conceptos básicos de la Mesa. Luego en la Mesa se estableció un plan de acción y fueron realizadas las actividades según el plan. Como una parte de actividades de la Mesa, fue establecido el Plan Anual de Eventos y fueron realizados un taller sobre plantas medicinales, publicación de circulares y ferias de agricultura urbana. Fueron realizados 6 eventos de intercambio con los agricultores de la localidad y de otras localidades.
3.2. Promover y fomentar espacios de encuentro entre las organizaciones comunitarias e instituciones para su reconocimiento a nivel intralocal e interlocal.	Relacionar el Proyecto y una organización o reunión para el mejoramiento nutricional (JBB participa en 2 reuniones de las organizaciones públicas en la seguridad alimentaria o AU), preparar una herramienta par medir el comportamiento alimentario, formular ejemplos de menú para un mes que utilizan los productos de AU, y hacer un panfleto sobre la elaboración y conservación de los productos de AU.	<ul style="list-style-type: none"> La Mesa de Seguridad Alimentaria y Nutrición (o reunión entre instituciones relacionadas con la agricultura urbana) no fue convocada por la influencia del cambio de administración distrital. Por lo tanto, realizaron un taller para elaborar una propuesta sobre el lineamiento de la política de la agricultura urbana en seis ocasiones y dicha propuesta fue presentada en el 2º Encuentro Internacional de Agricultores Urbanos realizado en abril de 2009 Los instrumentos de medición sobre la vida alimentaria fueron elaborados por el INS en mayo de 2008 y fueron utilizados en el estudio de línea base. Fue elaborada una cartilla que muestra las características principales, métodos de cultivo y diferentes preparaciones de 45 especies. Un profesional de transformación y conservación de alimentos quien fue contratado en el año pasado se encargaba de la elaboración de una cartilla sobre dichos temas, pero no se realizó (o culminó).
3.3. Conformar un equipo asesor liderado por JBB, con las entidades relacionadas en el tema de comportamiento alimentario.	¿Ha sido eficiente la estructura de operación del Proyecto, incluyendo los actores importantes?	<ul style="list-style-type: none"> El JBB que es la entidad ejecutora del Proyecto de JICA está realizando un proyecto de agricultura urbana (Proyecto 319) aparte, por lo tanto el Proyecto de JICA fue realizado para complementar la parte técnica del Proyecto 310. Por lo tanto el personal de contraparte del Proyecto de JICA son contratistas contratados para el Proyecto 319. El personal de contraparte fue asignado para las actividades del Proyecto en la siguiente manera (en relación con los resultados planteados):
Estructura (sistema) de operación y gestión del Proyecto		

<p>(1) Resultado 1: "Se fortalece la capacidad técnica instalada en Jardín Botánico en Agricultura Urbana": En las actividades realizadas para obtener este resultado se trabajó con:</p> <p>a) en la primera etapa del Proyecto: el coordinador del Proyecto 319, jefe de promoción, jefe de educación social, jefe de tecnología limpia.</p> <p>b) después de la reestructuración del JBB: el coordinador del Proyecto 319, asesor de desarrollo social.</p> <p>c) en el mes de marzo de 2009 fue asignado un nuevo coordinador del proyecto.</p> <p>(2) Resultado 2: "Se fortalecen las capacidades del grupo objetivo en Agricultura Urbana": En las actividades realizadas para obtener este resultado se trabajó con: El equipo de mejoramiento nutricional del Proyecto 319 y el equipo de técnicos de la Localidad de San Cristóbal.</p> <p>(3) Resultado 3: "Fortalecer un marco organizacional comunitario para apoyar la sostenibilidad de la agricultura urbana en la localidad": En las actividades realizadas para obtener este resultado se trabajó con: El asesor de desarrollo social y el equipo de técnicos de la Localidad de San Cristóbal.</p> <ul style="list-style-type: none"> • La administración de la operación del Proyecto fue realizado conjuntamente entre el Coordinador del Proyecto y el experto de JICA hasta el final de 2008. Luego por el cambio del personal no se ha estructurado completamente el mecanismo de operación del Proyecto. • Con el cambio del Director del JBB que presentó en febrero de 2008 y septiembre de 2008 cambió el sistema de operación del Proyecto 319 y con ese cambio el avance de actividades del proyecto fue afectado. También la toma de decisión fue variada según el director. Por la diferencia de la política del director fue afectada la operación del Proyecto. • Fue generado un período vacío de uno a dos meses con el cambio seguido de directivos (subdirector técnico y coordinador del proyecto) y del personal de contraparte, generando afectación al desarrollo del Proyecto. 	<p>Realización de las reuniones de JCC y otros, si hay entendimiento común sobre el contenido del Proyecto entre los actores involucrados, si hay dificultad en los trabajos de equipos entre los actores involucrados, etc.</p>
<p>¿Cómo se ha llevado a cabo la comunicación entre las partes interesadas?</p>	<ul style="list-style-type: none"> • La comunicación entre el experto y el personal de contraparte fue fluida y no se ha presentado ningún problema. • En cuanto a la comunicación entre el experto y los directivos del JBB, hubo ocasiones que el experto no fue atendido por la falta de disponibilidad del tiempo por parte de los directivos. • Tanto la Alcaldía Mayor de Bogotá como la Alcaldía Menor de San Cristóbal aportaron recursos para el Proyecto 319, sin embargo no se construyó una alianza directa. • El período vacío del Proyecto mencionado afectó a la comunicación continua con los beneficiarios. • El reporte para JICA sobre el desarrollo del Proyecto fue realizado satisfactoriamente a través del reporte mensual presentado por el experto y de Comité Conjunto de Coordinación. • El reporte a Acción Social, que es la entidad supervisora del Proyecto, fue realizado en el Comité Conjunto de Coordinación. • Los resultados de las reuniones son los siguientes: <p>1) Comité Conjunto de Coordinación 25 de enero de 2007 (participantes: JBB, Acción Social, JICA e INS como oyente)</p>

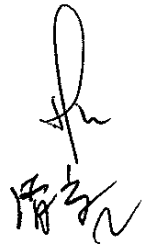
<p>Temas principales tratados: Aprobación del PDM (v1) y el PO (Plan de Operación) 29 de mayo de 2008 (participantes: JBB, Acción Social y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: Aprobación del resultado de la evaluación intermedia y de PDM (v2)</p> <p>2) Comité de operación</p> <p>29 de agosto de 2007 (participantes: nivel técnico de JBB, Acción Social y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: Reporte sobre el avance del Proyecto y la necesidad de modificar PDM (v1) y PO</p> <p>13 de diciembre de 2007 (participantes: nivel técnico de JBB y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: el contenido de modificación para PDM (v1) y PO</p> <p>3) Notas</p> <p>Para el noviembre de 2008 estaba programada la realización del Comité Conjunto de Coordinación o del Comité de Operación, sin embargo no se pudo realizar por las siguientes razones:</p> <ul style="list-style-type: none"> - no se ha contratado el personal de contraparte, - cambio del director, el subdirector técnico y el coordinador del proyecto 	<p>Temas principales tratados: Aprobación del PDM (v1) y el PO (Plan de Operación) 29 de mayo de 2008 (participantes: JBB, Acción Social y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: Aprobación del resultado de la evaluación intermedia y de PDM (v2)</p> <p>2) Comité de operación</p> <p>29 de agosto de 2007 (participantes: nivel técnico de JBB, Acción Social y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: Reporte sobre el avance del Proyecto y la necesidad de modificar PDM (v1) y PO</p> <p>13 de diciembre de 2007 (participantes: nivel técnico de JBB y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: el contenido de modificación para PDM (v1) y PO</p> <p>3) Notas</p> <p>Para el noviembre de 2008 estaba programada la realización del Comité Conjunto de Coordinación o del Comité de Operación, sin embargo no se pudo realizar por las siguientes razones:</p> <ul style="list-style-type: none"> - no se ha contratado el personal de contraparte, - cambio del director, el subdirector técnico y el coordinador del proyecto 	<p>Temas principales tratados: Aprobación del PDM (v1) y el PO (Plan de Operación) 29 de mayo de 2008 (participantes: JBB, Acción Social y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: Aprobación del resultado de la evaluación intermedia y de PDM (v2)</p> <p>2) Comité de operación</p> <p>29 de agosto de 2007 (participantes: nivel técnico de JBB, Acción Social y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: Reporte sobre el avance del Proyecto y la necesidad de modificar PDM (v1) y PO</p> <p>13 de diciembre de 2007 (participantes: nivel técnico de JBB y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: el contenido de modificación para PDM (v1) y PO</p> <p>3) Notas</p> <p>Para el noviembre de 2008 estaba programada la realización del Comité Conjunto de Coordinación o del Comité de Operación, sin embargo no se pudo realizar por las siguientes razones:</p> <ul style="list-style-type: none"> - no se ha contratado el personal de contraparte, - cambio del director, el subdirector técnico y el coordinador del proyecto 	<p>Temas principales tratados: Aprobación del PDM (v1) y el PO (Plan de Operación) 29 de mayo de 2008 (participantes: JBB, Acción Social y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: Aprobación del resultado de la evaluación intermedia y de PDM (v2)</p> <p>2) Comité de operación</p> <p>29 de agosto de 2007 (participantes: nivel técnico de JBB, Acción Social y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: Reporte sobre el avance del Proyecto y la necesidad de modificar PDM (v1) y PO</p> <p>13 de diciembre de 2007 (participantes: nivel técnico de JBB y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: el contenido de modificación para PDM (v1) y PO</p> <p>3) Notas</p> <p>Para el noviembre de 2008 estaba programada la realización del Comité Conjunto de Coordinación o del Comité de Operación, sin embargo no se pudo realizar por las siguientes razones:</p> <ul style="list-style-type: none"> - no se ha contratado el personal de contraparte, - cambio del director, el subdirector técnico y el coordinador del proyecto 	<p>Temas principales tratados: Aprobación del PDM (v1) y el PO (Plan de Operación) 29 de mayo de 2008 (participantes: JBB, Acción Social y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: Aprobación del resultado de la evaluación intermedia y de PDM (v2)</p> <p>2) Comité de operación</p> <p>29 de agosto de 2007 (participantes: nivel técnico de JBB, Acción Social y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: Reporte sobre el avance del Proyecto y la necesidad de modificar PDM (v1) y PO</p> <p>13 de diciembre de 2007 (participantes: nivel técnico de JBB y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: el contenido de modificación para PDM (v1) y PO</p> <p>3) Notas</p> <p>Para el noviembre de 2008 estaba programada la realización del Comité Conjunto de Coordinación o del Comité de Operación, sin embargo no se pudo realizar por las siguientes razones:</p> <ul style="list-style-type: none"> - no se ha contratado el personal de contraparte, - cambio del director, el subdirector técnico y el coordinador del proyecto 	<p>Temas principales tratados: Aprobación del PDM (v1) y el PO (Plan de Operación) 29 de mayo de 2008 (participantes: JBB, Acción Social y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: Aprobación del resultado de la evaluación intermedia y de PDM (v2)</p> <p>2) Comité de operación</p> <p>29 de agosto de 2007 (participantes: nivel técnico de JBB, Acción Social y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: Reporte sobre el avance del Proyecto y la necesidad de modificar PDM (v1) y PO</p> <p>13 de diciembre de 2007 (participantes: nivel técnico de JBB y JICA)</p> <p>Temas principales tratados: el contenido de modificación para PDM (v1) y PO</p> <p>3) Notas</p> <p>Para el noviembre de 2008 estaba programada la realización del Comité Conjunto de Coordinación o del Comité de Operación, sin embargo no se pudo realizar por las siguientes razones:</p> <ul style="list-style-type: none"> - no se ha contratado el personal de contraparte, - cambio del director, el subdirector técnico y el coordinador del proyecto
<p>¿Hasta qué punto JBB y los miembros de CP se sienten apropiados del Proyecto?</p>	<p>El grado de participación de JBB y los miembros de CP, la realización de aportaciones, la preparación de plan de actividades después del fin del Proyecto, y las opiniones de los actores involucrados.</p>	<p>¿Cómo se ha realizado el monitoreo del avance del Proyecto?</p>	<p>Frecuencia de las actividades de monitoreo, métodos, y si se comparten los resultados de monitoreo.</p>	<p>Logros de cada resultados esperados, resultados de monitoreo, opiniones de los actores involucrados.</p>	<p>¿Se encuentra los resultados de la transferencia técnica?</p>
<p>¿Han sido adecuados los miembros de CP para la implementación de actividades del Proyecto?</p>	<p>El grado de participación en las actividades del Proyecto, el nivel de contribución, voluntad, y las opiniones de los actores involucrados.</p>	<p>¿Han participado suficientemente las organizaciones relacionadas y beneficiarios en las actividades del Proyecto?</p>	<p>Resultados de la participación en las actividades, y las opiniones de actividades de los actores involucrados.</p>	<p>El personal de contraparte aplica la técnica transferida del Proyecto muy activamente en su trabajo cotidiano y obtuvo resultados positivos en la Localidad de San Cristóbal.</p> <p>El personal de contraparte retirado también utiliza el conocimiento adquirido en el proyecto en otras organizaciones como ONG que trabajan en la agricultura urbana.</p> <p>A través de las actividades realizadas para obtener el Resultado 3, se apoyó la Mesa Local como espacio de alianza entre diferentes actores, por lo tanto se fortaleció la relación entre los actores participantes de la Mesa y ellos realizaron conjuntamente eventos y capacitaciones.</p> <p>El personal de contraparte manifiesta que a través del Proyecto se mejoró la comunicación con la</p>	<p>El manual elaborado en el proyecto se puede aplicar en la futura transferencia técnica, pero todavía no se ha definido el uso concreto del manual.</p>

<p>factores relacionados Otros asuntos condiciones en el proceso de implementación, y factores que influyen en el logro del proyecto</p>	<p>¿Han revisados PDM y PO dependiendo la necesidad?</p>	<p>Si ha hecho la revisión o no, tiempo, razón y proceso.</p>	<p>comunidad y entre los técnicos mismos y fue incrementado el grado de participación de los beneficiarios.</p> <p>1) Modificación de PDM de v1 a v2 El trabajo de modificación fue iniciado desde el comienzo del Proyecto y el borrador fue preparado en septiembre de 2006 por parte del Proyecto. Con base en este borrador fue realizado ajustes con la Oficina de JICA y el PDM (v1) y PO(1) fueron aprobados en el Comité Conjunto de Coordinación en 15 de enero de 2007.</p> <p>2) Modificación de PDM de v1 a v2 En el Comité de Operación realizado en agosto de 2007 fue identificada la necesidad de nueva modificación de PDM y PO por las siguientes razones: a) en el marco del Proyecto no había mucha necesidad de trabajar en las actividades del Proyecto 319 que realiza el JBB como proyecto propio b) se requería aclarar el que debería asumir el Proyecto y la Alcaldía Menor en las actividades, c) no se había definido una parte de las actividades para el Resultado 2 en PO-v1, d) se requería cambiar el lineamiento de las actividades para el Resultado 3.</p> <ul style="list-style-type: none"> En cuanto a la última razón mencionada (se requería cambiar el lineamiento de las actividades para el Resultado 3), eso fue necesario porque se dificultó lograr "asegurar la sostenibilidad de las actividades de la agricultura urbana y del mejoramiento de la condición nutricional con las actividades organizacional involucrando otras instituciones que la Alcaldía Menor y el JBB". Por lo tanto se planteó asegurar dicha sostenibilidad a través del fortalecimiento de la Mesa Local y de la alianza entre la Mesa y entidades relacionadas. El borrador de v2 ya se había preparado en octubre de 2007, sin embargo se demoró para tener acuerdo del Director del JBB, y fue elaborado el borrador final en el Comité de Operación realizado en diciembre. Luego por el cambio del director presentado en febrero de 2008, se demoró el proceso y finalmente fue aprobado en mayo de 2008 en el Comité Conjunto de Coordinación luego del ajuste con la Oficina de JICA. Después se realizó la modificación de PO. El borrador final fue preparado en julio y luego del ajuste con la Oficina de JICA fue definido en septiembre de 2008. Sin embargo, por el cambio del director y el problema de contrato del personal de contraparte, no se pudo convocar el Comité Conjunto de Coordinación, por lo tanto no se ha aprobado el PO nuevo.
<p>¿Se han dado suficientes seguimientos a las recomendaciones de la Evaluación Intermedia?</p>	<p>1) La definición del grupo objeto</p>	<p>¿Se han definido que la "población recién desplazada" en el Proyecto es la población desplazada reubicada?</p>	<ul style="list-style-type: none"> Se realizó según la propuesta.
<p>2) Definición del mejoramiento de la condición nutricional</p>	<p>¿Se han definido que el "mejoramiento de la condición nutricional" es en términos de aumento de la cantidad y variedad de hortalizas consumidas por la población objeto del proyecto, a través de una estrategia integral de agricultura urbana que implica capacitación, producción y</p>	<p>¿Se han definido que el "mejoramiento de la condición nutricional" es en términos de aumento de la cantidad y variedad de hortalizas consumidas por la población objeto del proyecto, a través de una estrategia integral de agricultura urbana que implica capacitación, producción y</p>	<ul style="list-style-type: none"> Se realizó según la propuesta.



3) Estabilidad del personal contraparte	educación alimentaria y nutricional? ¿Se ha asignado el personal de nómina o con contrato de largo plazo, por lo menos los puestos de CP que asumen más responsabilidad en el Proyecto?	<ul style="list-style-type: none"> Como se mencionó anteriormente se presentó el cambio frecuente de directivos y del personal de contraparte, por lo tanto no se ha logrado.
4) Difusión del modelo participativo de la agricultura urbana	¿Ha sido aclarado la posibilidad de aplicar la experiencia del Proyecto y de realizar pilotos de esta metodología a nivel nacional?	<ul style="list-style-type: none"> Se ha definido aplicar el modelo participativo desarrollado en la Localidad de San Cristóbal en el Proyecto 319. En cuanto a la implementación del modelo incluyendo el uso del manual social elaborado en el Proyecto está en etapa de planeación. Por otro lado, no se ha adelantado la discusión sobre la aplicación del modelo en el nivel nacional.
5) Del mejoramiento parcial de la condición nutricional al mejoramiento completo de la condición nutricional	¿Ha sido buscado la manera de desarrollar la AU a una escala más grande?	<ul style="list-style-type: none"> En la evaluación intermedia se planteó desarrollar la agricultura a una escala más grande identificando y aprovechando terrenos desocupados. Ante esta propuesta, el JBB está pensando expandir la escala de agricultura urbana con el fin de hacerla como una alternativa productiva. También está elaborando una propuesta para que al realizar la revisión del Plan de Ordenamiento Territorial (POT) la agricultura urbana se incluya como un uso de terreno.
6) Utilizar la línea base como diagnóstico de la situación nutricional actual relacionada con el consumo de hortalizas	¿Ha sido realizado actividades más concretas para el mejoramiento de la condición nutricional utilizando el resultado la línea base?	<ul style="list-style-type: none"> En el Estudio de Línea Base no se recolectaron datos necesarios para aclarar especies de hortalizas, modos de preparación recomendables que se esperaban obtener según la recomendación de la evaluación intermedia. El informe final del Estudio de Línea Base se presentó en diciembre de 2008 por lo tanto no se pudo aprovechar el resultado del Estudio.
7) Organizar información sobre mejoramiento de condiciones nutricionales por parte del JBB	¿Ha sido organizado las informaciones útiles de JBB?	<ul style="list-style-type: none"> Se terminó la recopilación de los materiales sobre la agricultura urbana. No se ha terminado la organización de la información sobre la nutrición
8) Evidenciar los espacios y las entidades relacionadas con el tema nutricional que contribuyen al cumplimiento del Objetivo del Proyecto	¿Ha sido establecido una relación cooperativa con las entidades relacionadas con el tema nutricional?	<ul style="list-style-type: none"> Con el INS se estableció una relación de cooperación en mayo de 2007, sin embargo esta relación está limitada al período del Proyecto. Está en proceso. Especialmente en cuanto a las instituciones de la Alcaldía Mayor, después del cambio de la administración en 2008 no se ha estructurado el sistema de operación.
9) Establecimiento de una dinámica pertinente para la toma de decisiones al interior del JBB	¿Ha sido implementado una dinámica estandarizada en el proceso de toma de decisiones al interior del JBB?	<ul style="list-style-type: none"> No se ha establecido suficientemente por la inestabilidad de la estructura operativa del JBB.
10) Garantizar la transferencia y documentación de la información y capacitación recibida en el marco de desarrollo del proyecto	¿Se ha documentado la experiencia y la metodología por medio de procedimientos operativos estándar en el marco del sistema de gestión de calidad? ¿Se ha garantizado a través de instrumentos legales la transferencia de tecnología y su documentación?	<ul style="list-style-type: none"> No se ha logrado por el cambio y el retiro del personal capacitado.
11) Se debe tener en cuenta los aspectos de redistribución del gasto en la evaluación de impacto	¿Se ha analizado los impactos socio-económicos del Proyecto que la AU brinda a las familias que la practican?	<ul style="list-style-type: none"> Se realizó el Estudio de Impacto incluyendo análisis del gasto y forma de acceso de alimentos. A través del Estudio de Impacto se ha confirmado que la forma de adquisición de verduras más representativa para el grupo de agricultores urbanos es el autoconsumo a diferencia de la Línea Base donde era la compra, por lo consiguiente el gasto en verduras se redujo.

<p>12) Estructurar el componente de educación alimentaria y nutricional para garantizar su integralidad e impacto</p>	<p>¿Se ha establecido el componente de educación alimentaria y nutricional, y los técnicos y promotores de JBB se desarrollan este componente del proyecto de AU a la comunidad receptora?</p>	<p>• Se estableció un módulo de capacitación sobre la nutrición y el mejoramiento del hábito alimenticio, y se aplicó en capacitaciones para beneficiarios por parte de los técnicos.</p>
<p>13) Modificación de la PDM</p>	<p>¿Han realizado el Proyecto en base a las modificaciones en los resultados 2 y 3, y sus indicadores?</p>	<p>• Se realizó según la propuesta.</p>



5 Criterio de Evaluación

n	Preguntas para Evaluación		Criterios y métodos de Evaluación (Indicadores)	Resultados de Investigación
	Preguntas Grandes	Preguntas Pequeñas		
	Necesidad	Pertinencia con las necesidades de la sociedad	¿Es el Proyecto consistente con las necesidades de la sociedad colombiana y beneficiarios para el desarrollo?	<ul style="list-style-type: none"> La condición nutricional de la población desplazada que es el grupo objeto de este Proyecto es mala en general. La Localidad de San Cristóbal, que es el sitio objeto del Proyecto es la quinta localidad en cuanto al número de la población desplazada dentro de las 20 localidades de Bogotá. Según los datos obtenidos en el proceso de formulación del Proyecto (2005) el 24% de los niños de esta localidad presenta la situación de desnutrición crónica y este porcentaje es muy alto comparando con el promedio de Bogotá que es el 13.41%. Ante esta situación la Alcaldía de Bogotá realiza varias actividades para la seguridad alimentaria y nutrición tales como comedores comunitarios. Por lo tanto la realización del proyecto en busca del mejoramiento de la condición nutricional coincide con la necesidad del grupo objeto y de la sociedad. La meta y la meta superior del Proyecto coincide con la política del gobierno colombiano para la atención a la población desplazada y según la política se realiza la asistencia a la agricultura urbana por parte de RESA de Acción Social, por lo tanto este Proyecto está acorde con la política del gobierno colombiano. En cuanto al Distrito Capital de Bogotá, el Proyecto está acorde con la política de la seguridad alimentaria y nutricional. Dentro de esa política la agricultura urbana se ubica en el lineamiento para el mejoramiento del acceso a alimentos. Después del cambio de la administración distrital, se continúa el Proyecto 319 como una alternativa para realizar estas políticas, por lo tanto el Proyecto que apoya técnicamente a la realización del Proyecto 319 está acorde con la política del distrito. En el Plan de Operación según el país de JICA para el año 2007, se formó el Programa de Asistencia para la Población Vulnerable Incluyendo la Población Desplazada como una alternativa para alcanzar la meta "Construcción de la Paz", y para eso se definió realizar asistencia para el mejoramiento de la condición nutricional de la población vulnerable urbana a través de la promoción de la técnica de agricultura urbana, asistencias para el mejoramiento del servicio de rehabilitación para los discapacitados incluyendo las víctimas de minas antipersonales, y asistencia para la auto-sostenibilidad económica a través de formación laboral, con el fin de ofrecer cooperación para la población vulnerable incluyendo familias que mantiene económicamente la población desplazada y de desmovilizados. En este Proyecto se aplicó una parte del concepto de DSPLP en actividades de promoción de la agricultura urbana. En el Plan arriba mencionado, como lineamiento del desarrollo de proyectos para la construcción de la paz buscar a promocionar se estableció que se busca promocional la convivencia y reconciliación entre actores y víctimas y dentro de la comunidad receptora, ofreciendo asistencia a la reintegración socio-económica de la población desplazada y las víctimas de minas antipersonales que son víctimas del conflicto armado. Por lo tanto el lineamiento del Proyecto que promociona a la integración social coincide con esta política de JICA. A través de la evaluación intermedia se definió que la población desplazada que es objeto del Proyecto es la población reubicada que se puede dedicar a la agricultura urbana. También se estableció que el mejoramiento de la condición nutricional se logra a través del aumento del volumen y variedad de las hortalizas que consumen los beneficiarios. Por lo tanto se puede decir que fue adecuada la aproximación
	Prioridad	Pertinencia con las políticas del gobierno	¿Es el Proyecto consistente con el Plan de desarrollo y políticas del país en la asistencia a la población desplazada?	
		Pertinencia de la política de la asistencia de desarrollo oficial (AOD) del Japón	¿Es el Proyecto consistente con la política de la AOD del Japón y el plan de ejecución de JICA hacia la República de Colombia?	
	Pertinencia del Proyecto como el método para	¿El diseño y método del Proyecto son adecuados como estrategias para contribuir al tema de desarrollo del sector?	Análisis del nivel de logros del Proyecto, opiniones de los actores involucrados	

12/05/07



lograr el objetivo	<p>del Proyecto que buscaba contribuir no solamente en la difusión de la técnica del cultivo sino en la promoción del cambio de hábito alimentario desde la dieta tradicional conformada por algunos nutrientes hacia la dieta con el consumo de hortalizas a través de la educación nutricional con base en esta definición.</p> <ul style="list-style-type: none"> Al intervenir en la población vulnerable incluyendo la población desplazada a través de las actividades de la agricultura urbana permite contribuir en el mejoramiento del nivel de la vida de los beneficiarios desde diferentes aspectos, tales como la seguridad alimentaria y nutricional, integración social, formación y fortalecimiento de la comunidad, educación ambiental y nutricional y generación del ingreso. Estas son las necesidades que tiene el grupo objeto del Proyecto, por lo tanto el lineamiento del Proyecto es adecuado. 	<p>Analisis del nivel de logros del Proyecto, opiniones de los actores involucrados</p>	<p>de la Localidad de San Cristóbal. Sin embargo luego fue aclarado que los barrios donde se concentran la población desplazada y desmovilizada no eran éstas y tampoco hubo razones por las cuales estas tres UPZs se seleccionaban como sitio objeto del Proyecto. Además las actividades del JBB y de la Alcaldía Menor abarcaban a la localidad entera, por lo tanto el sitio objeto del Proyecto fue establecido para la localidad entera.</p> <ul style="list-style-type: none"> Este proyecto, a pesar de un periodo relativamente corto de tres años, busca lograr varios resultados tales como transferir la técnica de la agricultura urbana, técnica de la difusión para la comunidad, y promoción de la integración social de la comunidad participante y aprovechando en lo posible la inversión limitada obtuvo los resultados arriba mencionados. Ante este logro, se puede decir que la orientación del Proyecto que busca difundir y replicar los resultados del Proyecto obtenidos en la Localidad de San Cristóbal a otras localidades de Bogotá fue adecuada.
Otros	<p>¿La selección del grupo objeto fue adecuado?</p>	<p>¿Ha sido aclarado la colaboración y demarcación del Proyecto con otros donantes y colaboradores?</p>	<ul style="list-style-type: none"> Este proyecto tiene relación con las siguientes entidades: <ul style="list-style-type: none"> (1) Entidades públicas <ul style="list-style-type: none"> a) Resa Urbana de la Acción Social Realiza actividades de la agricultura urbana en Colombia. Con el Proyecto realiza intercambio de información. b) Alcaldía Menor de San Cristóbal El JBB ha venido realizando las actividades de la agricultura urbana en la localidad según el convenio establecido con la Alcaldía Menor. Concretamente establecieron conjuntamente un plan anual de acción (metas, número de beneficiarios, actividades, etc.), y la Alcaldía Menor aporta al JBB recursos para la realización de actividades. El JBB realiza actividades con estos recursos y la Alcaldía Menor hacia supervisión de las actividades según el informe presentado por el JBB. A partir de septiembre de 2008 la Alcaldía Menor establece convenio con otras ONGs o universidades, pero no con el JBB. c) Instituto Nacional de Salud (INS) Se estableció la alianza a partir de mayo de 2007 para trabajar conjuntamente sobre el tema de la nutrición. Y a partir de septiembre de 2007 el Proyecto obtiene las siguientes asistencias continuas por el INS: <ul style="list-style-type: none"> - Dictar clases "Indicadores de Nutrición para el Desarrollo" en la capacitación del Plan de Acción de la agricultura urbana de San Cristóbal con base en el desarrollo local social. - Asesoría al desarrollo de instrumentos para realizar orientación a la comunidad sobre el mejoramiento de la condición nutricional - Desarrollo de instrumentos para el "Estudio comparativo del estado actual de los Agricultores Urbanos frente a los NO Agricultores Urbanos en la Localidad de San Cristóbal".

- Realización del Estudio de Línea Base
- Realización de un estudio para medir impactos del Proyecto en la vida alimenticia y el cultivo de hortalizas.

(2) ONG

a) IPES

Tiene su sede en Lima, Perú y con los recursos aportados por una ONG holandesa (RUAF) realiza actividades de promoción de la agricultura urbana en Latinoamérica. En el año 2008 se estableció una oficina en Colombia (el personal encargado fue directora del JBB cuando inició el Proyecto). En la Ciudad de Bogotá, realizó un proyecto (Ciudades Cultivando para el Futuro, CCF) junto con el JBB y la Universidad del Rosario. El sitio objeto de dicho proyecto era la Localidad de Bosa. En el año 2008 el proyecto terminó y está en proceso de planeación la segunda fase (SFTT). Con el Proyecto de JICA tiene las siguientes relaciones:

- Realizó intercambio de información y la capacitación mutua sobre la técnica del desarrollo participativo. Concretamente en la capacitación del personal del Proyecto aprovechó el Seminario y Taller y Estudio Social de CCF realizado en noviembre de 2006 en Bogotá. Fue la entidad receptora cuando se realizó la capacitación un país vecino en el año 2007. En estas dos ocasiones el Proyecto de JICA hizo transferencia técnica del desarrollo local social.
- Realizó junto con el Proyecto el 2º Encuentro Internacional de Agricultores Urbanos en abril de 2009. Para este evento, IPES se encargó de la selección de invitados internacionales y el gasto de pasajes aéreos.
- Actualmente junto con el Proyecto se dedica a la elaboración de la propuesta para que la agricultura urbana se establezca como política pública.
- IPES realiza gestión al sistema política y social tales como la gestión para la política y para la modificación de leyes, que el Proyecto de JICA no realiza. Por otro lado la fortaleza del Proyecto de JICA es haber acumulado las experiencias en el fortalecimiento de la capacidad del JBB en la atención a la población porque es el JBB el principal promotor de la agricultura urbana. Por lo tanto entre IPES y el Proyecto de JICA se encuentra una relación complementaria.

b) Manos Amigas

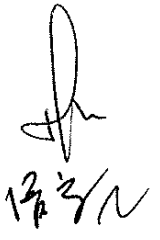
Es una ONG que tiene su sede en Bogotá y se dedica a la asistencia a las mujeres. Dentro de las actividades de asistencia que realiza se encuentra la agricultura urbana. Con una entidad territorial está construyendo un campo de producción común para las mujeres. Recibe asistencia del gobierno de España y la Unión Europea. Un personal de contraparte que fue capacitado en Japón sobre DSLP actualmente trabaja en esta organización a partir del 2008 y realiza intercambio de información con el Proyecto.

(3) Organizaciones Internacionales

FAO realiza la promoción de la agricultura urbana con la técnica del cultivo en agua (con abonos químicos). El principio del Proyecto 319 y Proyecto de JICA es aplicar solamente abonos orgánicos en los cultivos, por lo tanto no se ha establecido una alianza por esa diferencia. En el año 2007, una vez fue estudiado la posibilidad de aplicar un instrumento desarrollado por FAO obteniendo un permiso verbal, sin embargo no era adecuado para el objeto del Proyecto que es introducir conocimiento nutricional para complementar las actividades de la agricultura urbana. Por lo tanto actualmente este instrumento no se está usando en el Proyecto.

<p>¿Ha sido adecuada la tecnología introducida en el Proyecto (contenido de la transferencia técnica) para lograr el objetivo del Proyecto?</p>	<p>¿En qué grado las tecnologías apropiadas en AU para Bogota están utilizadas? ¿Cómo las tecnologías han contribuidas para lograr el objetivo del Proyecto?</p>	<p>(4) Universidad del Rosario Como una parte de la responsabilidad social de la universidad realiza la Acción Integral a Población Desarraigadas con los recursos de la Unión Europea. Este es un proyecto del desarrollo integral local que busca ayudar a la población desplazada. El sitio de trabajo es la Localidad de Usme. En cuanto a las actividades de la agricultura urbana, las realiza como una actividad productiva. Con este Proyecto realiza intercambio de la información sobre el fortalecimiento de la comunidad y en la capacitación realizada por el experto hubo participación de la Universidad.</p> <ul style="list-style-type: none"> La técnica desarrollada es acorde con las condiciones geográficas (desde 2550 hasta 3100 metros sobre el nivel del mar) sociales y urbanas de Bogotá, por lo tanto es adecuada para su difusión. La metodología del cultivo aprovechando en espacios pequeños de la ciudad fue bastante acogida como una nueva alternativa por parte de habitantes que tienen experiencia de cultivo y conocimiento sobre la agricultura. La metodología introducida para fortalecer la capacidad relacionada con el trabajo comunitario se ha desarrollado con base en el concepto de DSLP. El personal de contraparte de la Localidad de San Cristóbal realiza actividades de difusión utilizando la técnica obtenida en la capacitación. El personal de contraparte afirma que se ha mejorado la relación con la comunidad por cambiar la actitud en el trabajo comunitario, se ha aumentado el grado de participación en los habitantes, se ha generado la relación de colaboración en la comunidad, se mejoró la relación en el interior de la comunidad y se fortaleció el tejido social. En los talleres realizados en la Mesa Local, se realizó capacitación sobre el fortalecimiento organizacional y se estableció el concepto básico de la Mesa utilizando instrumentos participativos. Luego, a través de planeación y realización de eventos y talleres participativos se trabajó para fortalecer la capacidad de los beneficiarios. Como resultado de estas actividades, la comunidad se puede encargar de la logística y la moderación de las reuniones. Este proceso está recopilado en el Manual Social. El nuevo alcalde menor de San Cristóbal decidió no renovar el convenio con el JBB por lo tanto a partir del año 2009 no hay aporte financiero de la localidad. 	<p>¿En qué grado las técnicas de trabajo comunitario (incluyendo DSLP) están utilizadas? ¿Cómo las técnicas han contribuidas para lograr el objetivo del Proyecto?</p>	<p>Cambios organizacionales de los organizaciones involucradas, relaciones con los proyectos existentes y nuevos de otros donantes, situación socio-económica, etc.</p>
<p>¿Hay algunos cambios de situación alrededor del Proyecto después de la evaluación intermedia (política, economía, social, etc.)?</p>				

Logros del Objetivo del Proyecto	¿Hasta qué grado se ha logrado el Objetivo del Proyecto?	Análisis de los logros del Proyecto	<ul style="list-style-type: none"> El objetivo del Proyecto se logró, ya que se ha confirmado el aumento del consumo y de variedad que se cultiva. La escala de la agricultura urbana de Bogotá es del nivel de la huerta casera, por lo tanto no se puede completar nutriente solamente a través de la agricultura urbana. En este Proyecto, introduciendo la educación nutricional como una actividad de capacitación de la agricultura urbana se intentó alcanzar a la meta del mejoramiento de la condición nutricional. Sin embargo por la influencia de algunos factores externos mencionado en la "Pertinencia" (el cambio del personal) se demoró la elaboración del módulo de capacitación y la realización de las capacitaciones a la comunidad, y se pudo lograr la meta en cuanto al número de las personas capacitadas. Sin embargo, teniendo en cuenta que el módulo de capacitación se terminó de ser elaborado en el mes de septiembre de 2008, el hecho de que se han capacitado 237 personas en aproximadamente 3 meses es apreciable.
Contribución de los Resultados generados para alcanzar el Objetivo Específico	<p>¿Se ha logrado el Objetivo Específico como los efectos de los Resultados generados?</p> <p>¿Han sido adecuadas las condiciones externas para lograr el Objetivo del Proyecto? ¿Qué tipo de influencia se observa?</p> <p>Factores que contribuyen e impiden la realización del Objetivo del Proyecto</p>	<p>Análisis de los logros del Proyecto</p> <p>¿Hay cambios de personal directivo y operativo en la estructura del Proyecto?</p> <p>¿La AU continúa con respaldo político a nivel Distrital después del 2008?</p> <p>¿Hay algunos factores externos nuevos?</p> <p>Análisis de los logros del Proyecto, opiniones de los actores involucrados.</p>	<ul style="list-style-type: none"> Para lograr la meta sobre la condición nutricional establecida en la evaluación intermedia, en el Proyecto para obtener los tres resultados planteados trabajaron en el mejoramiento de la capacidad de los técnicos, en el incremento de la capacidad de los beneficiarios y el fortalecimiento de la alianza entre diferentes entidades que apoyan a las actividades de los beneficiarios. Para lograr la meta del Proyecto estos resultados fueron suficientes. Como se presenta el cambio del personal frecuentemente, una de las tareas es asegurar la transferencia de la técnica introducida por el Proyecto al personal nuevo. No hay cambio de la prioridad sobre la agricultura urbana en la política de la administración distrital. No se encuentra especialmente. <p>Los factores que contribuyeron al desarrollo del Proyecto son los siguientes:</p> <ul style="list-style-type: none"> De acuerdo con el marzo y el diseño del Proyecto, el experto logró establecer una relación de colaboración con una entidad especializada y contribuyó en el fortalecimiento de la técnica de la difusión y del mejoramiento de la condición nutricional. El personal de contraparte apropió activamente la técnica introducida por el Proyecto y la aplica en su trabajo. Se pudo contar con la ayuda del INS sobre los conocimientos nutricionales que hacían falta en el Proyecto, y gracias a esa relación se pudo realizar el estudio de impacto y la construcción de módulo de capacitación sobre la educación nutricional- <p>Los factores que impidieron o dificultaron el desarrollo del Proyecto son los siguientes:</p> <ul style="list-style-type: none"> Como se ha mencionado en la "Estructura del Proyecto", el cambio frecuente del personal que era condición externo del Proyecto generó confusión en el Proyecto, afectando a las actividades en general. Como se ha mencionado en la "Pertinencia", en la etapa de formulación del Proyecto no se habían concretado el contenido de las actividades relacionadas con el mejoramiento de la condición nutricional, en la primera mitad del Proyecto no se realizó ninguna actividad concreta para este fin. <ul style="list-style-type: none"> Los indicadores de cada resultado fueron cumplidos y se confirmó igualmente que se obtuvieron los resultados planteados. Sin embargo, estos resultados apenas están empezando a aparecer, por lo tanto es necesario realizar un seguimiento para mantener y establecer estos resultados.
Cia	¿La generación del resultado es adecuado?	Análisis de los logros del Proyecto	



<p>Vínculo entre las actividades y los resultados (¿Los resultados convienen a las aportaciones?)</p>	<p>¿Ha sido suficiente las actividades para generar los resultados? ¿Han sido adecuadas las condiciones externas para lograr los Resultados esperados? ¿Qué tipo de influencia se observa?</p>	<p>Análisis de los logros del Proyecto y el proceso de implementación ¿El Comité de Seguridad Alimentaria y Nutricional (SAN) se vincula institucionalmente durante el Proyecto (no se materializa el objetivo #3 si no se cumple esta condición)? ¿El plan de ordenamiento territorial no determina el aprovechamiento de espacio para la AU?</p>	<ul style="list-style-type: none"> Las actividades establecidas para cada uno de los resultados fueron suficientes. La Mesa de Seguridad Alimentaria y Nutricional no se ha afectado ni se ha presentado ningún cambio estructural. Actualmente no es una barrera para desarrollar la agricultura urbana por ser actividades del nivel de huertas caseras. Sin embargo, para poder desarrollar más la agricultura urbana utilizando espacios vacíos de la ciudad es necesario realizar algunos ajustes para no generar choque con el POT. Por lo tanto se está elaborando una propuesta sobre la modificación del POT. No se encuentra especialmente. Fue difícil aprovechar el personal de contraparte necesario oportunamente por el cambio del personal y la demora del trámite de renovación del contrato. En la primera mitad del Proyecto no se realizó inversión acerca de la nutrición. Se demoró hasta que estableciera la alianza con INS y que se contratara el personal profesional del tema por parte del JBB, lo cual afectó la realización de las actividades relacionadas con el Resultado 2. Otras inversiones fueron utilizadas adecuadamente en la realización de actividades del Proyecto.
<p>Tiempo, calidad y cantidad de las inversiones</p>	<p>¿Ha sido adecuado el tiempo, cantidad, y calidad de las inversiones para realizar las actividades?</p>	<p>¿Hay algunos factores externos nuevos? Resultado de la revisión de "Inversiones" y "Proceso de Implementación"</p>	<ul style="list-style-type: none"> La agricultura urbana se está difundiendo a través del Proyecto 319 y por otras entidades en otras zonas que San Cristóbal. Pero no hay datos que muestren en qué grado se haya mejorado la condición nutricional a través de la agricultura urbana. El proyecto 319 se relaciona con el Plan de Desarrollo del actual gobierno distrital, por lo tanto está asegurada la continuidad durante la actual administración. Se espera que la técnica de la agricultura urbana, la técnica de la difusión, la educación nutricional y la metodología para fortalecer la alianza entre entidades relacionadas se apliquen en otras localidades y que contribuyan a la realización de la meta superior. Se espera que la técnica de la agricultura urbana, la técnica de la difusión, la educación nutricional y la metodología para fortalecer la alianza entre entidades relacionadas se apliquen en otras localidades y que contribuyan a la realización de la meta superior. El proyecto 319 se relaciona con el Plan de Desarrollo del actual gobierno distrital, por lo tanto está asegurada la continuidad durante la actual administración. Pero por otro lado, no se ha definido suficientemente cómo se aplica y aprovecha el resultado del Proyecto de JICA. Como la continuidad del Proyecto 319 está asegurada en este momento, la meta superior está relacionada con la meta del Proyecto. Hasta ahora se han presentado los siguientes cambios del personal. Es algo que es difícil de evitar: <ul style="list-style-type: none"> i) cambio del director del JBB (en noviembre de 2006, febrero y septiembre de 2008) ii) cambio del subdirector técnico (en noviembre de 2006 y septiembre de 2008) iii) cambio del coordinador del proyecto 319 (en mayo de 2008, enero y marzo de 2009) iv) cambio del jefe técnico del proyecto 319 (en diciembre de 2006) v) cambio del jefe de educación social del proyecto 319 (en marzo de 2007 y septiembre de 2008)
<p>Perspectivas de la realización del Objetivo Superior</p>	<p>¿Sería el Objetivo Superior cumplido en el plazo de algunos años después de que el Proyecto se culmine? ¿En que grado la Meta Superior ya ha sido realizada hasta ahora?</p>	<p>Análisis de los logros del Proyecto</p>	<ul style="list-style-type: none"> La agricultura urbana se está difundiendo a través del Proyecto 319 y por otras entidades en otras zonas que San Cristóbal. Pero no hay datos que muestren en qué grado se haya mejorado la condición nutricional a través de la agricultura urbana. El proyecto 319 se relaciona con el Plan de Desarrollo del actual gobierno distrital, por lo tanto está asegurada la continuidad durante la actual administración. Se espera que la técnica de la agricultura urbana, la técnica de la difusión, la educación nutricional y la metodología para fortalecer la alianza entre entidades relacionadas se apliquen en otras localidades y que contribuyan a la realización de la meta superior. Se espera que la técnica de la agricultura urbana, la técnica de la difusión, la educación nutricional y la metodología para fortalecer la alianza entre entidades relacionadas se apliquen en otras localidades y que contribuyan a la realización de la meta superior. El proyecto 319 se relaciona con el Plan de Desarrollo del actual gobierno distrital, por lo tanto está asegurada la continuidad durante la actual administración. Pero por otro lado, no se ha definido suficientemente cómo se aplica y aprovecha el resultado del Proyecto de JICA. Como la continuidad del Proyecto 319 está asegurada en este momento, la meta superior está relacionada con la meta del Proyecto. Hasta ahora se han presentado los siguientes cambios del personal. Es algo que es difícil de evitar: <ul style="list-style-type: none"> i) cambio del director del JBB (en noviembre de 2006, febrero y septiembre de 2008) ii) cambio del subdirector técnico (en noviembre de 2006 y septiembre de 2008) iii) cambio del coordinador del proyecto 319 (en mayo de 2008, enero y marzo de 2009) iv) cambio del jefe técnico del proyecto 319 (en diciembre de 2006) v) cambio del jefe de educación social del proyecto 319 (en marzo de 2007 y septiembre de 2008)
<p>Causalidad entre el Objetivo del Proyecto y el Objetivo Superior</p>	<p>¿El Objetivo General se distancia del Objetivo Específico? ¿Han sido adecuadas las condiciones externas para lograr el Objetivo Superior? ¿Qué tipo de influencia se observa?</p>	<p>Análisis de los logros del Proyecto</p>	<ul style="list-style-type: none"> Como la continuidad del Proyecto 319 está asegurada en este momento, la meta superior está relacionada con la meta del Proyecto. Hasta ahora se han presentado los siguientes cambios del personal. Es algo que es difícil de evitar: <ul style="list-style-type: none"> i) cambio del director del JBB (en noviembre de 2006, febrero y septiembre de 2008) ii) cambio del subdirector técnico (en noviembre de 2006 y septiembre de 2008) iii) cambio del coordinador del proyecto 319 (en mayo de 2008, enero y marzo de 2009) iv) cambio del jefe técnico del proyecto 319 (en diciembre de 2006) v) cambio del jefe de educación social del proyecto 319 (en marzo de 2007 y septiembre de 2008)

Otras repercusiones	¿Hay algunos impactos positivos o negativos del Proyecto?	<p>¿La AU continuará con respaldo político a nivel Distrital?</p> <p>¿Hay algunos factores externos nuevos</p> <p>Influencias en el establecimiento de las políticas y la preparación de las legislaciones, institución, y normas</p> <p>Influencias en el aspecto cultural y social, como el género, derechos humanos, y pobreza</p> <p>Influencias en los grupos focalizados y otros</p>	<p>vi) cambio del coordinador territorial y técnicos de la Localidad de San Cristóbal (en 2007 no se renovó el contrato con dos técnicos y uno de ellos fue despedido prácticamente. En diciembre de 2008 fue terminado el contrato del equipo completo. Hasta ahora todavía en el proceso de refirmar los contratos.</p> <p>vii) cambio del jefe de la tecnología limpia (fue abolido este cargo en febrero de 2008)</p> <ul style="list-style-type: none"> No hay cambio de la prioridad sobre la agricultura urbana en la política de la administración distrital. No se encuentra en especial. Como uno de los impactos destacados del Proyecto es la integración social. Muchos de los actores del proyecto mencionaron como impactos sociales del Proyecto la recuperación de la unión familiar, el fortalecimiento del tejido social y la construcción de la alianza entre organizaciones relacionadas que antes actuaban separadamente. Además de lo mencionado, por parte de diferentes actores de la agricultura urbana se destacaron los siguientes impactos: <ul style="list-style-type: none"> se ha mejorado la posición de las mujeres en el hogar se ha despertado la conciencia sobre el medio ambiente y la seguridad de los alimentos gracias a la práctica de cultivo orgánico con la difusión de la agricultura urbana se generó el movimiento para impulsar la agricultura al nivel de la política pública inicialmente las hortalizas cultivadas eran para el autoconsumo, pero empezaron a ofrecer y vender las sobrantes en ferias y eventos el personal de contraparte capacitado y luego retirado del JBB se mantiene alrededor del tema de la agricultura urbana en diferentes organizaciones como ONGs, y a través de ellos se ha fortalecido la relación entre diferentes entidades se mantiene una comunicación permanente entre los exbecarios y el ex personal de contraparte fuera el JBB y ellos están aplicando la técnica del desarrollo social introducido por el Proyecto en las entidades a que pertenecen actualmente.
---------------------	---	--	--

<p>Base política e institucional</p>	<p>¿Se mantiene la política después de terminar el Proyecto?</p>	<p>Política y lineamiento del país y alcaldía de Bogotá</p>	<ul style="list-style-type: none"> Según las siguientes razones, se puede decir que se continuará el apoyo para la agricultura urbana por lo menos durante la administración actual: <ul style="list-style-type: none"> (1) del nivel municipal y distrital La agricultura urbana se desarrolla en muchos municipios del país tales como Bogotá, Medellín y Manizales. El proyecto de la agricultura urbana se realizaba bajo la política de la seguridad alimentaria y nutricional durante la administración anterior. Política: Bogotá Sin Indiferencia Programa: Bogotá Sin Hambre En la actual administración que inició en año 2008 no hay cambio en el lineamiento de la política. Actualmente bajo los siguientes nombres se desarrolla la política relacionada: <ul style="list-style-type: none"> Política: Bogotá Positiva Programa: Bogotá Bien Alimentada (2) del nivel nacional En el nivel nacional no hay política de la agricultura urbana, pero como la Resa Urbana de la Acción Social continúa el apoyo a proyectos de la agricultura urbana se espera fortalecer la relación de cooperación de aquí en adelante.
<p>Base organizacional y financiera</p>	<p>¿Está firme y estable la base política e institucional para difundir el modelo del Proyecto?</p>	<p>Situación de la preparación de las legislaciones y regulaciones</p>	<ul style="list-style-type: none"> Como la agricultura urbana es un concepto relativamente nuevo, en el POT establecido no hay referencia sobre este tema. Teniendo en cuenta el desarrollo que ha tenido la agricultura urbana en estos últimos años, se requiere que en la revisión del POT se haga reconocimiento adecuado de la misma. Para este fin se está elaborando una propuesta para el debido desarrollo de la agricultura urbana por parte de JBB, Proyecto e IPES.
<p>Base organizacional y financiera</p>	<p>¿Está firme y estable la base organizacional para mantener y avanzar los resultados del Proyecto?</p>	<p>Situación de la colocación de los recursos humanos, el proceso de toma de decisión, la estructura de implementación, etc.</p>	<ul style="list-style-type: none"> El JBB está dispuesto a seguir trabajando activamente en el tema de la agricultura urbana. Realiza gestión necesaria con el fin de que la promoción de la agricultura se figure como una política del Distrito de Bogotá y la misión del JBB, mostrando la ventaja de la agricultura urbana que no se limita solamente de la seguridad alimentaria y nutricional. Con este cambio se podrá emplear funcionarios de la planta para la agricultura urbana. Por otro lado, cada alcaldía menor elabora un plan de acción anual del Plan de Desarrollo de Bogotá y ejecuta el presupuesto. Cada alcaldía menor escoge una entidad ejecutora de la agricultura urbana como el JBB, ONGs, y universidades, y a través de la entidad ejecutora realiza el plan establecido. En caso de la Localidad de San Cristóbal estableció convenio con el JBB. El JBB realizaba actividades con los recursos que aportaba la Alcaldía Menor y la Alcaldía Menor hacía supervisión de las actividades según el informe presentado por el JBB. Sin embargo, por la demora de la ejecución del presupuesto del año 2007, a partir de septiembre de 2008 la Alcaldía Menor establece convenio con otras ONGs o universidad, pero no con el JBB. Por lo tanto, después de la terminación del Proyecto, las actividades de difusión por parte del JBB se reducirán en la Localidad de San Cristóbal. En cuanto a la asistencia al desarrollo de la técnica del cultivo realizado por el Proyecto 319, como no se presentó el cambio del personal encargado hay mucha posibilidad de asegurar la sostenibilidad de resultados del Proyecto En cuanto a la transferencia de la técnica para el desarrollo social, a pesar de que en la evaluación intermedia se destacó este tema como uno de los resultados efectivos del Proyecto, actualmente en el JBB

<p>no se queda ninguno de los becarios capacitados en Japón y el personal capacitado directamente por el experto se retiró al final del 2008. Por lo tanto, es necesario establecer un mecanismo para asegurar la transferencia y la aplicación de los resultados del Proyecto en el interior del JBB.</p> <ul style="list-style-type: none"> • Por otro lado, asistiendo indirectamente el establecimiento de la red, se puede formar una red interinstitucional de profesionales y técnicos, la cual podrá funcionar como una infraestructura personal que sostenga la agricultura urbana en Bogotá. • El JBB realiza gestión necesaria con el fin de que el proyecto de la agricultura se figure como un programa, mostrando la ventaja de la agricultura urbana que no se limita solamente de la seguridad alimentaria y nutricional. Está dispuesto a seguir trabajando activamente en el tema de la agricultura urbana. • El presupuesto al Proyecto de 319 después del año 2009 hasta 2012 está asegurado por la administración distrital. 	<p>Lineamiento de Alcaldía Mayor de Bogotá y JBB sobre expansión de AU utilizando el Proyecto</p> <p>Plan presupuestario en el futuro, costo necesario para difundir el modelo en otras zonas</p>	<p>¿JBB tiene suficiente sentido de apropiación sobre el Proyecto?</p> <p>¿Está firme y estable la base presupuestaria para mantener y avanzar los resultados del Proyecto?</p>	<p>no se queda ninguno de los becarios capacitados en Japón y el personal capacitado directamente por el experto se retiró al final del 2008. Por lo tanto, es necesario establecer un mecanismo para asegurar la transferencia y la aplicación de los resultados del Proyecto en el interior del JBB.</p> <ul style="list-style-type: none"> • Por otro lado, asistiendo indirectamente el establecimiento de la red, se puede formar una red interinstitucional de profesionales y técnicos, la cual podrá funcionar como una infraestructura personal que sostenga la agricultura urbana en Bogotá. • El JBB realiza gestión necesaria con el fin de que el proyecto de la agricultura se figure como un programa, mostrando la ventaja de la agricultura urbana que no se limita solamente de la seguridad alimentaria y nutricional. Está dispuesto a seguir trabajando activamente en el tema de la agricultura urbana. • El presupuesto al Proyecto de 319 después del año 2009 hasta 2012 está asegurado por la administración distrital.
<p>Base técnica</p> <p>¿Ha sido aceptada la capacitación dirigida a los técnicos de JBB y beneficiarios?</p>	<p>¿Ha sido aceptada las técnicas de AU y trabajo comunitario (incluyendo DSLP) por los técnicos de JBB, los beneficiarios y otros actores relacionados?</p> <p>¿Hay problema y/o dificultad en el nivel de conocimiento, factores cultural y convencional, etc?</p>	<p>¿Está incluido el mecanismo de difusión en el Proyecto?</p>	<p>(1) Técnica del cultivo Este Proyecto apoyó el desarrollo y la difusión de la técnica del cultivo que realizaba el Proyecto 319. Esta técnica fue difundida entre los beneficiarios.</p> <p>(2) Desarrollo social En el interior del JBB la metodología de DSLP tuvo gran aceptación y se programaba su aplicación no solo en proyectos de la agricultura urbana sino también en otros proyectos. Sin embargo por el cambio de directivos del JBB y el retiro del personal de contraparte (o terminación del contrato) no se ha concretado. Es necesario definir alternativas para asegurar la continuidad de este resultado.</p> <ul style="list-style-type: none"> • En la capacitación participaron técnicos de otras localidades y funcionarios del JBB, sin embargo, como se presenta frecuentemente el cambio del personal no se pudo confirmar en qué grado se ha aplicado la técnica transferida por parte de otros técnicos. • Se estableció una página Web sobre la agricultura urbana. • El JBB realiza actividades de promoción y publicidad y el Proyecto de JICA se presentó a través de medios de comunicación. • Se celebró "Encuentro Internacional & Feria Distrital de Agricultura Urbana" • Como se mencionó anteriormente no se ha concretado para establecer un mecanismo de difusión debido al cambio del personal.
<p>Base social, cultural, y medio ambiente</p> <p>¿Hay posibilidad de impedir la sostenibilidad debido a la falta de consideración de género, pobreza, las personas vulnerables, y medio ambiente?</p>	<p>Situación de las relaciones públicas</p> <p>Esfuerzos para la sistematización</p> <p>Factores que contribuyen o impiden la sostenibilidad</p>	<p>¿Hay posibilidad de impedir la sostenibilidad debido a la falta de consideración de género, pobreza, las personas vulnerables, y medio ambiente?</p>	<p>En el sitio objeto del Proyecto se fortaleció la organización comunitaria, por lo tanto se espera la continuación de las actividades.</p> <ul style="list-style-type: none"> • La mayoría de la población desplazada tiene experiencias de agricultura y el cultivo es algo familiar para ellos. Por lo tanto están contentos de poder cultivar en espacios pequeños incluyendo recipientes de plástico. Por eso se espera que se continúen las actividades.

Anexo 4: Resultados de la Inversión

<Inversión por Japón>

(1) Envío de expertos.

Nombre del experto	Tema	Período del envío	Entidad a que pertenecía antes del envío
Asao MASE	Fortalecimiento de la comunidad/Coordinación de trabajo	Desde el 31 de mayo de 2006 hasta el 30 de mayo de 2008	Nihon Fukushi University Posgrado
Asao MASE	Administración del Proyecto/Fortalecimiento de la comunidad	Desde el 31 de mayo de 2008 hasta el 30 de mayo de 2009	Nihon Fukushi University Posgrado

(2) Resultados de la recepción de becarios de contraparte para cursos de capacitación en Japón

Nombre del becario	Período de recepción	Tema de capacitación	Contenido de la capacitación y entidad	Cargo de entonces	Cargo actual, fecha de retiro y destino
Claudia Marcela Sanchez	De Enero 27 a Marzo 17 de 2007	Desarrollo Social Local Participativo	Curso General "Teoría y Práctica del Desarrollo Social Local Participativo"	Coordinador del Proyecto de AU (Agricultura Urbana)	Se retiró en febrero de 2008. Actualmente es consultora independiente.
Paula Martínez	De Enero 27 a Marzo 17 de 2007	Desarrollo Social Local Participativo	Curso General "Teoría y Práctica del Desarrollo Social Local Participativo"	Proyecto de AU, Coordinador Técnico de Socio Pedagógico	Se retiró en marzo de 2007. Actualmente es asesor de la Secretaría de Ambiente de Bogotá.
Jairo Silva	De Enero 26 a Marzo 20 de 2009	Desarrollo Social Local Participativo	Curso General "Teoría y Práctica del Desarrollo Social Local Participativo"	Proyecto de AU, Encargado de planteamiento de la política	Después de volver a Colombia no se ha firmado el contrato.
Luis Bernaldo Cañon	De Junio 18 a Octubre 5 de 2007	Regional	Curso Regional "Metodología de difusión de la Agricultura Orgánica como apoyo a los agricultores de pequeña escala"	Coordinador Zonal de San Cristóbal	Coordinador zonal del Proyecto de AU
Sandra Rodríguez Urrea	De Junio 18 a Octubre 5 de 2008	Regional	Curso Regional "Metodología de difusión de la Agricultura Orgánica como apoyo a los agricultores de pequeña escala"	Coordinadora Zonal de Usme	Se retiró en diciembre de 2008. Actualmente es planeador de eventos del Proyecto.
A parte de los becarios arriba participados con el fondo del Proyecto, una becaria siguiente fue enviada con el fondo del programa de becarios de JICA.					
Karen Benítez Cocunubo	De Agosto 6 a Agosto 23 de 2008	Agricultura Rural	Programa de Capacitación para Líderes Jóvenes/Paises latinoamericanos	Técnico de San Cristóbal	Técnico zonal. Pero no se ha firmado el contrato. Está en trámite.

(3) Resultado de la donación de equipos y el estado de uso

1) Equipos donados

	Fecha de instalación	Descripción del equipo	Modelo	Marca	Precio de compra (COP)	Precio de compra (Yen)	Sección que lo usa	Lugar de instalación	Está activo o no
1	Julio 2006	Vehículo 4x4	Prado Sumo	Toyota	58,092,428	2,614,159	Proyecto AU	Parqueadero o al lado de la fachada	Sí
2	Marzo 2007	Escaner	DR-2580 C	CANON	3,000,000	168,000	Proyecto AU	Oficina del experto	Sí
3	Marzo 2007	GPS portátil	Recon XC Edition	Timble	12,555,892	703,130	Proyecto AU	Sección de arbolización	Sí
4	Marzo 2007	Fotocopiadora	BIZ HUP 250	Konica Minolta	17,399,998	974,400	Proyecto AU	Oficina del experto	Sí
5	Marzo 2007	Computador de escritorio	RQ908LA #ABM	Hewlett Packard	3,120,000	174,720	Proyecto AU	Oficina de Técnicos	Sí
6	Marzo 2007	Computador de escritorio	RQ908LA #ABM	Hewlett Packard	3,120,000	174,720	Proyecto AU	Oficina de Técnicos	Sí
7	Marzo 2007	Computador portátil	RN825LA ABM	Hewlett Packard	5,050,000	282,800	Proyecto AU	Oficina del experto	Sí
8	Marzo 2007	Computador portátil	RN825LA ABM	Hewlett Packard	5,050,000	282,800	Proyecto AU	Oficina de sub-director	Sí
9	Marzo 2007	Impresora láser	Q6455A	Hewlett Packard	810,000	45,360	Proyecto AU	Oficina del experto	Sí
10	Marzo 2007	Impresora láser	Q6455A	Hewlett Packard	810,000	45,360	Proyecto AU	Oficina de Técnicos	Sí
11	Marzo 2008	Centro de capacitación			177,137,733	9,919,713	Área de exposición sobre desarrollo sostenible		Sí
Total					286,146,051	15,385,162			

2) Desde el presupuesto para el fortalecimiento de las actividades locales

	Fecha de instalación	Descripción del equipo	Modelo	Marca	Precio de compra (COP)	Precio de compra (Yen)	Sección que lo usa	Lugar de instalación	Está activo o no
p1	Enero 2007	Proyector LCD	EMP-S4	EPSON	2,449,000	139,593	Proyecto AU	Oficina del experto	Sí
p2	Enero 2007	Firmadora digital	DCR-DVD 205	SONY	1,570,000	89,490	Proyecto AU	Oficina del experto	Sí
p3	Enero 2007	Cámara digital	DSC-W50	SONY	777,000	44,289	Proyecto AU	Oficina del experto	Sí
p4	Enero 2007	Cámara digital	DSC-W50	SONY	777,000	44,289	Proyecto AU	Oficina del experto	Sí
p5	Enero 2007	Cámara digital	DSC-W50	SONY	777,000	44,289	Proyecto AU	Oficina del experto	Sí
p6	Enero 2007	Cámara digital	DSC-W50	SONY	777,000	44,289	Proyecto AU	Oficina del experto	Sí
p7	Dic. 2008	Bomba de agua	WG-110	Wolfgang	121,200	6,908	Área de exposición sobre desarrollo sostenible		Sí
Total					7,428,200	413,147			

(4) Seminarios realizados

1) Seminarios realizados en Colombia

Año fiscal	Nombre del Curso (Tema)	Fecha	Duración	Número de participantes	Personas objeto del seminario	Nota
2006	Planeación y realización de la política y la estrategia de la agricultura urbana con la participación de diferentes actores	De Nov. 27 a Dic. 04		36	Funcionarios relacionados con la agricultura urbana del Jardín Botánico y la Universidad del Rosario, y habitantes de la localidad Bosa	Taller organizado por IPES ¹ , Jardín Botánico de Bogotá y Universidad del Rosario
2007	Planeación de actividades la agricultura urbana de la localidad de San Cristóbal basada en el desarrollo de la comunidad local	De mayo 29 a junio 01		43	Acción Social, Alcaldía Menor de San Cristóbal, Universidad del Rosario y funcionarios encargados del Jardín Botánico encargados de San Cristóbal	Participación del proyecto de Guatemala PROETTAPA (1 experto y 4 personas contraparte)
2007	Curso para Técnicos y Promotores sociales	Junio 04, Junio 25, Julio 09, Julio 30, Sep. 10	De Junio a Dic. de 2007	49~35	Actores relacionados con el Proyecto de Agricultura Urbana del Jardín Botánico	
2007	Taller para fortalecer la meza redonda de la agricultura urbana de la localidad de San Cristóbal	Sep. 06, Oct. 04, Nov. 01, Dic. 06, Feb. 07, Marzo 06	De Sep. de 2007 a Dic. de 2008	42~25	Asistentes a la Mesa Redonda de Agricultura Urbana (agricultores urbanos, alcaldías menores, etc.)	
2007	Curso sobre el análisis de la sociedad	Octubre 09 y 10		19	Funcionarios de IPES ² y Técnicos del Jardín Botánico	Se realizó en Lima, Perú, como una actividad del curso
2008	Curso sobre técnicas de difusión – para fortalecimiento de la capacidad de la comunidad y mejoramiento de ensayos e investigaciones	Abril 21 Abril 28	2días	33 27	Personas relacionadas al Proyecto de Agricultura Urbana	Se realizó dos veces el mismo curso.
2008	Capacitación sobre técnicas de cultivo	Mayo 12	1día	14	Personas relacionadas al Proyecto de Agricultura Urbana	Se realizó según el planteamiento formado en el curso mencionado.
2008	Capacitación sobre cultivos verticales	Sept. 8	1día	12	Personas relacionadas al Proyecto de Agricultura Urbana	
2008	Capacitación sobre fortalecimiento de la comunidad	Sept. 22, 23, 25 y 26	4días	35	Personas relacionadas al Proyecto de Agricultura Urbana	
2008	Nutrición y poscosecha	Octubre 27	1día	17	Personas relacionadas al Proyecto de Agricultura Urbana	

¹ Promoción del Desarrollo Sostenible Perú: ONG de Perú que realizan actividades para difundir la agricultura urbana en Latinoamérica entera.

² Igual que arriba

Cursos en los que el experto japonés y el personal de contraparte participaron en la planeación y el personal contraparte también participó en el evento)

Año fiscal	Nombre del Curso (Tema)	Fecha	Duración	Número de participantes	Personas objeto del seminario	Nota
2007	Seguimiento a los Cursos grupales "Teoría y Práctica del Desarrollo Social Participativo" y "Planeación y Administración de Proyectos del Desarrollo Social Participativo"	De Enero 21 a Enero 23	4 días	21	Exbecarios de países latinoamericanos del mismo curso, nuevos becarios del curso, personal contraparte del proyecto	Participaron un especialista y un experto de Guatemala El personal contraparte participaron como oyente
2008	Fortalecimiento de individuos, organizaciones y sociedad	Oct. 21, 23 y 28	3 días	10	Exbecarios y funcionarios de JICA	Curso para exbecarios

2) Cursos realizados en países vecinos

Año fiscal	Nombre del Curso (Tema)	Fecha	Duración	Número de participantes	Personas objeto del seminario	Nota
2006	Capacitación sobre la Agricultura Urbana	Agosto 6 a 13	8 días	16	Director, subdirector, y personas relacionadas con el Proyecto de Agricultura Urbana de JBB	Se realizó en Argentina
2007	Capacitación sobre la Agricultura Urbana	Octubre 8 a 13	6 días	6	Técnicos de San Cristóbal	Se realizó en Perú.
2008	Capacitación sobre la Agricultura Urbana	Nov 11 a 14	4 días	7	Director, subdirector, coordinador del Proyecto de Agricultura Urbana	Se realizó en Cuba.

(5) Gastos locales asumidos por Japón

Año	Rubro	Valor (COP)	Valor (yen)	Nota
2006	Fortalecimiento de actividades locales	67,761,110	3,198,000	
2007	Fortalecimiento de actividades locales	63,278,190	3,894,000	
2008	Fortalecimiento de actividades locales	137,587,344	6,654,000	
2009	Fortalecimiento de actividades locales	117,000,000	4,797,000	
Total de Fortalecimiento de actividades locales		385,626,644	18,543,000	

2006	Donación de equipos	109,008,318	15,385,162	Computadores, etc.
2007	Donación de equipos	177,137,733	413,147	Costo de construcción del centro de capacitación
Total de donación de equipos		281,736,443	15,798,309	

Total de fortalecimiento de actividades locales y donación de equipos

671,772,695 (COP)

34,341,309 (Yen)

Handwritten signature and date: 13/11/08

<Inversión de Colombia>

(1) Asignación del personal de contraparte (C/P)

Nombre y apellido de C/P y su cargo	Cargo	Período con el Proyecto JICA (asignación)	Período de trabajo en el JBB	Antigüedad en la entidad ejecutora
Martha Liliana Perdomo Ramirez	Director	Jun. 2006 – Nov. 2006	Oct. 2004 – Nov. 2006	
Rolando Higuera Rodriguez	Director	Dic. 2006 – Feb. 2008	Dic. 2006 – Feb. 2008	
Paola Liliana Rodriguez Suarez (E)	Director	Feb. 2008 – Sep. 2008	Feb. 2008 – Sep. 2008	
Herman Martinez Gómez	Director	Sep. 2008 – hasta la fecha	Sep. 2008 – hasta la fecha	
Rolando Higuera Rodriguez	Subdirectores Técnicos	Jun. 2006 – Nov. 2006	Ene. 2006 – Nov. 2006	
Vladimir Forero Serrano	Subdirectores Técnicos	Dic. 2006 – Ene. 2007	Dic. 2006 – Ene. 2007	
Jorge Calderon Vargas	Subdirectores Técnicos	Ene. 2007 – Sep. 2008	Ene. 2007 – Sep. 2008	
Edgar Alberto Rojas	Subdirectores Técnicos	Sep. 2008 – Sep. 2008	Sep. 2008 – Sep. 2008	
Federico de Jesús Bula Gutiérrez	Subdirectores Técnicos	Sep. 2008 – hasta la fecha	Sep. 2008 – hasta la fecha	
Claudia Marcela Sánchez	Líder del proyecto	Jun. 2006 – Ene. 2008	Ago. 2005 – Ene. 2008	Se retiró.
Rafael Amaya Citiva	Líder del proyecto	May. 2008 – Dic. 2008	May. 2008 - hasta la fecha	Actualmente está encargado de la coordinación de planeación de eventos.
Dora Peña Cano	Líder del proyecto	Ene. 2009 – Mar. 2009	Sep. 2008 – Mar. 2009	Trabaja como candidato de coordinador desde Feb. de 2009. No fue nombrado oficialmente.
Jaime Guillermo Mora Florez	Líder del proyecto	Mar. 2009 - hasta la fecha	Oct. 2008 hasta la fecha	
Antonio Jose Vélez Garcia	Coordinador Técnico	Ene. 2006 – Ene. 2007	Ago. 2005 – Dic. 2006	Actualmente trabaja en una ONG de desarrollo rural.
Luis Bernardo Cañón	Coordinador Zonal	Jun. 2006 – Dic. 2008	Ene. 2003 - hasta la fecha	Coordinador Territorial
Paula Martínez	Coordinadora Social	Ene. 2006 – Mar. 2007	Ene. 2005 – Mar. 2007	Actualmente es asesor del Secretario de Ambiente de Bogotá
Angélica Peñuela	Coordinadora Tecnologías Limpias	Ene. 2006 – Ene. 2008	Ene. 2006 – Ene. 2008	Actualmente trabaja en el Ministerio de Ambiente.
Claudia González Rojas	Coordinadora de Investigación	Ene. 2006 – Ene. 2008	Oct. 2001 – Ene. 2008	Se retiró
Gloria Bustamante	Profesional Social	Jun. 2006 – Nov. 2008	Oct. 2004 – Nov. 2008	Actualmente trabaja en una ONG de Desarrollo. Realiza actividades relacionadas a la Agricultura Urbana.
Karen Benítez	Técnico	Jun. 2006 – Dic. 2008	May. 2005 – hasta la fecha	Técnico
Lara Jazmin Yara	Técnico	Mar. 2007 – Dic. 2008	Abr. 2005 - hasta la fecha	Técnico
Augusto Méndez	Técnico	Jun. 2006 – Dic. 2007	Ene. 2006 – Dic. 2007	Se retiró

Alejandro Ardila	Técnico	Jun. 2007 – Dic. 2008	May. 2007 - hasta la fecha	Técnico
Oriana Sepúlveda	Promotora Social	Jun. 2007 – Jun. 2008	May. 2007 – Jun. 2008	Se retiró.
Patricia Torres	Profesional Social	Jun. 2006 – Dic. 2008	Sep. 2006 – Dic. 2008	Se retiró.
Andres Bernal	Técnico	Ene. 2006 – Dic. 2006	Ene. 2006 – Dic. 2006	Se retiró.
Alberto Mogollon	Técnico	Ene. 2006 – Dic. 2006	Ene. 2006 – Dic. 2006	Técnico
Carlos Sarmiento	Técnico	Sep. 2006 – Dic. 2006	Sep. 2006 – Dic. 2006	Se retiró.
Diego Ospina	Tecnico	Feb. 2008 – Dic. 2008	Feb. 2008 – Dic. 2008	Técnico
Orfa Guerra	Promotora	Sep. 2006 – Dic. 2006	Sep. 2006 – Dic. 2006	Se retiró.
William Orjuela	Promotor	Feb. 2008 – Dic. 2008	Feb. 2008 – Dic. 2008	Se retiró.
Camila Viatela	Promotora	Ene. 2006 – Dic. 2006	Ene. 2006 – Dic. 2006	Se retiró.
Hacel Gómez	Profesional Social	Dic. 2008 – Feb. 2009	Dic. 2008 - Feb. 2009	Se retiró.
Pavel Santodomingo	Profesional Social	Dic. 2008 – Feb. 2009	Dic. 2008 – Feb. 2009	Se retiró.
Catalina Quintero	Prof. Alimentación	Abr. 2008 – Dic. 2008	Abr. 2008 – Dic. 2008	Prof. Alimentación
Bibiana Quecan	Prof. Alimentación	May. 2008 – Dic. 2008	May. 2008 – Dic. 2008	Prof. Alimentación

(2) Resultados de la inversión de Colombia (COP)

Item	2006		2007		2008	
	COP	Yen	COP	Yen	COP	Yen
Gastos de personal	87,450,000	4,365,504	118,851,000	6,813,728	118,851,000	6,031,688
Artículos de consumo	42,802,127	2,136,682	173,349,000	9,938,098	173,349,000	8,797,462
Equipos y materiales	84,939,834	4,240,197	0	0	0	0
Otros	34,197,435	1,707,136	29,220,000	1,675,183	29,220,000	1,482,915
Total	249,389,396	12,449,519	321,420,000	18,427,009	321,420,000	16,312,065

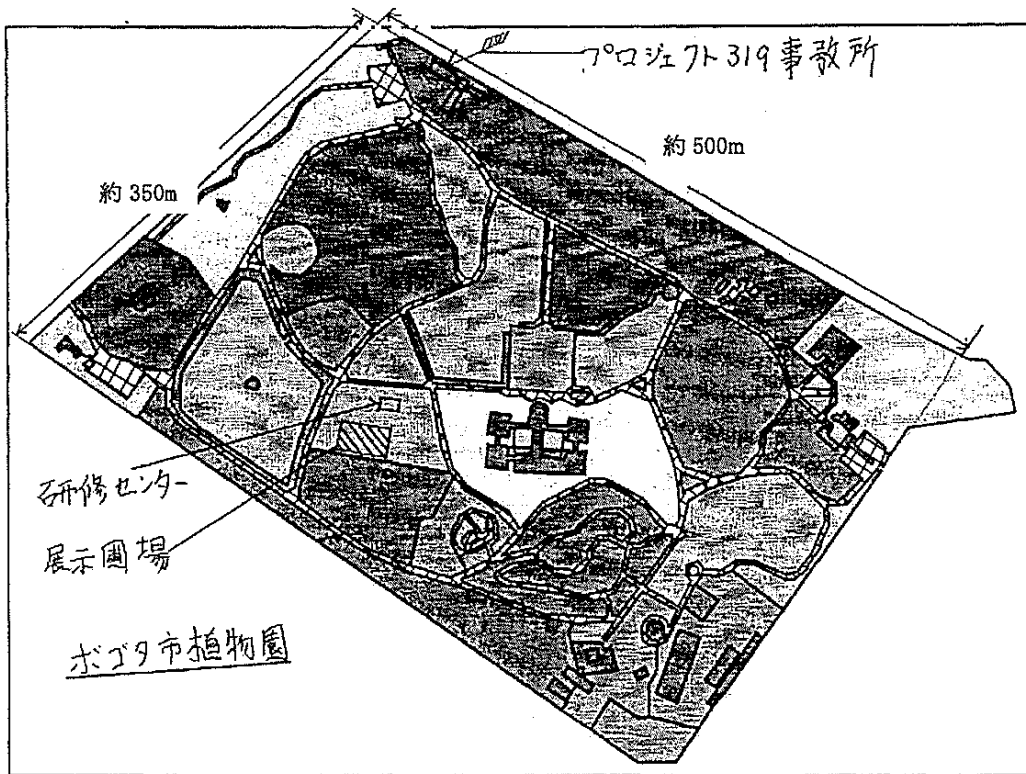
※Para obtener el valor en yenes se aplicó la tasa de cambio promedio anual (12 meses) establecida por JICA para cada año como se muestra en continuación:

Año 2006: COP1=¥0.04992, Año2007:COP1=¥0.05733, Año2008:COP1=¥0.05075

(3) Terreno, edificio, oficina e instalación suministrados por Colombia y su localización

Se suministró una oficina como oficina del Proyecto de JICA dentro del edificio para el Proyecto de Agricultura Urbana (Proyecto 319)

Oficina del Proyecto 319



Centro de capacitación

Finca de Exposición

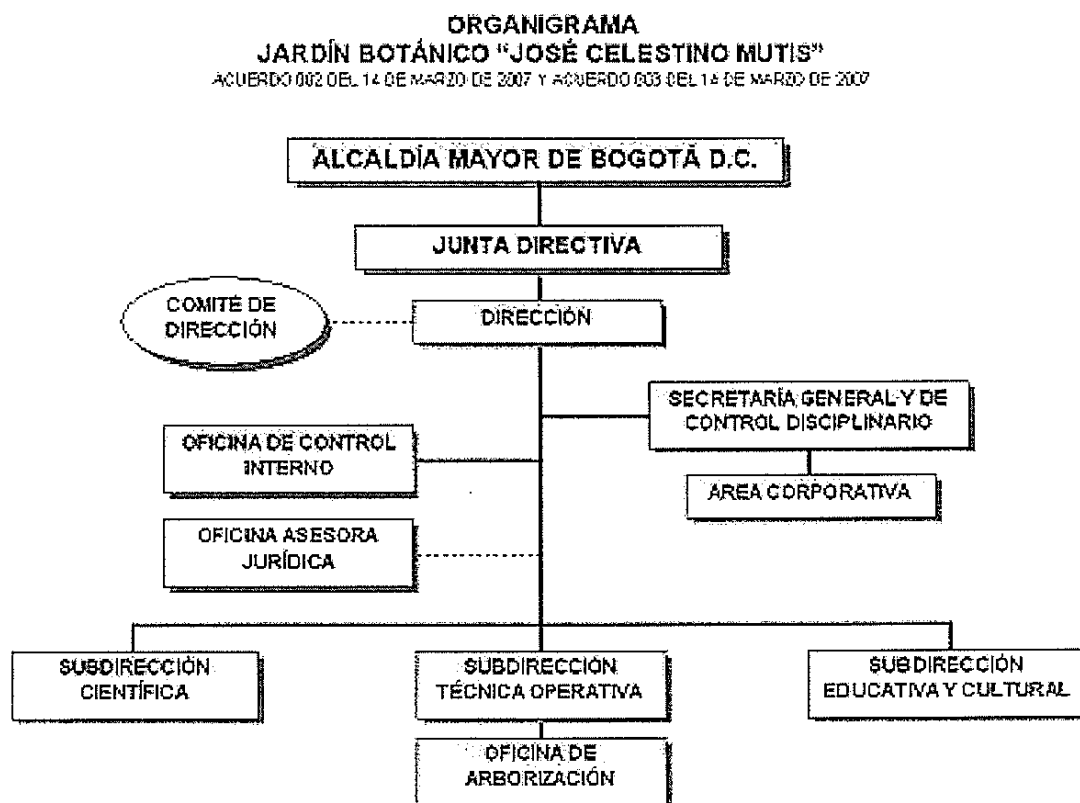
Jardín Botánico de Bogotá

Dibujo de la Oficina del Proyecto 319

Oficina de Técnicos y administrador	Baño (Almacén)	Baño	Secretaria /recepción	Cocina	Almacén	Sala de reunión/Taller	Oficina de Técnicos y administrador	2m
	Oficina del Proyecto de JICA		Entrada	Oficina del líder del Proyecto 319		Subdirección técnica operativa y Tomología		1.3m
	3.8m	3.5m		3.8m	4m			4m

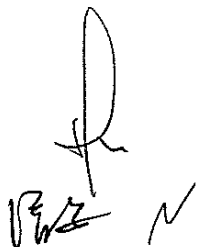
Anexo 5: Organigrama de la entidad ejecutora colombiana

Organigrama del Jardín Botánico (No hubo cambio desde el inicio del proyecto)



Anexo 6: Lista de Entrevistados

- 14 de Abril **Ana Yibby Forero Torres**, Subdirectora de Investigación, Instituto Nacional de Salud (INS)
Liliana Ramirez, Coordinadora de Acción Integral de Atención a Población Desarraigadas, Universidad Rosario
- 15 de Abril **Rosa Elva Duras**, Beneficiario de Barrio Santa Rosa
Claudia L. Menza, Beneficiario de Barrio Santa Rosa
Martha Cecilia Campos, Beneficiario de Barrio Santa Rosa
William Roberto Herrera Hernández, Alcalde de San Cristóbal
Luis Medina, Beneficiario de Parque Entrenubes,
- 16 de Abril **Herman Martínez Gómez**, Director, Jardín Botánico de Bogotá (JBB)
Julio Cesar Pulido, Asesor Científico y Encargado de Planificación, JBB
Edna Rángel, Secretaria General, JBB
Federico Hura, Director Técnico, JBB
Luis Bernardo Cañon, Coordinador Territorial, JBB
Claudia Marcela Sánchez, Coordinadora de Gestión Ambiental, IPES Colombia (Ex-líder del proyecto 319, JBB)
Catalina Quintero Ferrer, Profesional, JBB
Bibiana Alvarez, Profesional, JBB
Patricia Torres, Experto de educación, JBB (no tiene contrato vigente)
Jazmín Yara Serrano, Técnico, JBB (no tiene contrato vigente)
Karen Stephanie Benítez, Técnico, JBB (no tiene contrato vigente)
Gloria Bustamante, Coordinadora, Asociación Manos Amigas (Ex-experto de educación, JBB)
Alejandro Ardila, Técnico, JBB (no tiene contrato vigente)
Augusto Méndez, Técnico de Apoyo, Terra-Nova (Ex-técnico de JBB)
- 17 de Abril **Calorina Avellaneda**, Asesora, RESA, Acción Social
Jorge Ardila, Asesor, RESA, Acción Social
Edgar Alberto Rojas, Subdirector de Selvicultura Flora y Fauna Silvestre, Secretaria Distrital de Ambiente (SDA)
Juan Carlos Gutierrez, Profesional especializado en Selvicultura Flora y



Fauna Silvestre, Secretaria Distrital de Ambiente (SDA)

Alexandra Rivera, Encargada de Cooperación Internacional, Secretaria Distrital de Ambiente (SDA)

19 de Abril

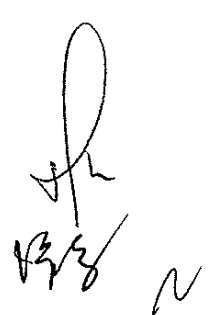
Ricardo Mero, Subdirector, DCI, Acción Social

Rosángela Correa, Asesora, DCI, Acción Social

Jorge Ardila, Asesor, RESA, Acción Social

Juanita Henao, UNPFA

Herman Martínez Gómez, Director, Jardín Botánico de Bogota (JBB)

Handwritten signature and initials in the bottom right corner of the page.